岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第377集

熊堂（くまどう）B遺跡第10次発掘調査報告書

盛岡南新都市開発整備事業関連遺跡発掘調査

地域振興整備公団岩手総合開発事務所
(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター

熊堂（くまどう）B遺跡第10次発掘調査報告書

盛岡南新都市開発整備事業関連遺跡発掘調査

序

岩手県には旧石器時代から近代までの数多くの埋蔵文化財包蔵地が各地に分布しており、平成12年度の岩手県教育委員会のまとめではその数9,000箇所を超えております。先人の残したこれらの埋蔵文化財を保護・保存していくことは、私たち県民に課せられた重大な責務であります。一方、豊かで快適な生活環境を実現するための地域開発もまた、県民の切実な願いであります。埋蔵文化財の保護・保存と開発との調和のとれた施策が今日の課題となっております。

財団法人岩手県文化振興事業団は、埋蔵文化財センターの創設以来、埋蔵文化財保護の立場にたって、岩手県教育委員会の指導および調整の下、開発事業によりやむを得ず消滅する遺跡について発掘調査を行い、その記録を保存する措置をとってまいりました。

本報告書は、盛岡南新都市開発整備事業に関連して、平成12年度に発掘調査を実施した熊堂B遺跡の調査結果をまとめたものであります。調査の結果、奈良時代の竪穴住居跡および土坑、平安時代の溝跡、それらに伴う土師器・須恵器などの遺物が発見され、貴重な資料を提供することができました。また、これまで行われた調査結果を併せ踏まえると、熊堂B遺跡の古代集落の様相が次第に明らかになりつつあり、北上川中流域における該期集落研究の一助となることと思われます。

本書が広く活用され、考古学の研究に寄与するとともに埋蔵文化財に対する関心と理解を一層深めることに役立つことを切に希望いたします。

最後になりましたが、発掘調査および報告書作成にご協力とご援助を賜りました地域振興整備公団岩手総合開発事務所、盛岡市教育委員会をはじめとする多くの関係機関・関係各位に深く感謝申し上げます。

平成14年2月

財団法人　岩手県文化振興事業団
理事長　村　上　勝　治

例　言

1．本報告書は岩手県盛岡市本宮字稲荷１ほかに所在する熊堂（くまどうだい）Ｂ遺跡の第10次発掘調査の結果を収録したものである。

2．本遺跡の発掘調査は、盛岡南新都市開発整備事業に伴い遺跡の一部が消滅するため、記録保存を目的として実施した緊急発掘調査である。調査は、地域振興整備公団岩手総合開発事務所と岩手県教育委員会事務局文化課（現・生涯学習文化課）の協議を経て、財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターが担当した。

3．岩手県遺跡登録台帳登載の遺跡番号は LE16－2118、遺跡略号はOKO－00－10である。なお、遺跡登録台帳に登載されている遺跡名は「本宮熊堂Ｂ遺跡」である。

4．発掘調査の期間・担当者・調査対象面積は次のとおりである。

　　平成12年４月14日～平成12年６月16日　千葉正彦・中田　迪　3,235㎡

5．室内整理の期間・担当者は次のとおりである。

　　平成12年11月１日～平成13年３月31日　千葉正彦

6．出土石器類の石材鑑定は、花崗岩研究会に依頼した。

7．基準点の測量・打設は、㈱岩手開発測量設計に委託した。

8．野外調査および室内整理・報告書作成にあたり、次の方々ならびに機関から指導・助言・協力をいただいた。（敬称略）

　　中村英俊（岩手県教育委員会）、鈴木聡（二戸市教育委員会）、古舘貞身（盛岡第四高校）、工藤徹（金田一中学校）、前田稔（福岡中学校）、早坂悟（彦部小学校）、盛岡市教育委員会

9．野外調査では地元盛岡市および滝沢村・紫波町の方々にご協力いただいた。

10．本報告書の執筆・編集・校正は当センター臨時職員の協力を得て、千葉が担当した。

11．本報告書では、国土地理院発行の次の地形図を使用した。

　　1／25,000　盛岡・小岩井農場・矢巾・南昌山

　　1／50,000　盛岡・日詰

12．調査で得られた出土遺物および調査の諸記録は、岩手県立埋蔵文化財センターで保管している。

13．調査成果の一部については現地説明会資料および「平成12年度岩手県埋蔵文化財発掘調査略報」（岩文振調報第370集）において公表したが、記載内容については本報告書が優先する。

目　次

序
例言

＜　本　　文　＞

Ⅰ　調査に至る経過 …… 2
Ⅱ　遺跡の立地と環境 …… 2
　1．位置と地形 …… 2
　2．地質と基本層序 …… 4
　3．周辺の遺跡 …… 6
Ⅲ　調査と整理の方法と経過 …… 15
　1．調査の経過 …… 15
　2．野外調査 …… 15
　3．整理方法 …… 17
　4．掲載方法 …… 18
Ⅳ　検出された遺構と遺物 …… 21
　1．竪穴住居跡 …… 21
　2．土坑 …… 38
　3．住居跡状竪穴遺構 …… 42
4．溝跡 …… 43
　5．その他の遺構 …… 47
　6．遺構外出土遺物 …… 47
Ⅴ　まとめと考察 …… 57
　1．遺物 …… 57
　2．遺構 …… 66
　3．遺跡 …… 74
報告書抄録 …… 107
職員名簿 …… 108

＜　表　＞

第1表　周辺の遺跡 …… 8
第2表　遺物観察表 …… 53
第3表　住居跡別土師器出土数 …… 61

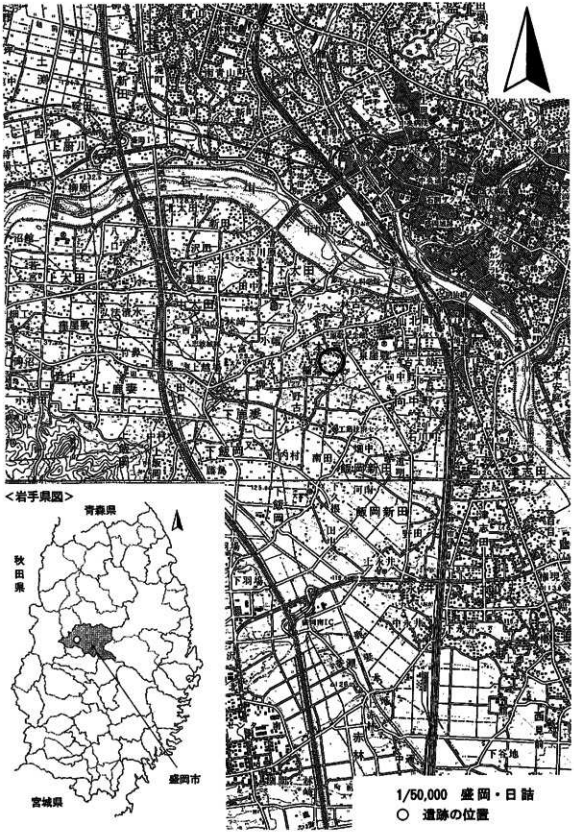
＜　図　版　＞

第1図　遺跡の位置 …… 1
第2図　調査区と周辺の地形 …… 3
第3図　地形分類 …… 4
第4図　調査区各地点の層序 …… 5
第5図　周辺の遺跡(1) …… 12
第6図　周辺の遺跡(2) …… 13
第7図　グリッド配置図 …… 16
第8図　凡例 …… 19
第9図　遺構配置図 …… 20
第10図　ＲＡ04(1) …… 22
第11図　ＲＡ04 …… 23
第12図　ＲＡ04出土遺物(1) …… 24
第13図　ＲＡ04出土遺物(2) …… 25
第14図　ＲＡ25 …… 27
第15図　ＲＡ25出土遺物(1) …… 28
第16図　ＲＡ25出土遺物(2) …… 29
第17図　ＲＡ26(1) …… 31
第18図　ＲＡ26(2)、出土遺物(1) …… 32
第19図　ＲＡ26出土遺物(2) …… 33
第20図　ＲＡ26出土遺物(3) …… 34
第21図　ＲＡ27、出土遺物(1) …… 36
第22図　ＲＡ27出土遺物(2) …… 37

第23図　ＲＤ60･61･62･63･64、ＲＺ09 …… 39
第24図　ＲＤ65･66･67･68 …… 41
第25図　ＲＥ09、ＲＺ10 …… 45
第26図　ＲＧ78･79･82･83 …… 46
第27図　ＲＤ出土遺物 …… 48
第28図　ＲＤ・ＲＧ出土遺物 …… 49
第29図　遺構外出土遺物(1) …… 51
第30図　遺構外出土遺物(2) …… 52
第31図　土器分類図(1) …… 58
第32図　土器分類図(2) …… 59
第33図　土器分類図(3) …… 60
第34図　住居跡別出土土器集成(1) …… 62
第35図　住居跡別出土土器集成(2) …… 63
第36図　住居跡別出土土器集成(3) …… 64
第37図　百目木・稲村遺跡出土土器 …… 65
第38図　竪穴住居跡分類図(1) …… 69
第39図　竪穴住居跡分類図(2) …… 70
第40図　竪穴住居跡分類図(3) …… 71
第41図　台太郎・百目木遺跡の住居配置 …… 72
第42図　遺構配置全体図 …… 77

＜ 写 真 図 版 ＞

写真図版１　航空写真 …… 81
写真図版２　調査区近景 …… 82
写真図版３　調査区の層序 …… 83
写真図版４　ＲＡ04(1) …… 84
写真図版５　ＲＡ04(2) …… 85
写真図版６　ＲＡ25(1) …… 86
写真図版７　ＲＡ25(2) …… 87
写真図版８　ＲＡ26(1) …… 88
写真図版９　ＲＡ26(2) …… 89
写真図版10　ＲＡ27(1) …… 90
写真図版11　ＲＡ27(2)、ＲＥ09 …… 91
写真図版12　ＲＤ60・62・63、ＲＺ09 …… 92
写真図版13　ＲＤ64・65・66・67 …… 93
写真図版14　ＲＤ61・68、ＲＺ10 …… 94
写真図版15　ＲＧ78・79 …… 95
写真図版16　ＲＧ83・84 …… 96
写真図版17　出土遺物(1)遺構内 …… 97
写真図版18　出土遺物(2)遺構内 …… 98
写真図版19　出土遺物(3)遺構内 …… 99
写真図版20　出土遺物(4)遺構内 …… 100
写真図版21　出土遺物(5)遺構内 …… 101
写真図版22　出土遺物(6)遺構内 …… 102
写真図版23　出土遺物(7)遺構内 …… 103
写真図版24　出土遺物(8)遺構内 …… 104
写真図版25　出土遺物(9)遺構内・外 …… 105
写真図版26　出土遺物⑩遺構外 …… 106



第1図 遺跡の位置

Ⅰ　調査に至る経過

盛岡南新都市開発計画は、盛岡市が来るべき21世紀に向けて、経済・文化などに対する各機能を兼ね備えた北東北の拠点都市を目指して、現在の既成市街地の他に南部地域を新市街地として開発し、両者が有機的に結びついた軸状都心を形成するために策定された土地区画整理事業である。

この事業は、平成2年9月に岩手県、盛岡市、都南村(現盛岡市)の三者が、地域振興整備公団に対して事業要請を行い、これを受けて公団は実施計画を作成した。平成3年12月に建設大臣と国土庁長官から事業の実施認可が下り、平成3年度から平成17年度までの15年間を事業予定期間とし、面積約313haを対象とした土地区画整理事業が実施される事となった。この間、事業の対象地域に係わる埋蔵文化財の取扱についても協議が重ねられた。その結果、盛岡市教育委員会が試掘を行い、本調査を必要とする範囲を確定し、本調査は(財)岩手県文化振興事業団の受託事業とすることとなった。

当遺跡については、岩手県教育委員会が地域振興整備公団と協議した結果、平成12年度の事業として確定した。これを受け平成12年4月3日に(財)岩手県文化振興事業団理事長と地域振興整備公団の間で委託契約を締結し発掘調査を実施する事となった。調査は平成12年4月14日に開始され、同年6月16日に終了した。

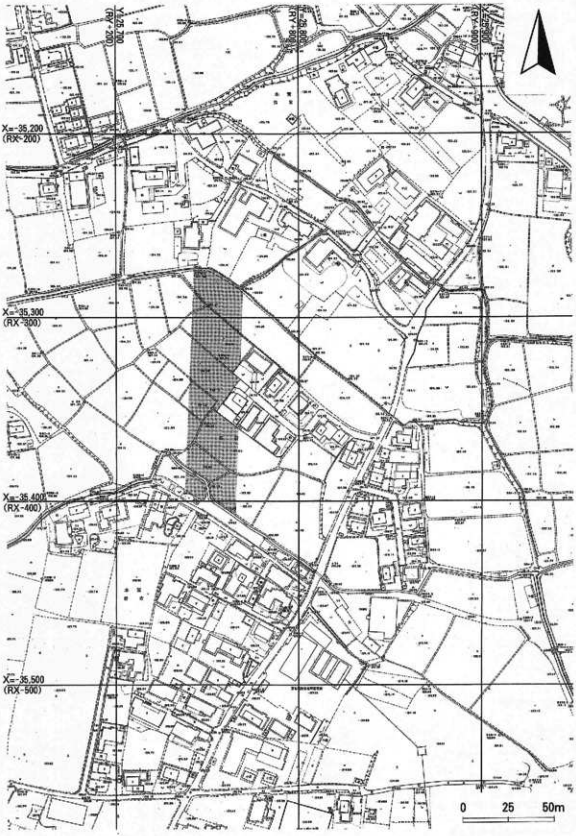
Ⅱ　遺跡の立地と環境

1．位置と地形

熊堂B遺跡の所在する盛岡市は、総面積489.15㎢、人口287,395人、人口密度587.5人/㎢、岩手県の県庁所在地であり[1]、岩手県を南北に貫流する北上川の中流域北端付近、奥羽山脈からの雫石川、北上山地からの中津川とが北上川へ合流する地点に位置している。市域の中央部を北上川が、支流の雫石川・中津川・築川等と合流しつつ南流している。市域を形成する盛岡盆地は、北西の岩手山(2,038m)・北東の姫神山(1,124m)・南東の早池峰山(1,913m)といった山稜に囲まれている。

本遺跡は岩手県盛岡市本宮字稲荷1ほかに所在し、国土地理院発行の1:50,000地形図「盛岡」NJ－54－13－14－2(盛岡14号－2)の図幅に含まれる北緯39°40′52″、東経141°08′00″付近、東日本旅客鉄道東北線仙北町駅の西方約1.5km、雫石川右岸の微高地上に立地している。今次調査では遺跡名を「熊堂B遺跡」と呼称しているが、岩手県教育委員会の遺跡登録台帳では「本宮熊堂B遺跡」となっており、当センターが平成5年(第1次)・9年(第4・5次)に調査を行った「本宮熊堂B遺跡」(岩手埋文1995・1999a・1999b)と同一の遺跡である[2]。今次調査区は東西を第1次調査区および第4次(2)調査区に挟まれた東西約27m・南北約125mの細長い台形状の範囲である。標高約123～125m、雫石川との比高約6m、現況は水田である。

本遺跡の所在する北上川右岸では、大規模な平野と奥羽脊梁山脈から供給される多量の堆積物による扇状地が形成されており、雫石川以南・北上川以西には雫石川の下刻・堆積作用により高位から順に「砂礫段丘Ⅰ」「砂礫段丘Ⅱ」「砂礫段丘Ⅲ」の沖積段丘面が形成されている。低位の「砂礫段丘Ⅲ」面には雫石川の河道変遷にともなう大きくは4期にわたる旧河道が確認されている。文献資料に拠れば、志波城は雫石川の水害が原因で廃絶したとされており、発掘調査の結果からも志波城北辺部分は雫石川の旧河道により截られ

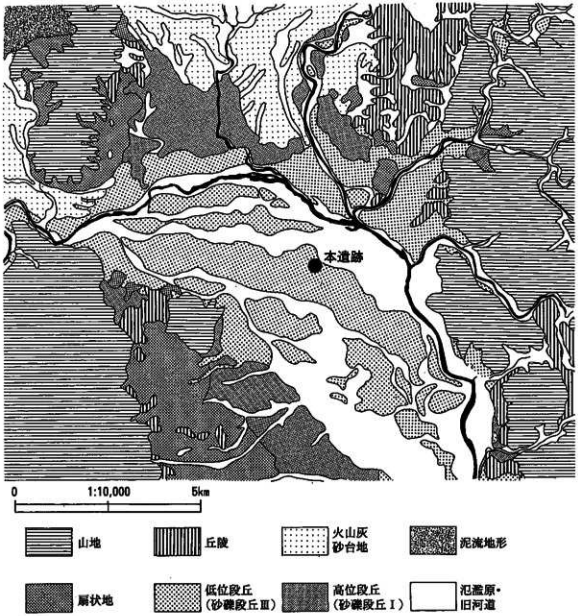


第２図　調査区と周辺の地形

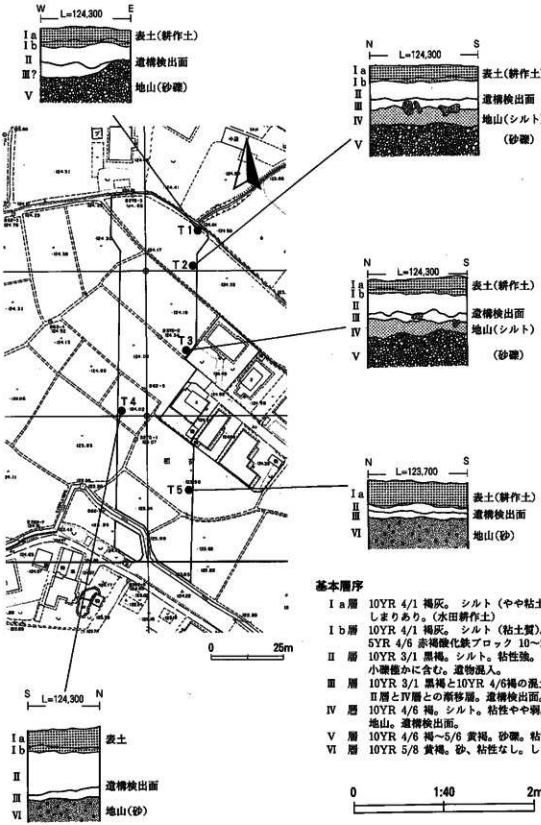
て消失していることが確認されている。さらに小河川の河道痕跡が網目状に入組んでおり、小規模な自然堤防状の微高地を形成する。本遺跡を含めた古代遺跡の多くは、「砂礫段丘Ⅲ」面の微高地や扇状地の縁辺部分に立地している。

2．地質と基本層序

本遺跡の立地する低位段丘(砂礫段丘Ⅲ)は雫石川の堆積作用により形成されたものと考えられる。すなわち、水成堆積の砂礫層が基底層となっており、やはり水成堆積のシルト層がその上位に堆積している。今次調査区でも、土層の堆積は概ね同様な様相を示す。調査開始当初に設定した試掘トレンチの土層観察をもとに設定した基本層序は次のとおりである。調査に際しては、下記の層位区分に拠って、遺構精査・遺物取り



第3図　地形分類



第４図　調査区各地点の層序

上げを行った。

Ⅰa層　10YR 4/1 褐灰。シルト(やや粘土質)。粘性中。しまりあり。(水田耕作土)

Ⅰb層　Ⅰa層と同質。5YR 4/6 赤褐酸化鉄ブロック 10～20%含む。(水田床土)

Ⅱ　層　10YR 3/1 黒褐。シルト。粘性強。しまりあり。小礫僅かに含む。遺物混入。

Ⅲ　層　10YR 3/1 黒褐と 10YR 4/6 褐の混土。粘性中。しまりあり。漸移層。遺構検出面。

Ⅳ　層　10YR 4/6 褐。シルト。粘性やや弱。しまりややあり。地山。遺構検出面。

Ⅴ　層　10YR 4/6 褐～5/6 黄褐。砂礫層および砂層。粘性なし。しまりあり。

Ⅵ　層　10YR 5/8 黄褐。砂。粘性なし。しまりあり。

但し、前述のとおり調査区が南北に長い台形状を呈するため、第4図に示したとおり、地点によって土層堆積の様相を異にしている。各地点に設定したトレンチ[3]の様相からは次のような相違が認められた。Ⅰa層(表土層)～Ⅲ層は調査区全域で認められた。調査区北部～中央部では、Ⅲ層の下位にシルト層(Ⅳ層)・砂礫層(Ⅴ層)、いわゆる「地山」が現れる。それに対して、調査区南部ではⅢ層の直下が砂層(Ⅵ層)で、これが「地山」となる。後述するように、調査区南端付近の現水路側は旧河道に相当すると推測されるが、調査区南部のⅥ層はこの旧河川の堆積作用により形成されたと思われる。なお、調査区南部ではⅥ層を掘りぬくと湧水が著しくなるため、Ⅵ層以下の層序把握はしておらず、Ⅴ層とⅥ層の上下関係(新旧関係)については把握できなかった。よって、Ⅴ・Ⅵ層の呼称については便宜上の命名であり、必ずしも土層の上下関係を反映したものではない。遺構はⅢ層中で検出可能であると思われるが必ずしも明瞭ではなく、多くの遺構はⅣ～Ⅴ層上面でプランを確認し精査している。

3．周辺の遺跡

平成12年度の岩手県遺跡台帳によると、盛岡市内には約500箇所、南隣の矢巾町には約150箇所の周知遺跡が登録されている。ここでは、本遺跡の主体時期である古代に属し、かつ調査が行われた遺跡に限定して、遺跡分布について述べる。

まず、マクロな視点で北上川以西・雫石川以南に所在する該期遺跡を概観する。第6図に示したのは、盛岡市南西部の太田・飯岡(北半部)・羽場地区および飯岡(南半部)地区～矢巾町徳田付近までの166遺跡である[4]。前者は志波城(図の29；以下同様)、後者は徳丹城跡(164)という平安時代初期の城柵官衙遺跡が所在する地域である。前述のとおり、雫石川以南・北上川以西の氾濫平野には自然堤防や微高地上に古墳時代～古代の遺跡群が立地している。図に示した2つの同心円はそれぞれ志波城・徳丹城からの直線距離を示す。志波城は延暦22（803）年頃、徳丹城は弘仁4（813）年頃の設置とされる。平安時代初期の官衙跡である両遺跡と古代遺跡群には有機的連関が認められるはずであるが、ここでは詳細な検討は省略する。

まず志波城を中心とする盛岡市南西部 ── 太田・飯岡(北半部)・羽場地区 ── について見る。当該範囲で、志波城に先行する古墳～奈良時代の遺跡は、集落跡としては台太郎(58)、八卦（14）、西鹿渡(126)、本宮熊堂B(49；本遺跡)等、墳墓としては太田蝦夷森古墳群(7)、高館古墳(36)等が上げられるが、全体としては疎らな分布を示す。平安時代では遺跡数が急増し、志波城2㎞圏内では志波城造営前後の遺跡群 ── 集落跡の松ノ木(10)、太田館(11)、竹花前(27)、林崎(30)、小幅(46)、鬼柳A(51)、野古A(54)等が分布している。一方5㎞圏内では、台太郎、本宮熊堂B、飯岡才川(57)、飯岡沢田(56)、向中野館(59)、細谷地(60)、南仙北(61)、飯岡林崎Ⅱ(94)等の集落跡が分布し、松ノ木、太田館、台太郎、細谷地等では住居跡が高密度で検出されている。また、大島(115)では石帯、飯岡林崎Ⅱでは円面硯が出土しており、官衙との関連性が窺わ

れる。小幅・飯岡才川・本宮熊堂Bでは、集落に付随した2間×2間の総柱の掘立柱建物が検出されており、倉庫〔米倉？〕の可能性が考えられている。該期葬制に関わるものと推測される周溝状遺構〔円形・方形〕は、台太郎、小幅、飯岡才川、飯岡沢田、湯沢B〔現在は下湯沢(108)に統合〕、志波城等で検出された。

一方、盛岡市の飯岡地区(南半部)から矢巾町徳田地区の範囲では、低位段丘である「都南段丘」上に、徳丹城をはじめとする古代の遺跡群が占地している。奈良時代では、集落跡である百目木（127)、60基以上の終末期古墳を検出した墳墓群の藤沢狄森古墳群(159)等が上げられる。平安時代の遺跡は多数存在しており、図幅では百目木、館畑(163)、宮田(149)、一本松(147)、下赤林(144)等、平安時代中～後半期 ── 徳丹城造営以降の遺跡群が上げられる。館畑は徳丹城東方に隣接する遺跡であり、平成10年度の調査では竪穴住居跡から「別将」と墨書された須恵器坏が出土している。なお、徳丹城の平成12年度調査では、遺跡指定範囲外ながら徳丹城と北上川とを連結する「津」と考えられる溝跡が検出された。

次に、本遺跡周辺地域に絞って遺跡分布を見る。本遺跡の周辺には、北側に本宮熊堂A(48)、南側には野古A、南西に稲荷(50)、西に鬼柳A、北西には宮沢(47)・小幅、東(図幅外)には台太郎、といった遺跡群が所在している。これらの遺跡については、今次調査の原因となった盛岡南新都市開発整備事業等に関連して調査が行われており、その詳細が明らかとなってきている。これらの遺跡は縄文時代晩期主体の本宮熊堂Aを除いて、個々に奈良・平安期の集落を構成している。全体としてみれば、個別の名称を付されているものの密接な繋がりをもつ遺跡群(大宮遺跡群？)を形成していると見ることができよう。なお、本遺跡周辺には縄文～弥生時代の遺跡は寡少であるが、本遺跡の北側に隣接する本宮熊堂A遺跡では縄文時代晩期の遺構(竪穴住居跡2棟)・遺物が検出されている。

<註>

(1) 平成12年10月時点。

(2) 今次調査の遺跡名から「本宮」が脱落した経緯については、筆者は詳らかではない。ただ、本遺跡の近隣には別に「熊堂遺跡」が存在しており、無用な混乱を避けるため、本遺跡には「本宮」を付加した呼称を用いるべきであると筆者は考えるが、本書では便宜的に「本宮」を除いた「熊堂B遺跡」の名称を用いる。

(3) 調査区北西端部のトレンチ(T1)において「Ⅲ層？」とした土層については、野外調査では基本層序Ⅲ層相当と解釈していた。しかし、室内整理の過程で当該層が溝跡(RG12)の覆土である可能性が高いことに気付いた。後述第Ⅳ章を参照。

(4) 遺跡の名称・範囲は「岩手県遺跡登録台帳」・「遺跡地図」で確認したが、番号・括りが不明確な部分があった。そのため、図示していない遺跡がある一方、図示した遺跡でも括りの範囲を誤っているものもあると思われる。

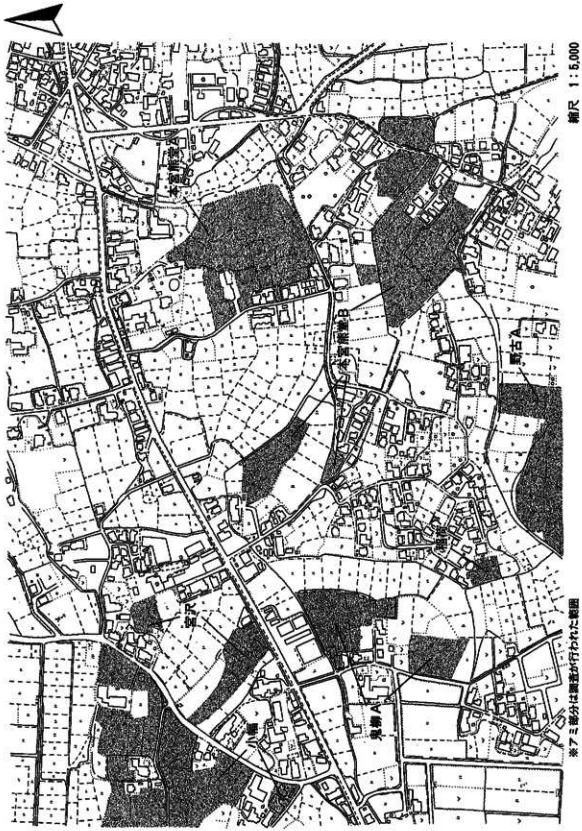
第１表　周辺の遺跡

No.	遺跡名	所在地	時　代	遺　構　・　遺　物	備　考
1	三枚橋	盛岡市	古代	土師器、剥片	
2	田面野木	盛岡市	縄文・古代	縄文土器、土師器	
3	上猪去	盛岡市	縄文～中世	竪穴住居跡(縄文)、土坑、遺物包含層、縄文土器、竪穴状(平安)、土師器、掘立柱建物(中世)	
4	上平	盛岡市	縄文・古代	竪穴住居跡(縄文)、掘立柱建物、土坑、土器埋設遺構、遺物包含層、縄文土器、弥生土器、土師器	
5	猪去館	盛岡市	縄文～中世	竪穴住居跡(縄文)、土坑、遺物包含層、縄文土器、溝跡、土師器、柱穴、廓、郭、掘立柱建物、土塁	
6	大ヶ森	盛岡市	縄文・古代	縄文土器、土師器	
7	太田堰奥森古墳群	盛岡市	奈良	縄文土器、土師器、玉、刀、和鋏開珠	
8	一本木	盛岡市	平安	竪穴住居跡、土師器	
9	細田	盛岡市	平安	土師器	
10	松ノ木	盛岡市	平安	竪穴住居跡、土坑、土師器	
11	館(太田館)	盛岡市	平安	竪穴住居跡、土坑、溝、廓、土塁、土師器	
12	上野屋敷	盛岡市	古代	土師器	
13	八ッ口	盛岡市	古代	土師器	
14	八卦	盛岡市	奈良・平安	竪穴住居跡、土坑、土師器	
15	畑中	盛岡市	古代	土師器	
16	五兵衛新田	盛岡市	古代	土師器	
17	天沼	盛岡市	古代	土師器	
18	蟹沢下	盛岡市	古代	土師器	
19	二ッ沢	盛岡市	縄文・古代	縄文土器、土師器	
20	蟹沢	盛岡市	縄文・古代	縄文土器、土師器	
21	ヘビ堂	盛岡市	縄文・古代	縄文土器、土師器	
22	山中	盛岡市	縄文・古代	縄文土器、土師器	
23	オミ坂	盛岡市	縄文・古代	縄文土器、土師器	
24	月見山	盛岡市	縄文・古代	縄文土器、土師器	
25	中村	盛岡市	平安	土師器、須恵器	
26	竹鼻	盛岡市	古代	土師器	
27	竹花前	盛岡市	平安	竪穴住居跡(平安後期)、炭土、土師器、緑釉陶器、掘立柱建物(近世)	
28	小沼	盛岡市	平安	竪穴住居跡、土師器、緑釉陶器	
29	志波城(志和城)	盛岡市	平安	官衙跡／掘立柱建物、門跡、築地、堀跡、大溝、竪穴住居跡、土師器、須恵器、鉄器	国指定史跡。
30	林崎	盛岡市	平安	竪穴住居跡、掘立柱建物、土師器、須恵器	
31	田中	盛岡市	平安	土師器	
32	新堰端	盛岡市	縄文・平安	縄文土器、土師器、竪穴住居跡、土坑、大溝	志波城跡指定地外。
33	田貝	盛岡市	古代	竪穴住居跡、土師器	
34	石仏	盛岡市	古代	土師器	
35	堤	盛岡市	縄文・古代	縄文土器、土師器	
36	高館古墳	盛岡市	奈良～平安	土師器、蕨手刀、切子玉	盛岡市指定史跡。
37	大柳Ⅱ	盛岡市	古代？	土師器？	
38	大柳Ⅰ	盛岡市	古代	土師器、須恵器	
39	藤島Ⅱ	盛岡市	平安？	土師器	

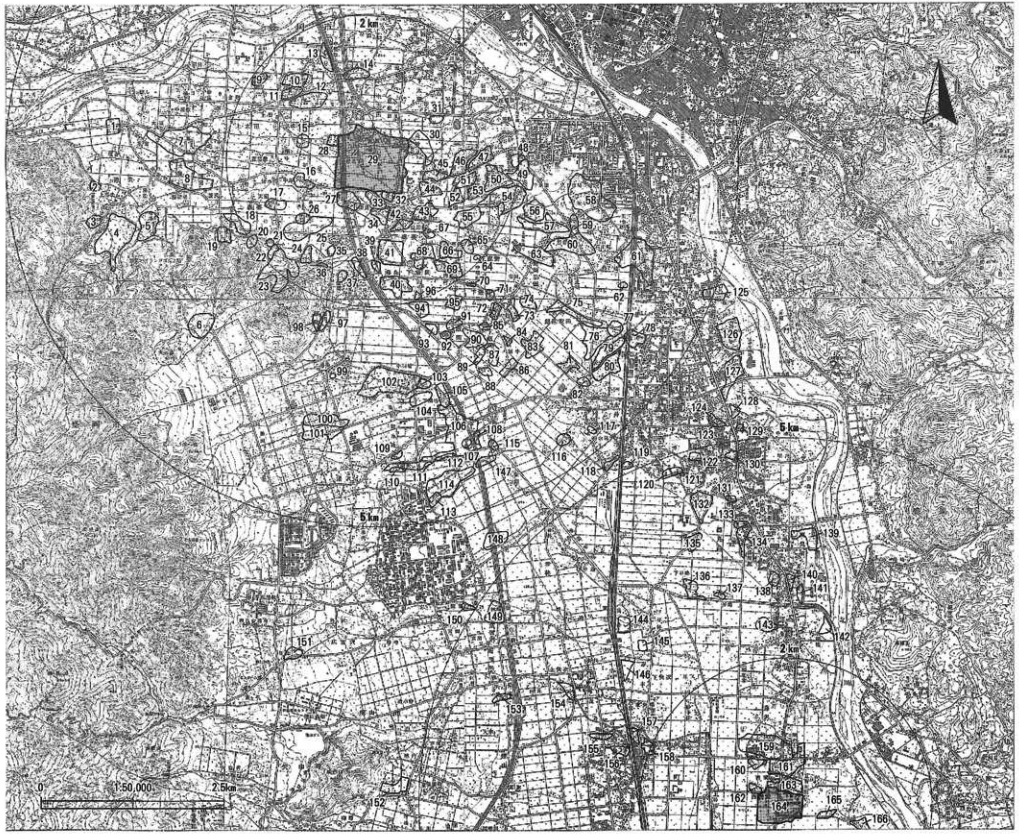
No.	遺跡名	所在地	時　代	遺　構　・　遺　物	備　考
40	藤島Ⅰ	盛岡市	縄文・平安	縄文土器；土師器、須恵器	
41	辻屋敷	盛岡市	古代	土師器	
42	上越場A	盛岡市	古代	土師器	
43	水門	盛岡市	古代	土師器	
44	大宮	盛岡市	古代・中世	竪穴住居跡、土師器	
45	大宮北	盛岡市	古代	溝跡、土師器	
46	小幅	盛岡市	平安	竪穴住居跡、掘立柱建物跡、土坑、土師器、須恵器	
47	宮沢	盛岡市	古代	溝跡、土師器	
48	本宮熊堂A	盛岡市	縄文・古代	縄文土器、縄文竪穴住居跡、陥し穴；土師器、溝跡	
49	本宮熊堂B	盛岡市	縄文・古代	縄文土器、陥し穴；竪穴住居跡、掘立柱建物、土坑、溝跡、土師器	報告遺跡。
50	稲荷	盛岡市	古代	溝跡、土師器	
51	鬼柳A	盛岡市	平安	竪穴住居跡、溝跡、土師器	
52	鬼柳B	盛岡市	古代	土師器	
53	鬼柳C	盛岡市	古代	土師器	
54	野古A	盛岡市	平安	竪穴住居跡、土師器	
55	野古B	盛岡市	古代	土師器	
56	飯岡沢田	盛岡市	古代	竪穴住居跡、土師器	
58	台太郎	盛岡市	奈良～近世	竪穴住居跡、掘立柱建物、土坑、溝跡、土師器、須恵器、土錘系、鞴羽口	
59	向中野館	盛岡市	平安・中世	竪穴住居跡、土師器、屋敷跡、土塁	
60	細谷壇	盛岡市	平安	竪穴住居跡、掘立柱建物、土坑、溝跡、土師器、須恵器	
61	南仙北	盛岡市	縄文・平安	竪穴住居跡(10c代)、土坑、土師器、縄文土器	
62	向中野幅	盛岡市	古代	土師器	
63	矢盛	盛岡市	古代	土師器	
64	前田	盛岡市	古代	土師器	
65	西田B	盛岡市	古代	土師器、須恵器	
66	西田A	盛岡市	古代	土師器	
67	上越場B	盛岡市	古代	土師器	
68	二又	盛岡市	平安	土師器、須恵器	「二又Ⅰ・Ⅱ」統合。
69	内村	盛岡市	平安	土師器、須恵器	
70	中屋敷	盛岡市	古代	土師器	「三竹」改称。
71	高屋敷Ⅰ	盛岡市	古代	須恵器	
72	高屋敷Ⅱ	盛岡市	平安	土師器、須恵器	
73	下久根Ⅰ	盛岡市	縄文・古代	縄文土器、土師器、須恵器	
74	石持	盛岡市	古代	土師器、須恵器	
75	夕覚	盛岡市	古代	土師器	「畑中」改称。
76	横屋	盛岡市	古代	土師器、須恵器	
77	生畔	盛岡市	古代	土師器	
78	津志田	盛岡市	古代	溝跡、土師器	
79	陣当	盛岡市	古代		「津志田横屋」改称。
80	長沼	盛岡市	古代		
81	葛本	盛岡市	古代	土師器、打製石斧	
82	境田	盛岡市	古代	土師器	
83	松島	盛岡市	古代	土師器、須恵器	
84	下久根Ⅱ	盛岡市	古代	縄文土器	

No.	遺跡名	所在地	時代	遺構・遺物	備考
89	熊堂Ⅲ	盛岡市	平安	竪穴住居跡、土師器、須恵器	
90	熊堂Ⅰ	盛岡市	縄文・古代	縄文土器、石器、土師器、竪穴住居跡	「西田」「熊堂」統合。
91	深淵Ⅱ	盛岡市	平安	竪穴住居跡	地点変更。
92	上新田	盛岡市	平安	竪穴住居跡、土師器	「上新田Ⅱ」改称。
93	飯岡林崎Ⅰ	盛岡市	平安	土師器	
94	飯岡林崎Ⅱ	盛岡市	古代	竪穴住居跡、土師器、須恵器、硯	「林崎」改称。
95	深淵Ⅰ	盛岡市	平安	竪穴住居跡	
	ＬＥ26-0102	盛岡市	古代	土師器	位置詳細不明。
96	ＬＥ26-0073	盛岡市	平安	土師器、須恵器	
97	赤坂Ⅱ	盛岡市	平安？	土師器	「赤坂」改称。
98	飯岡赤坂	盛岡市	古代		「赤坂Ⅱ」と同一？
99	砂子塚	盛岡市	古代	小塚	
100	木節	盛岡市	平安		
101	福千代	盛岡市	奈良		
102	因幡	盛岡市	縄文・古代	縄文土器、土師器、須恵器	「因幡Ⅰ～Ⅲ」統合。
103	新井田Ⅰ	盛岡市	古代	土師器、須恵器	
104	新井田Ⅱ	盛岡市	古代	土師器、須恵器	
105	新田	盛岡市	平安	土師器、須恵器	
106	下羽場	盛岡市	平安	竪穴住居跡(9ヵ所～11ヵ所)、土坑、鼎、鉄土(30個？)、土師器、須恵器、鉄釉陶器	「稲荷」統合。
107	間渡Ⅰ	盛岡市	古代	土師器	
108	下湯沢	盛岡市	平安(・縄文)	竪穴住居跡(平安)、土坑、円形周溝、方形周溝、土師器、須恵器	「湯沢ＡＢＣ」統合。
109	小田Ⅰ	盛岡市	古代	土師器	「小田Ⅲ」改称。
110	小田Ⅱ	盛岡市	平安	土師器	「小田Ⅰ・Ⅱ」統合。
111	森子	盛岡市	古代	土師器	
112	間渡Ⅱ	盛岡市	古代	土師器、須恵器	
	間渡Ⅲ	盛岡市	古代	土師器、須恵器	位置不明。
113	狢沢	盛岡市	古代	土師器	
114	湯沢大館	盛岡市	古代～中世	土師器、須恵器、空堀	「大館」「館」改称統合
115	大島	盛岡市	古代	竪穴住居跡、土坑、土師器、須恵器	
116	間木	盛岡市	古代	土師器	
117	永井前田	盛岡市	古代	土師器、須恵器	
118	神田	盛岡市	古代	土師器、須恵器	
119	下永井	盛岡市	古代	陥し穴、土坑、土師器、須恵器	
120	宮蒲田	盛岡市	古代	土師器、須恵器	
121	荒屋	盛岡市	古代	土師器、須恵器	
122	高梨Ａ	盛岡市	古代	土師器、須恵器	
123	大道西	盛岡市	奈良	古墳、蕨手刀	消滅？
124	下永林	盛岡市	縄文・古代	縄文土器、土師器、須恵器	
125	能堰	盛岡市	奈良	土師器	
126	西鹿渡	盛岡市	古代	竪穴住居跡(奈良・平安)、溝跡、土師器、須恵器	
127	百目木	盛岡市	縄文・古代	縄文土器、竪穴住居跡(奈良・平安)、土坑、土師器、須恵器、土製品、鉄器	
128	中島	盛岡市	古代	須恵器	
129	三本柳堀	盛岡市	縄文・古代	縄文土器、土師器	「堀」改称。
130	高梨Ｂ	盛岡市	古代	土師器	

No.	遺跡名	所在地	時　代	遺　構　・　遺　物	備　考
131	和野	盛岡市	古代		
132	三百刈田	盛岡市	古代・中世	土師器	
133	見前中島	盛岡市	古代	土師器	
134	見前久保屋敷	盛岡市	縄文～中世	落葉層、打製石斧、磨製斧(中世後半期)、剥離、土坑、柱穴群、陶磁器、古銭	
135	見前館	盛岡市	古代	土師器、仏像	
136	下谷地	盛岡市	古代	土師器	
137	下谷地前	盛岡市	縄文・古代	縄文土器、土師器、須恵器	
138	上畑	盛岡市	古代	土師器、須恵器	
139	大桜前	盛岡市	古代	土師器	
140	石名板	盛岡市	古代	土師器、須恵器	
141	見前	盛岡市	古代	土師器	
142	高田幅	矢巾町	古代	土師器、須恵器	
143	高田	矢巾町	古代	土師器、須恵器	
144	下赤林Ⅱ	矢巾町	平安	土坑、土師器、須恵器(10c代？)	
	下赤林Ⅰ	矢巾町	平安	竪穴住居跡(10c中～後)、土師器、須恵器	位置不明。
145	茨姫	矢巾町	縄文・古代	土師器、須恵器、縄文土器、弥生土器	
146	高畑	矢巾町	縄文・平安	縄文土器、土師器、須恵器	
147	一本松	矢巾町	平安	竪穴住居跡(平安中～)、掘立柱建物、焼土、土師器	
148	大渡野	矢巾町	縄文・平安?	縄文土器(早)、石斧、須恵器(周辺に窯？)	
149	宮田	矢巾町	縄文・平安	竪穴住居跡(10c～11c初)、土師器、縄文土器、石器	
150	天戸	矢巾町	平安	土師器甕、須恵器	
151	和山	矢巾町	古代	須恵器	
152	石切茶屋西方	矢巾町	古代	須恵器、石棒	
153	種山Ⅰ	矢巾町	古代	土師器	
154	上矢次Ⅰ	矢巾町	古代	土師器、須恵器	
155	下海老沼	矢巾町	縄文・古代	縄文土器、石器、土師器、須恵器	
156	明堂	矢巾町	縄文・古代	縄文土器、土師器	
157	又兵ヱ新田	矢巾町	平安	土師器、須恵器	
158	南矢巾	矢巾町	古代	土師器	
159	狄森古墳	矢巾町	古代	古墳、土師器、須恵器、鉄鏃、切子玉、勾玉、刀	
160	田郷	矢巾町	古代	土師器、須恵器、砥石、焼石	
161	白山堂	矢巾町	古代	土師器、須恵器	
162	西前	矢巾町	古代	土師器、須恵器	
163	館畑	矢巾町	古代	土師器、須恵器	
164	徳丹城	矢巾町	平安	官衙跡／掘立柱建物、土師器、須恵器	
165	川村	矢巾町	古代		
166	下通	矢巾町	縄文・古代	縄文土器、土師器	



第５図　周辺の遺跡(1)大宮地区拡大図



第６図　周辺の遺跡(2)

※同心円は、各々、志波城、徳丹城からの距離を示している。

Ⅲ　調査・整理の方法と経過

1．調査の経過

4月14日(金)　調査機材の搬入、現場設営。登録作業員26名。
4月17日(月)　雑物撤去、現況写真撮影、試掘トレンチを設定。
4月18日(火)　調査区北東部の人力での表土掘削を開始(～20日)。
4月21日(金)　基準点打設完了。
4月24日(月)　重機による調査区北半部の表土除去を開始(～28日)。併せて遺構検出を行う。
4月28日(金)　調査区北半部の表土除去を終了。竪穴住居跡2棟、土坑数基、溝跡10条を検出した。
5月　1日(月)　第11次調査の開始に伴い、登録作業員6名となる。グリッド設定を行う(～8日)。
5月　9日(火)　遺構精査を開始。まず溝跡から着手。精査の進行に従って、溝跡として登録した10条中、6条は現代の水田に伴う畦畔痕跡であることが判明し、溝跡は4条となる。
5月15日(月)　重機による調査区南半部の表土除去を開始。
5月17日(水)　調査区南半部の表土除去を終了。調査区中央～南半部には遺構が疎であることが判明。
5月18日(水)　第11次調査終了に伴い、登録作業員22名に増。
5月25日(木)　竪穴住居跡(ＲＡ04、ＲＡ25)の精査に着手。
5月31日(水)　遺構が疎な調査区中央部で土坑(ＲＤ67)を検出。覆土中から多量の土師器片が出土した。ＲＤ67付近が遺構分布範囲の南限と判断した。
6月　1日(木)　第9次調査の終了に伴い、登録作業員27名に増。
6月　5日(月)　調査区北端付近で再堆積の地山起源土を除去したところ、竪穴住居跡(ＲＡ26)を検出。
6月　9日(金)　現地説明会を開催。参加者約20名。
6月12日(月)　調査区北端部でＲＡ26同様に地山起源土を被っていた竪穴住居跡(ＲＡ27)を検出。県教委文化課・委託者の立会の下、調査終了確認を受ける。
6月13日(火)　調査区北端付近を除いて、重機による埋め戻しを開始。
6月14日(水)　精査・実測用具の一部を残して、鬼柳Ａ遺跡へ機材撤出。調査員1名(千葉)・作業員6名が残留して、ＲＡ26・ＲＡ27の精査を続行。
6月15日(木)　調査区北端付近を除いて、埋め戻し終了。
6月16日(金)　ＲＡ26・ＲＡ27の精査を完了。北端付近の埋め戻しを行い、現地を撤収した。

2．野外調査

<グリッドの設定>　グリッドの設定は、盛岡市教育委員会の方針に準じており、平面直角座標系第Ｘ系を座標変換した調査座標を用いている。本遺跡の所在する大宮地区の調査座標原点(平面直角座標系第Ｘ系のＸ＝－35,000.000、Ｙ＝25,000.000)を基点として50m×50mの大グリッドを設定し、北西隅を基点として東方向へはＡ～Ｙのアルファベット、南方向へは1～25の数字を付した。大グリッドの表示はアルファベットと数字の組み合わせで1Ａ、5Ｅ、20Ｈ、25Ｙ等と呼称する。この大グリッドを東西・南北ともに25分割して2ｍ×2ｍの小グリッド(625区画)に分割した。小グリッドについても北西隅を基点に、東方向

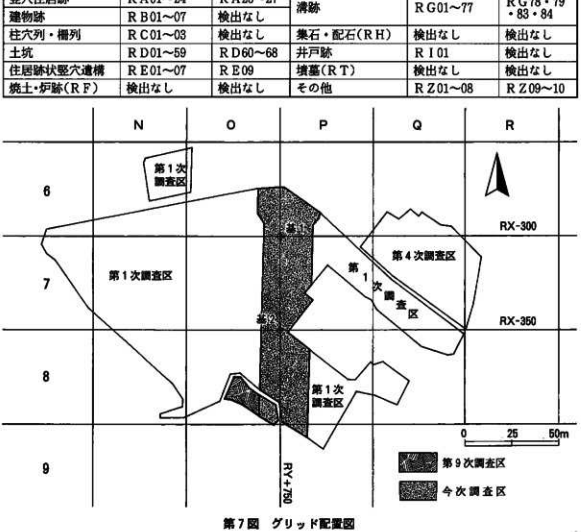
にはａ～ｙのアルファベット、南方向には１～25のアラビア数字を付した。小グリッドの呼称は大グリッド名を付し、７０１ａ、８Ｐ15ｆ等と表示した。なお、本報告書への掲載に際しては、グリッド名と調査座標原点からの距離(単位：m)を併記した。すなわち、調査座標原点をＲＸ±０・ＲＹ±０として、南北方向へはＲＸ±α(南→北で増加)、東西方向へはＲＹ±β(西→東で増加)で示した。

調査に際して設置した基準点(２点)・補点(５点)の測量成果値は、次のとおりである。

基準点１	X= -35,300.000	Y= 25,750.000	基準点２	X= -35,350.000	Y= 25,750.000
補点１	X= -35,300.000	Y= 25,760.000	補点２	X= -35,320.000	Y= 25,750.000
補点３	X= -35,350.000	Y= 25,740.000	補点４	X= -35,380.000	Y= 25,750.000
補点５	X= -35,380.000	Y= 25,730.000			

＜遺構略号と遺構名＞　本遺跡の調査は盛岡市教育委員会と範囲分担して行っているため、遺構略号・番号等については同教育委員会の方法に準じている。本遺跡が集落遺跡であることから、第１次調査ではＲ系の略号を付した遺構名を用いており、以降の調査では第１次調査からの連番となっている。第１～９次調査および今次調査において、遺構種別に付された遺構略号・番号は次のとおりである。

種　別	１～９次調査	今次調査	種　別	１～９次調査	今次調査
竪穴住居跡	ＲＡ01～24	ＲＡ25～27	溝跡	ＲＧ01～77	ＲＧ78・79・83・84
建物跡	ＲＢ01～07	検出なし			
柱穴列・柵列	ＲＣ01～03	検出なし	集石・配石(ＲＨ)	検出なし	検出なし
土坑	ＲＤ01～59	ＲＤ60～68	井戸跡	Ｒ１01	検出なし
住居跡状竪穴遺構	ＲＥ01～07	ＲＥ09	墳墓(ＲＴ)	検出なし	検出なし
焼土・炉跡(ＲＦ)	検出なし	検出なし	その他	ＲＺ01～08	ＲＺ09～10



第７図　グリッド配置図

今次調査では、上記に後続する、検出順の遺構番号を付している。但し、第９・11次調査が今次調査と並行して行われたため、遺構名は必ずしも連番とはならず、前後している部分がある(ex.ＲＥ08・ＲＧ80～82は第11次調査分で使用)。また、野外調査時に遺構として認定したものの幾つかを室内整理段階で登録抹消し、遺構名を下記のとおり変更した(旧遺構名→新遺構名)。なお、遺物の注記は変更前の遺構名(旧名)でしている。

①名称変更した遺構(旧→新)　ＲＧ83溝跡 → ＲＧ78溝跡　ＲＧ84溝跡 → ＲＧ79溝跡
ＲＧ85溝跡 → ＲＧ83溝跡　ＲＧ88溝跡 → ＲＧ84溝跡

②登録を抹消した遺構(旧名)　ＲＧ78溝跡　ＲＧ79溝跡　ＲＧ86溝跡　ＲＧ87溝跡
ＲＧ89溝跡　ＲＧ90溝跡

<粗掘と遺構の検出>　本調査に先立って盛岡市教育委員会により本遺跡全域について試掘調査が行われ、今次調査区の隣接地では１・４次調査が実施されている。これらのデータを踏まえて、今次調査区については遺構・遺物の分布についてはある程度予測されていた。調査開始と同時に、遺構検出面までの深さおよび層序把握のため、調査区内の任意の地点に2.0×1.0m程度の試掘トレンチを７箇所設定した。その結果、Ⅰ層(表土)～Ⅱ層(黒褐色土)までは遺構は確認されず、遺物は僅少であることが判明した。そこで、Ⅱ層下位面までは重機により除去し、Ⅱ層下位面以下については人力によって掘削・表土除去を行った。

遺構の検出はⅢ～Ⅴ層上面においてそれぞれ行い、最終的には調査区全面をⅣ～Ⅴ層面まで掘り下げた。Ⅲ層面では暗褐色土面、Ⅳ～Ⅴ層面では黄褐色土面に黒～黒褐色のプランで検出する形であった。

<遺構の精査と出土遺物の取り上げ>　検出した遺構の精査は、住居跡は４分法、土坑・土器埋設遺構・焼土等は２分法を原則とした。精査の各段階で、必要に応じて写真撮影や断面・平面実測を行った。

遺構内の出土遺物については、原則として覆土上部・覆土下部・床面直上・床(底)面〔住居跡についてはさらにカマドの部位別(火床部・左右側壁・煙道・煙出等)〕に区分して取り上げた。遺構外の出土遺物については、グリッド別に出土層位を記録して取り上げた。しかし、後述のとおり、調査員の不手際により出土位置・層位が不明な注記の遺物もあった。

精査における観察事項は、できるだけ現場でフィールドカードや野帳に記録し、広汎な情報収集に努めた。

<実測方法・写真撮影>　遺構の実測は、竪穴住居跡・住居状遺構・土坑・溝状遺構については簡易遣り方によって、溝跡については平板測量によって実測を行った。実測図は、竪穴住居跡・住居状遺構・土坑・溝状遺構については1／20縮尺で、竪穴住居跡のカマドについては1／10縮尺に拡大した平面図・断面図を作成した。また溝跡については、平面図は平板測量により１／50縮尺で、断面図は１／20縮尺で作成した。土層の観察に際して、色調の判別は『新版 標準土色帳(第10版)』(小山正忠・竹原秀雄 1990)に拠った。

写真撮影は、6×7cm判カメラ(モノクロ)を主として、これに35mm判カメラ２台(モノクロ・カラーリバーサル)を補助カメラとして使用した。撮影に際しては、整理時の混乱を避けるため、撮影カードを使用している。また、適宜、ポラロイドカメラを使用して、フィールドカードの文章記載による記録を補完した。

３．整理方法

野外調査の終了後、平成12年11月１日～平成13年３月31日の期間に、調査記録および出土遺物の整理を行った。整理作業の大まかな内容は、次のとおりである。

<遺構>　遺構の実測図は遺構毎の分類・整理および点検を行った後に、修正図(第二原図)を作成してトレースした後、図版・写真図版を作成した。作成した原図・修正図には番号を付して、図面台帳を作成した。

＜遺物＞　野外調査の段階で出土遺物の洗浄を行っており、野外調査の終了時点でほぼ遺物洗浄を終了した。その後、遺物を遺構・グリッド別に仕分けした後、以下の手順で資料化を図った。

土器については、遺構・グリッド別に注記・接合・復原・選別・登録を行った。反転実測可能な状態まで接合した個体は、立体として登録した。なお、ＲＡ04の出土遺物には第１次調査出土遺物と接合可能なものも含まれていたと思われるが、接合を行っていない。一方、立体とならなかった破片から、口縁部・底部(木葉底のもの等)の破片を中心に、破片実測・拓影作成用の資料を選別・登録している。土器片への出土地点・層位の注記は、接合分の破片についてのみ行った。土製品・石器については個々の注記はせず、出土地点・層位を記入したユニパックへ収めて、登録した。登録した遺物は、実測・拓影作成・写真撮影を並行して行った後、図版・写真図版を作成した。

＜写真＞　撮影したコマ順に整理した後、6×7cm・35mmのネガフィルムはネガアルバムに貼付し、35mmリバーサルフィルムはスライドファイルへそれぞれ収納し、写真台帳を作成した。

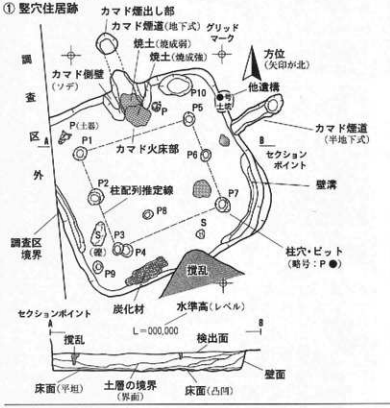
４．掲載方法

＜遺構＞　遺構図版の縮尺は、竪穴住居跡1/60、カマド断面1/30、土坑・溝状遺構1/40、溝跡1/100を原則とし、スケールを付した。凡例は、第８図に示すとおりである。写真図版はすべて任意の縮尺である。

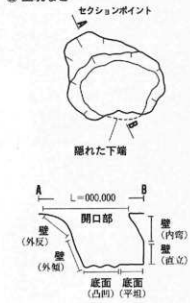
＜遺物＞　遺構内遺物と遺構外遺物を分けて、土器・土製品・石器の順に掲載した。遺物掲載番号は遺物図版・写真図版ともに共通とし、番号を掲載順に付した。個々の遺物の観察事項については遺物観察表へ記載しており、本文中では特徴ある個体についてのみ言及した。遺物図版の縮尺は、土器・礫石器1／3、土製品・剥片石器1／2を原則とし、頁右下に「Ｓ＝1／x」で示した。図版の凡例は、第８図に示すとおりである。写真図版の縮尺は遺物図版に準じている。

遺構の表現方法

① 竪穴住居跡

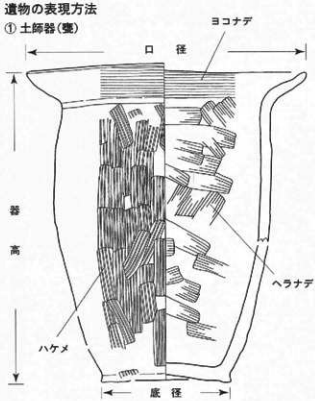


② 土坑など

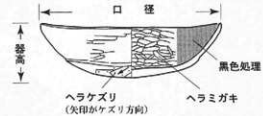


遺物の表現方法

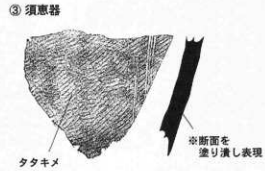
① 土師器(甕)



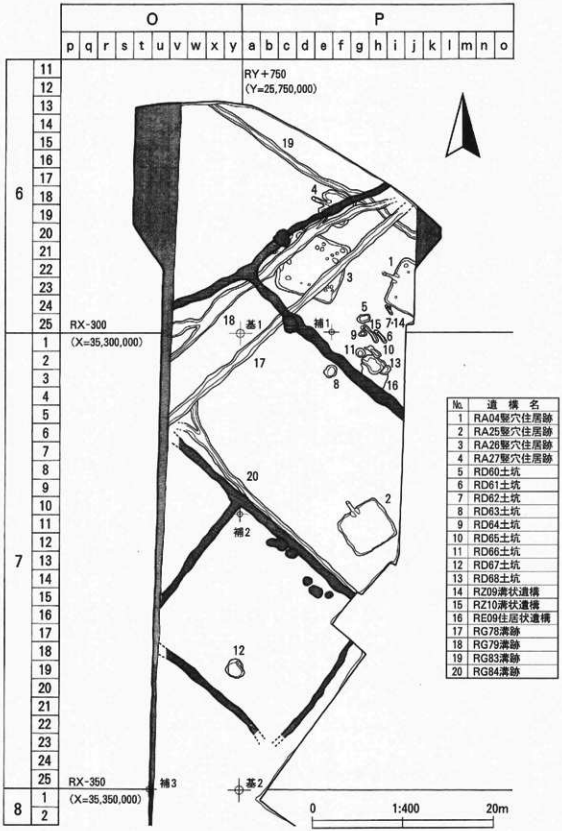
② 土師器(杯)



③ 須恵器



第8図 凡 例



No.	遺構名
1	RA04竪穴住居跡
2	RA25竪穴住居跡
3	RA26竪穴住居跡
4	RA27竪穴住居跡
5	RD60土坑
6	RD61土坑
7	RD62土坑
8	RD63土坑
9	RD64土坑
10	RD65土坑
11	RD66土坑
12	RD67土坑
13	RD68土坑
14	RZ09溝状遺構
15	RZ10溝状遺構
16	RE09住居状遺構
17	RG78溝跡
18	RG79溝跡
19	RG83溝跡
20	RG84溝跡

第９図　遺構配置図

Ⅳ　検出された遺構と遺物

検出された遺構は、縄文時代：陥し穴状遺構１基、奈良時代：竪穴住居跡４棟・土坑２基、平安時代の溝跡１条、時期不明：土坑６基・溝跡３条・溝状遺構２基である。出土遺物は、土器(縄文土器・土師器・あかやき土器・須恵器)、土製品、石器類である。出土遺物の計測値等の詳細については遺物観察表に記載した。

１．竪穴住居跡

ＲＡ04 竪穴住居跡

遺構（第10図、写真図版４・５）

〔検出状況・重複関係〕調査区北部東側の７Ｐ22ｉ～６Ｐ25ｊグリッド付近に位置しており、Ⅲ層面で暗褐色土のプランを検出した。第１次調査で本住居の東半部分が調査されていることから、存在が想定されていた。今回調査したのは残りの約1／2にあたる。Ⅲ～Ⅳ層を掘り込んで構築されている。本来の掘り込み面はさらに上位層だったと思われるが詳細不明である。なお、検出部北東側の床面および壁には砂礫が比較的多く包含されており、若干様相を異にしていた。調査時点では気づかなかったが、第１次調査報告におけるＲＧ12の覆土痕跡である可能性が高い。

〔平面形・規模〕東半部が調査区外（１次調査区）に延びているが、１次調査の報告と合致させると隅丸方形を呈している。規模(最大値、以下同様)は、北西－南東で5.6m、北東－南西で5.5mを測る。

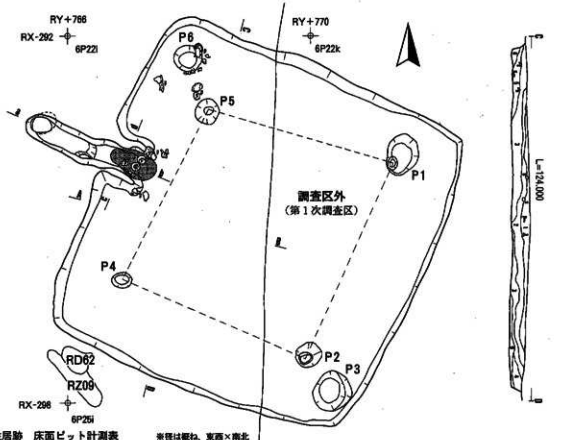
〔主軸方向〕Ｎ－67°－Ｗ

〔覆土〕レンズ状の堆積様相である。全体として黒褐色土で構成され、壁際には灰黄褐～にぶい黄褐色土が流入している。自然堆積である。礫少量が疎らに包含される。

〔壁・床面〕壁はやや外傾して立ち上がり、壁高は最大35cmを測る。壁は基本層序Ⅳ層、床面は同Ⅳ～Ⅴ上面に相当する。なお、前述のとおり、北東側壁・床面では砂礫層となっており、ＲＧ12の覆土痕跡であった可能性が高い。調査時点では床面断割りの土層観察から貼り床されていないものと判断したが、第１次調査では貼床と報告されている。改めて全景写真を見ると床面に濁りがあり、貼り床の可能性もあったかもしれない。但しその場合は、前述の「砂礫層の露出」が不整合である(「砂礫層」の上位には貼り床らしきものは確認できなかった)。

〔柱穴・ピット〕床面でピット３個(Ｐ4～6)を検出した。第１次調査でも３個(Ｐ1～3)が検出されており、合計６個検出されたこととなる。うち柱穴と思われるものはＰ1・2・4・5の４個である。これら４個の底面のレベル差は約７cmであり極端な差はなく、かつ配置も妥当であることから、これらが棟持ちの主柱穴だったものと思われる。また、Ｐ6の覆土からは土器約0.6kgが出土しており、規模形状から見て、柱穴ではなく貯蔵穴的なピットだったと思われる。なお、１次調査報告におけるＰ3も同様な解釈がなされている。

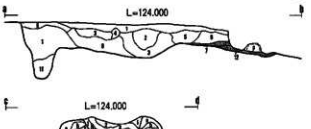
〔カマド〕位置：北西壁のほぼ中央付近に構築されている。作り替え痕跡は認められず、単時期のものと思われる。本体：燃焼部はやや浅い皿状の掘り込みとなっており、ごく弱い、痕跡程度の焼土が認められる。焼土の最大厚約3.5cmほどであり、本来の土質に由来するものかもしれないが締まりはそれほどない。燃焼部の中央付近には、小形の甕形土器が伏せられた形で検出されており、支脚的なものだったかもしれない。

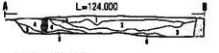


RA04竪穴住居跡　床面ピット計測表　　※径は概ね、東西×南北

番号	P1	P2	P3	P4	P5	P6
開口部（cm）	35×35	30×30	35×30	47×34	44×42	49×38
底面径（cm）	25×22	21×19	15×10	30×25	20×17	30×22
深　さ（cm）	17	15	13	19	18	9
底面レベル				123.37	123.37	123.44

※ P1～3 は第１次調査報分文より引用





A－B、C－D

1	10YR2/3黒褐	粘性弱、しまりあり
2	10YR3/3暗褐	粘性弱、しまりあり、黄橙ブロック10%
3	10YR3/2黒褐	しまりあり
4	10YR3/4暗褐	しまりあり
5	10YR4/2灰黄褐	しまりあり、鮮い黄褐ブロック20%
6	10YR4/3鮮い黄褐	しまりあり

a－b

1	10YR2/3黒褐	粘性弱
2	10YR3/3暗褐と10YR4/6褐の混合	
3	10YR2/2黒褐	粘性弱
4	7.5YR3/1灰黒褐	攪乱？
5	10YR3/2黒褐～3/3暗褐	
6	7.5YR4/4褐	粘性弱、しまりなし
7	2.5YR4/6赤褐	焼土、粘性弱、しまりあり
8	10YR4/3黄褐	
9	10YR4/4褐	しまりあり、炭化物粒５%
10	7.5YR3/4暗褐	粘性弱、しまりなし
11	10YR3/3褐	粘性弱、しまりなし、焼土ブロック１%
12	2.5YR4/8赤褐	焼土、粘性なし、しまりあり

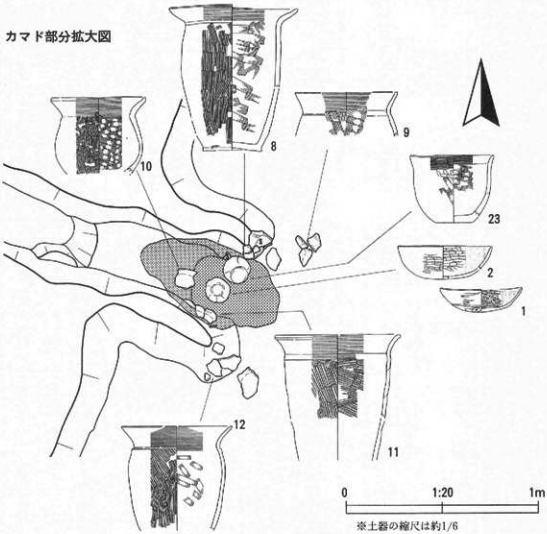
c－d

1	10YR3/4暗褐色と4/4褐の混合	しまりあり
2	10YR4/4褐	粘性弱
3	10YR2/3黒褐	粘性弱
4	10YR5/4鮮い黄褐	
5	10YR3/3黒褐	しまりあり
6	10YR3/4暗褐	しまりあり
7	10YR4/3鮮い黄褐	
8	7.5YR4/4褐	
9	5YR4/6赤褐	焼土(焼成弱)、粘性なし
10	2.5YR4/8赤褐	焼土、粘性なし、しまりあり
a	10YR4/6褐	粘性弱、しまりあり、明黄褐ブロック５%
b	10YR6/6明黄褐	しまりあり、黒褐ブロック２%
c	10YR3/3暗褐	粘性弱、しまりあり
d	10YR6/6明黄褐	しまりあり、11と同質
e	5YR4/6赤褐	焼土、粘性弱、しまりあり、一部明赤褐

平面・A－B・C－D　　a－b・c－d

0　1:60　2m　　0　1:30　1m

第10図　R A04(1)

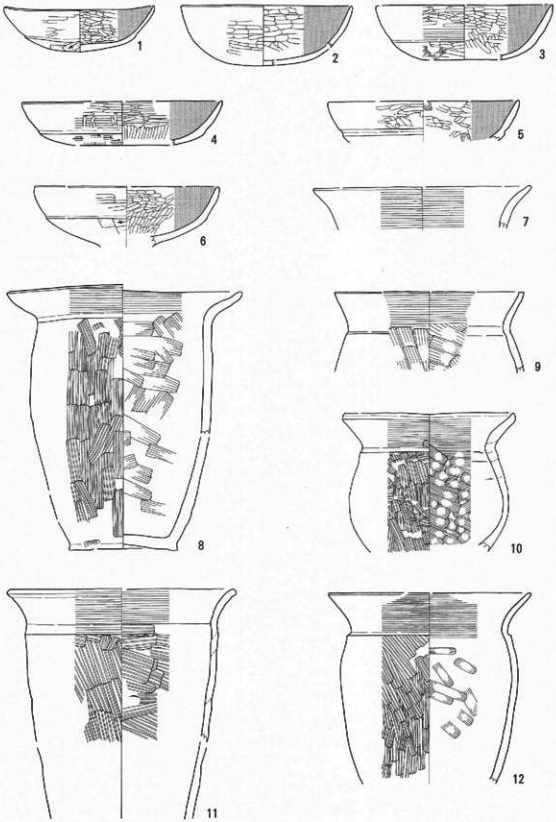


第11図　ＲＡ04(2)

ただし、設置痕跡は確認されておらず、本体天井部からの崩落、あるいはカマド脇からの流入の可能性も否定できない。左右の側壁は、土師器甕を芯材として用い、地山に酷似する褐色土を被覆して構築されている。側壁部では焼成部分はそれほど顕著ではなく、やはり痕跡程度のものである。天井部は崩落しており詳細不明である(断面ｃ－ｄの4・7層が構築土か)。煙道・煙出し部：煙道は半地下式と思われ、本体からやや下りながら煙出し部分へ接続し、半ば付近からやや急な勾配となる。側壁は外傾している。煙道上部構造は崩落したものと思われるが、断面セクションでは確認できず、その構造は不明である。煙出し部は煙道部分よりも一段深く掘り込まれて略円形の土坑状となっている。

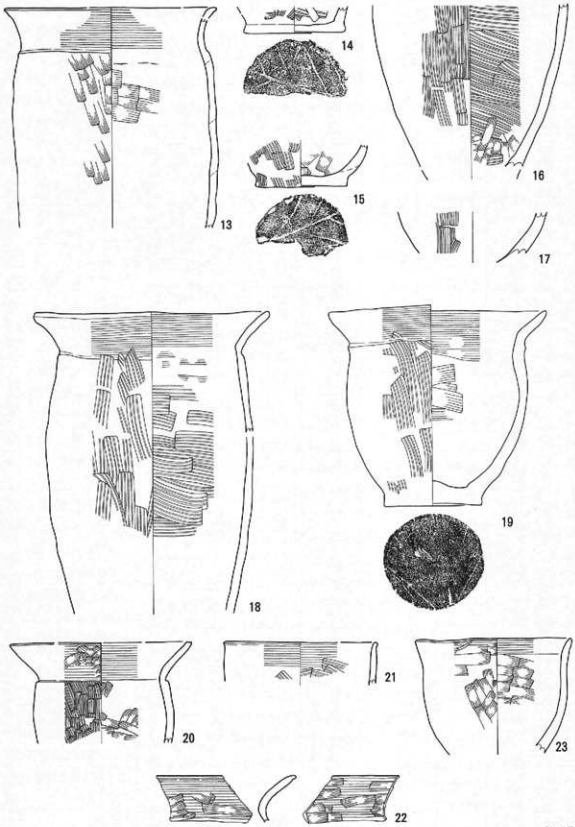
遺物（第11～13図 1～23、写真図版17・18）

〔土師器〕7.58kgが出土している。器種は坏・高台付坏・甕・鉢で、23点を図化・掲載した。出土箇所・器種は次のとおり。カマド：カマド内および周辺からは比較的多くの資料が出土した〔第11図〕。燃焼部で坏(1・2)、鉢(23)。側壁部で甕(8・9・11・12・14・15)。煙道部で甕(7・10・13)。カマドの覆土から甕(18)。Ｐ６覆土：甕(16・17)。床面：甕(19・20・21)。覆土：坏(3・4・5)、高台付坏(6)、甕(22)。坏について。2



S=1/3

第12図　ＲＡ04 出土遺物(1)



S=1/3

第13図　ＲＡ04 出土遺物(2)

を除いて外面に段を有する。ただし、4は「段」というよりは「沈線」的で、断面では内面にも「沈線」が巡りそうではあるが、不明瞭であり図示していない。調整は内外面ともに篦ミガキ主体である。高台付坏について。1点のみで、覆土最上位(検出面)で出土した。下半部は欠失しているが、接続部分がごく僅かに残存しており、断面形状から高台付坏とした。甕について。長胴形・球胴形が出土している。いずれの器形も程度の差はあれ頸部に段を有しており、12・16・18～20では顕著である。器面調整は、外面はハケメ主体である。内面はハケメのものと篦ナデのものとがある。なお、11は胴下半～底部を欠失しており、他資料に比してやや直線的なプロポーションである。カマド側壁の芯材となっていたが、甑の転用の可能性も考えられる。

時期　カマドおよび床面の出土遺物から奈良時代(8世紀後半代)と推定される。

ＲＡ25竪穴住居跡

遺構（第14図、写真図版6・7）

〔検出状況・重複関係〕調査区中央部東側の７Ｐ10ｆ～７Ｐ12ｉグリッド付近に位置している。Ⅲ層下位～Ⅳ層上面で暗褐色土の方形プランを検出した。

〔平面形・規模〕やや隅丸の方形を呈する。規模は、北西－南東方向で4.8m、北東－南西×で4.9mを測る。

〔主軸方向〕Ｎ－34°－Ｗ

〔覆土〕大略、レンズ状堆積の様相を示し、自然堆積であると思われる。上位は黄褐色ブロックを微量含んだ黒色土、下位は黒褐色土で構成されるが然程の差はない。壁際には暗褐～褐色土が流入し、覆土全体としては小礫の混入が著しい。遺物は覆土下位のカマド周辺に混入しているが、それほど多いわけではない。

〔壁・床面〕南側の壁は僅かに残存する程度で殆ど失われている。残存する壁は最大23cmを測り、全体に外傾している。特に東側の壁では外傾著しい。壁・床面ともに基本層序Ⅴ層に相当しており、同層に含有される砂礫が露出しているが、貼床や敷板等の痕跡は確認されていない。

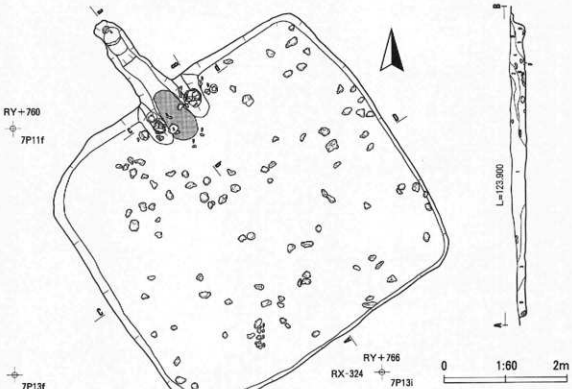
〔柱穴・ピット類〕壁・床面および周辺でも確認されていない。ただ、前述のとおり壁・床面が砂礫層であったため、柱穴を識別できなかった可能性はある。

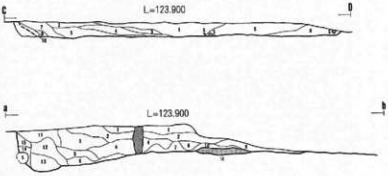
〔カマド〕位置：北壁の中央付近に構築されている。作り替え痕跡は認められず、単時期のみである。本体：側壁は土師器甕を倒立状態で据えて芯材とし、褐色シルトを被覆し構築している。天井部は崩落しており、確認できなかった。火床部には約80×45cmの楕円形で厚さ約5cmほどの焼土が見られるが、焼成は微弱で然程堅く締まってはいない。煙道・煙出し部：煙道部は緩やかな勾配で下りつつ煙出部へ接続する。天井部の構築土を明瞭には把握できない(断面ａ－ｂの２～４層？)が、半地下式（掘り込み式）であったと思われる。煙出部は浅く土坑状に掘り込まれている。

遺物（第15・16図24～36、写真図版18～20）

〔土師器〕4.56kgが出土した。器種は坏・甕で、うち13点を図化・掲載した。出土箇所・器種。カマド：側壁で甕27・29。床面：坏24・26、甕36。覆土：坏25、甕28・30～35。坏について。いずれも外面有段であるが、25は段不明瞭。26は内外両面が有段で、外面の段は「沈線」的。甕について。長胴形と球胴形の双方が出土。頸部には段をもつ。底部残存するものはいずれも底面に木葉痕あり。27では木葉２種の重複(異なる木葉かどうかは不明)。器面調整は外面ハケメ・内面ナデ主体。31はＲＥ09覆土出土破片と接合した。口縁が著しく外反し、口唇部には突起様の段が付いている。

時期　カマドおよび床面の出土遺物から奈良時代(8世紀後半代)と推定される。





A－B、C－D

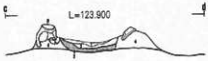
1	10YR2/2黒褐	しまりあり、中礫少量、黄褐ブロック1％
2	7.5YR3/1黒褐	しまりあり
3	10YR3/2黒褐	粘性弱
4	10YR1.7/1黒	中礫少量
5	10YR3/3暗褐	
6	7.5YR2/2黒褐	
7	10YR4/2灰黄褐	粘性弱、しまりあり
8	10YR2/2黒褐	粘性弱、しまりあり
9	10YR3/3暗褐	粘性強
10	10YR4/4褐	粘性強

a－b

1	10YR3/4暗褐	しまりあり
2	10YR3/2黒褐	
3	10YR2/2黒褐	粘性弱、黄褐20％
4	7.5YR3/1黒褐	粘性弱、しまりあり、黄褐10％
5	10YR3/3暗褐	
6	10YR4/6褐	
7	10YR4/3鈍い黄褐	しまりなし
8	10YR3/3暗褐	しまりあり
9	10YR4/6褐	しまりあり
10	5YR5/6明赤褐	焼土、粘性なし、しまりあり、褐20％
11	10YR4/4褐	砂質土、粘性弱
12	7.5YR3/2黒褐	しまりなし
13	7.5YR2/1黒	
14	10YR3/1黒褐	
15	10YR6/6明黄褐	地山崩壊土、しまりあり
16	5YR5/6明赤褐	焼土、粘性なし、しまりあり

c－d

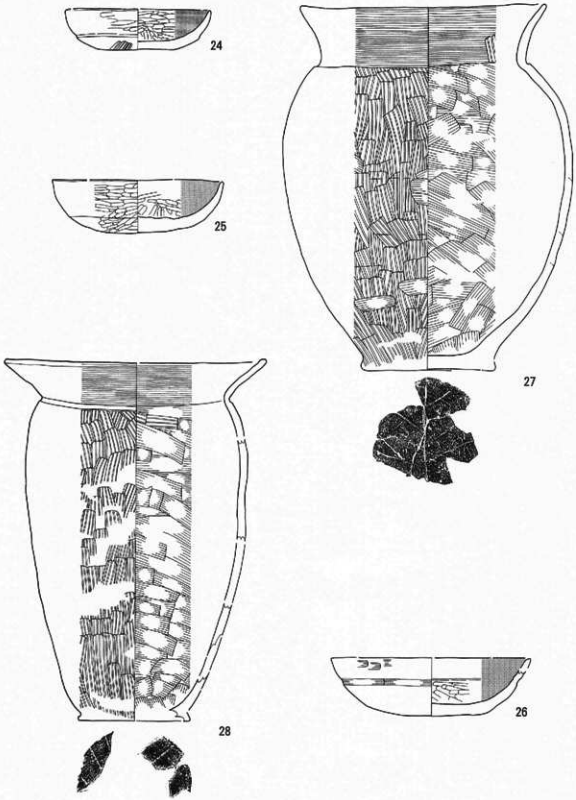
1	10YR3/3暗褐	しまりあり
2	10YR4/6褐	しまりあり、焼土ブロック10％
3	5YR3/6明赤褐	焼土、粘性なし、しまりあり
4	10YR3/2黒褐	しまりあり



a－b・c－d

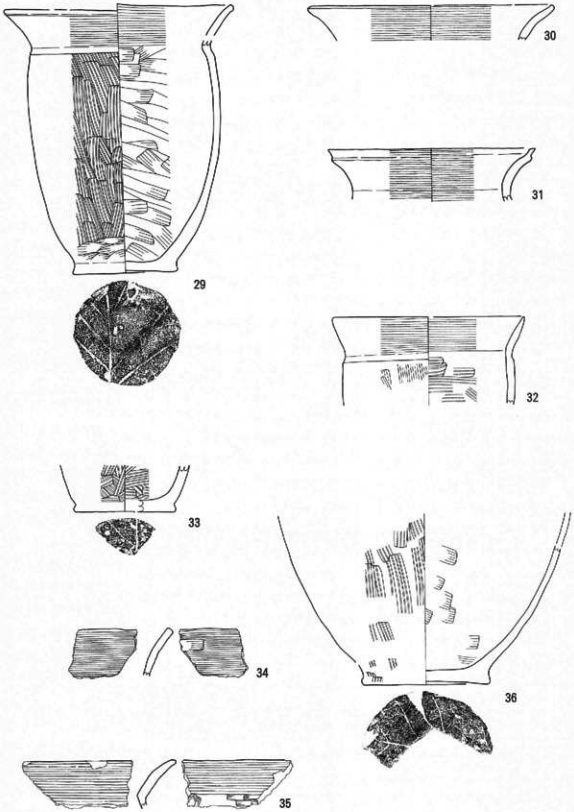
0　1:30　1m

第14図　ＲＡ25



S=1/3

第15図　ＲＡ25 出土遺物(1)



第16図　ＲＡ25 出土遺物(2)

ＲＡ26 竪穴住居跡

遺構（第17・18図、写真図版8・9）

〔検出状況・重複関係〕調査区北部東側の６Ｐ21ｃ～６Ｐ23ｆグリッドに位置する。同グリッド付近のⅣ層上面で暗褐色土のプランを検出した。後述のＲＡ27同様に、覆土上面が地山類似土(再堆積？)により被覆されていたため、当初はプラン把握が容易ではなかった。ＲＧ78・79の精査中に溝底面で黒褐色プランの一部を検出し、全体を把握することができた。現代の攪乱(畦畔設置痕？)により煙出しの上部を削平されるとともに、件の溝２条により壁上部を部分的に截られている。

〔平面形・規模〕やや隅丸の方形を呈する。辺長は、北西－南東方向で6.5m、北東－南西で6.9mを測る。本遺跡検出の竪穴住居跡中、最大級の規模を有する。

〔主軸方向〕Ｎ－41°－Ｗ

〔覆土〕上位は灰黄褐色土、中～下位は黒褐～暗褐色土で、南北壁際には褐色土が流入する。全体としては、レンズ状の自然堆積的様相であると解される。最上位層(断面の２)には灰白色パミス(十和田ａ降下火山灰と思われる)が疎らに含まれている。下位では小礫が比較的多く包含されている。

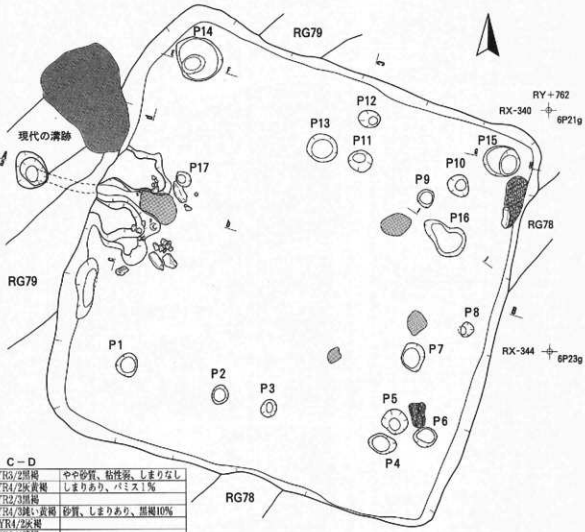
〔壁・床面〕壁は直立気味に立ち上がり、上部で僅かに外傾する。床面はほぼ平坦で、中央付近が堅く締まっている一方、壁際はやや軟らかい。貼り床はなされていない。東側の床面には焼成を受けた痕跡が３箇所、炭化物の薄い集積が２箇所、それぞれ検出された。床面焼土の焼成はそれほど強いものではなく、厚さ１cm程度である。炭化物は材という程に残りの良いものではない。厚さは３cmほどである。壁・床面ともに基本層序Ⅳ層に相当している。

〔柱穴・ピット〕床面でピット17個(Ｐ1～17、うち２個は底面に段差あり)を検出した。うち主柱穴と思われるものは、北壁側のＰ1－3－4、南壁側のＰ12－14(小穴部分)－15の合計６個であると想定される。底面レベル差は約９cmであり若干差はあるが、配置から推測すると、これらが襖持ちの主柱穴だったものと思われる。その他の11個については配置が規則性を欠き詳細不明である。本住居のカマドは単時期のものであり、全面的な建て替えは行われていないものと解釈されるが、部分的な住居規模の拡張は否定できない。残りのピットは拡張前の柱穴であった可能性もある。なお、Ｐ14覆土から比較的まとまった形で土器約1.58kgが出土している。

〔カマド〕位置：西壁中央付近に構築されている。作り替え痕跡はない。本体：上部をＲＧ79に截られており、残存状況は悪い。側壁は下部のみ残存する程度で、かつ残存部分が不整形であり、上部が破壊されるとともに崩壊しているものと思われる。火床部では70×50cmほどの楕円形状に焼土が広がっている。焼土の層厚は最大７cmほどである。焼成面はやや堅く締まるが、焼成はそれほど良好ではない。煙道・煙出し部：地下式の構造と思われる。火床部からほぼ真っ直ぐに煙出しへと続いている。残存する煙道幅は狭く、かつ上部がイレギュラーである。上部崩落して潰れたものと思われる。残存する下部の様相を見ると、煙出へ向けて緩やかな勾配で下っており、土坑状の煙出部へと接続する。

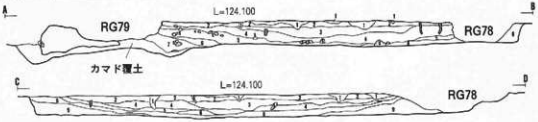
遺物（第18～20図38～63、写真図版20～22）

〔土師器〕坏・甕・鉢が8.80kg出土し、26点を図化・掲載した。カマド：側壁で坏(37)、甕(42・44・45・47)。床面：甕(43)。床面直上：甕(46・48)。Ｐ14：坏(38)、甕(49～51)。覆土：坏(39～41)、甕(52～55・57～62)。坏について。詳細不明な40を除いて外面に段を有する資料である。37は平底風丸底で、底部外面がケズリ調整された後、「×」の線刻(箆描き)が施される。38は洗面器形の大型の坏である。39は丸底風平底の坏で、内面黒色処理は剥落して痕跡程度しかない。40は底部の一部のみの残存であるが、底部内面中央



A－B、C－D

1	10YR3/2黒褐	やや砂質、粘性弱、しまりなし
2	10YR4/2灰黄褐	しまりあり、パミス1%%
3	10YR2/3黒褐	
4	10YR4/3暗い黄褐	砂質、しまりあり、黒褐10%
5	7.5YR4/2灰褐	
6	10YR3/4暗褐	
7	10YR3/2黒褐	砂質、粘性弱、しまりあり
8	10YR3/3暗褐	
9	10YR4/4褐	



RA26竪穴住居跡　床面ピット計測表

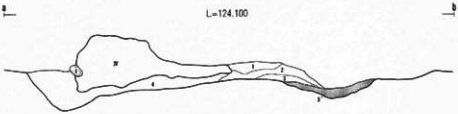
※径は重ね、東西×南北

番　号	P1	P2	P3	P4	P5	P6	P7	P8	P9	P10	P11	P12	P13	P14
開口部（cm）	35×35	30×30	35×30	47×34	44×42	49×38	40×47	23×24	35×37	42×35	42×35	34×31	52×46	74×71
底部径（cm）	25×22	21×19	15×10	30×25	20×17	30×22	28×35	14×14	16×20	18×15	18×15	13×14	34×35	63×56
深　さ（cm）	17	15	15	19	18	9	13	17	15	18	18	11	14	7
底面レベル	123.40	123.44	123.46	123.37	213.37	123.44	123.43	123.38	123.47	123.38	123.38	123.45	123.42	123.49

番　号	P14小穴	P15	P16	P17
開口部（cm）	38×34	62×52	79×57	25×23
底部径（cm）	27×24	51×45	58×40	13×14
深　さ（cm）	12	14	10	17
底面レベル	123.45	123.42	123.44	123.40

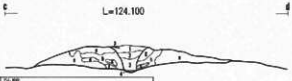
0　1:60　2m

第17図　ＲＡ26(1)



a－b

1	10YR5/6黄褐	砂質
2	10YR3/4暗褐	粘性強
3	10YR4/3灰黄褐	
4	10YR3/2黒褐	粘性弱、小礫3％
5	5YR5/6明赤褐	火床部焼土、粘性なし、しまりあり



c－d

1	10YR5/6黄褐	砂質
2	10YR3/4暗褐	粘性強
3	10YR5/8灰黄褐	
4	5YR5/8明赤褐	火床部焼土、粘性なし、しまりあり
a	10YR4/6褐	粘性弱、しまりあり
b	7.5YR4/2灰褐	しまりあり、明赤褐焼土ブロック10％
c	10YR6/4褐	しまりあり
d	10YR4/4褐	（cと同質）
e	10YR3/4暗褐	砂質土、粘性弱、しまりあり
f	10YR4/4褐	（eと同質）
g	7.5YR4/3褐	しまりあり、赤褐焼土10％
h	7.5YR4/4褐	しまりあり

e－f

1	10YR3/3暗褐	

g－h

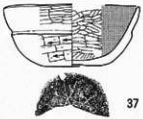
1	10YR3/2黒褐	
2	10YR3/3暗褐	

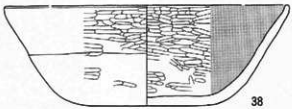
i－j

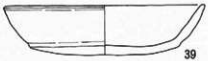
1	10YR3/3暗褐	

E－F・G－H・I－J　0　1:60　2m

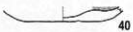
a－b・c－d　0　1:30　1m

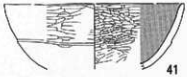

37

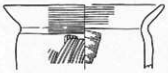

38

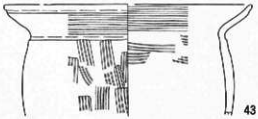

39

（内黒剥落）


40

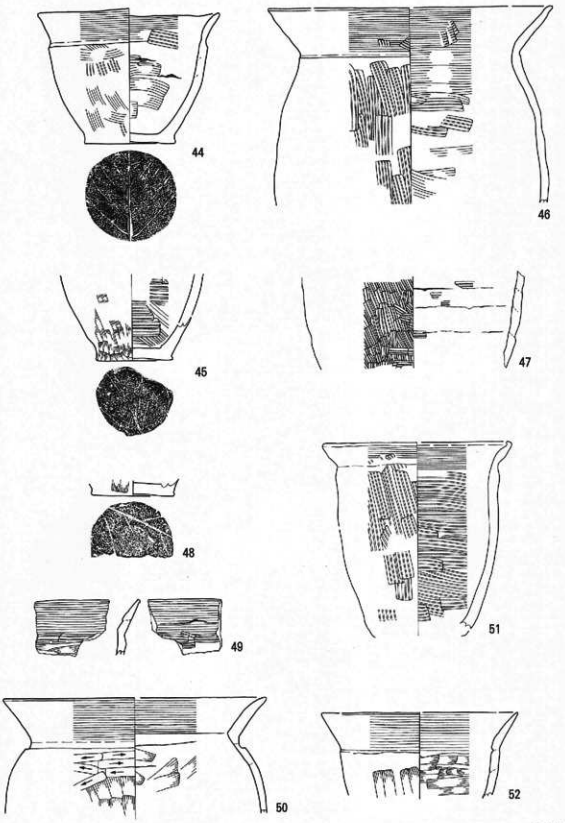

41


42


43

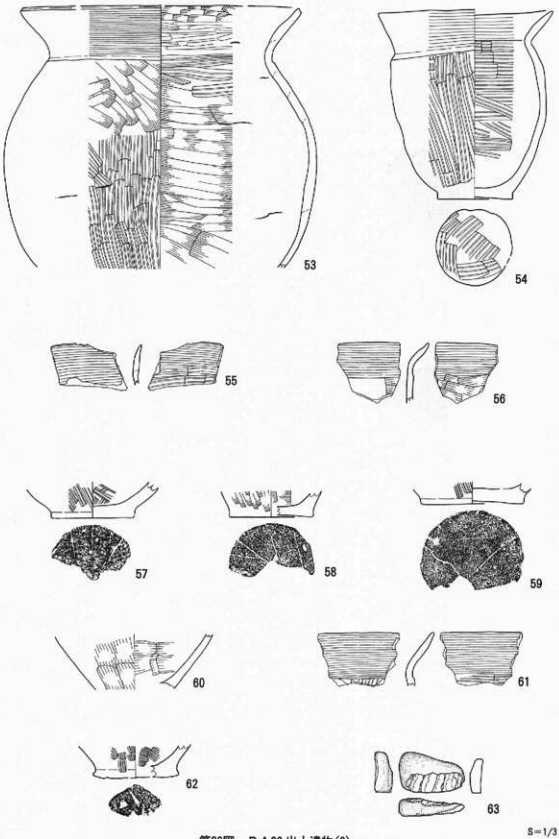
S=1/3

第18図　ＲＡ26(2)・出土遺物(1)



S=1/3

第19図　ＲＡ26 出土遺物(2)



第20図　ＲＡ26 出土遺物(3)

付近が窪んでいる。

〔あかやき土器〕精査時に少量の坏破片が覆土から出土したと記憶しているが、整理段階で確認できなかった。

〔石器〕覆土から1点出土した。63は節理による厚い剥片を素材とし、その一側縁に細長い剥離を連続的に施している。ただしその調整部分は鈍く、とても刃部とは呼べない形状である。ここでは不定形石器としたが、いわゆる削掻器的な使用は想定できず、用途は不明である。一種の石製品かもしれない。

時期　カマドおよび床面の出土遺物から奈良時代(8世紀後半代)と推定される。

ＲＡ27 竪穴住居跡

遺構（第21図、写真図版10・11）

〔検出状況・重複関係〕調査区北部東側の6Ｐ18ｅ～6Ｐ20ｆグリッドのⅣ層上面で検出した。プラン上面が地山類似土(地山再堆積層？)に被覆されており、北側一部のみを小規模プランとして認識していた。精査途上で住居跡であることが判明し、精査方針を変更した。その結果、覆土断面のセクションが著しく外した位置となっている。現場では別遺構との重複はないものと捉えたが、北側におけるプランの歪さ・床面の窪みから、別遺構重複の可能性も否定できない。

〔平面形・規模〕隅丸方形を基調とするが、西壁の北側が不整に張出し、かつ南側でも低い段がついて緩く張出している。北西－南東方向の辺長は南壁で3.2m、北壁では張出し部分も含めると3.9m。北東－南西では最大3.7mを測る。

〔主軸方向〕N－34°－W

〔覆土〕主体は黒～黒褐色土で、中～下位に褐・褐灰色土の部分的な流入が見られる。堆積の様相は、概ねレンズ状の自然堆積的である。床面直上付近の覆土(断面Ａ－Ｂの2、Ｃ－Ｄの4に相当)は土師器片を包含するが、出土量は多くない。

〔壁・床面〕壁は立ち上がりがやや不明瞭で、緩く外傾している。床面は凹凸があり、北側でやや窪む。

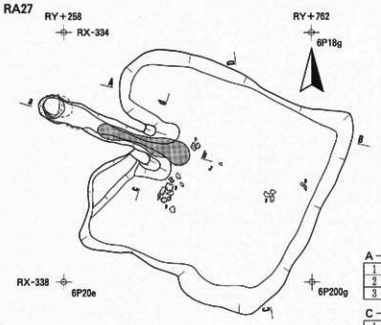
〔柱穴・ピット〕床面および周辺では検出されていない。

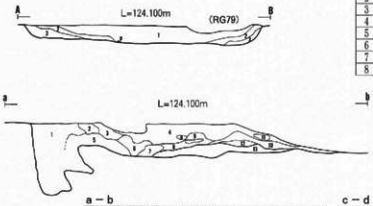
〔カマド〕位置：北西壁の中央に構築されている。作り替え痕跡はない。本体：側壁は、断面ｃ－ｄを参照すると、竪穴本体の掘削時に意図的に残存させた地山から作り出されている。火床部は不明瞭である。焼成不良な痕跡程度の焼土が煙道部まで続くが、締まりはそれほどなく、断面でも分層できるほど層をなしていない。煙道・煙出し部：煙道部は半地下式と推測される。本体側の煙道は狭いが、煙出方向に向かうに従い幅広くなり、側面がオーバーハングする部分も認められる。煙出部は土坑状の掘り込みであり、煙道接続部分が段をなしている。この段は断面でみるとイレギュラーなもので、地山の崩落によるものと思われる。

遺物（第21・22図64～74、写真図版22・23）

〔土師器〕3.16kgが出土した。器種は坏・甕である。12点を図化・掲載した。カマド：側壁で甕(66)。煙道部では甕(65)。床面直上：坏(64)、甕(67・68)。覆土：甕(69～75)。坏について。図化できたものは64のみである。比較的大形の坏であり、器面調整は、外面がハケメ→ナデ→ミガキ(口縁部)、内面はミガキを放射状に施す。段は内外面ともに認められない。底部は欠損し、詳細不明である。坏としたが、別器種(高坏？)かもしれない。甕について。全体の形態が類推できるのは66・67の2点で、他は部分的である。67は弱いながらも頸部有段であるのに対して、66は無段である。ともに内外面はハケメ主体の調整である。なお、67はＲＧ79覆土出土破片と接合。木葉底の資料は69・70の2点、70の木葉痕は二種の重複である。

時期　カマド付近および床面の出土遺物から奈良時代(8世紀後半代)と推定される。





A－B

1	10YR3/2黒褐	やや砂質?
2	10YR3/1黒褐	しまりあり
3	10YR3/3暗褐	

C－D

1	10YR3/2黒褐	粘性弱、しまりあり
2	10YR4/6褐	しまりあり、黒褐ブロック
3	10YR3/2黒褐	
4	10YR3/3暗褐	しまりあり
5	10YR3/4暗褐	
6	10YR4/2灰黄褐	粘性強
7	10YR4/1褐灰	粘性強
8	10YR3/4暗褐	(5と同質)

平面・A－B・C－D

0 1:60 2m

a－b・c－d

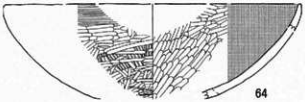
0 1:30 1m

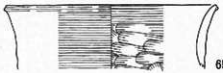
a－b

1	10YR3/4暗褐	炭化物粒1%
2	10YR4/2純い黄褐	やや砂質、粘性弱、しまりあり
3	10YR4/4褐	しまあり
4	10YR4/3純い黄褐	
5	10YR5/6黄褐	砂質、しまりあり、地山起源?
6	10YR4/2灰黄褐	粘性強
7	10YR4/6褐	粘性弱、地山起源?
8	10YR4/3純い黄褐	しまりなし
9	10YR4/2灰黄褐	(5と同質)
10	10YR7/6明黄褐	しまりあり
11	2.5YR4/6明赤褐	焼土ブロック層、粘性弱
12	2.5YR4/6明赤褐	地土ブロック層、粘性弱
13	7.5YR4/2灰褐	弱く焼成(火床部?)

c－d

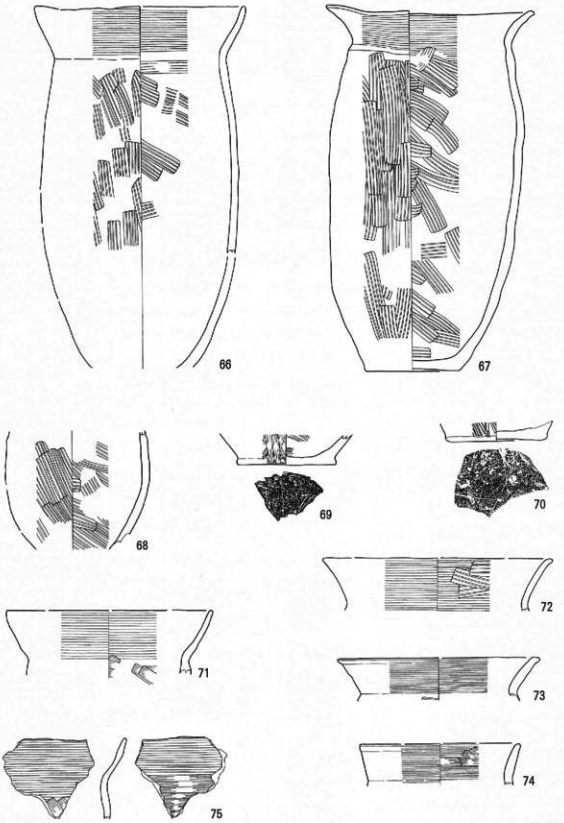
1	10YR4/2純い黄褐	
2	2.5YR4/6明赤褐	焼土ブロック層、粘性弱
3	10YR4/2純い黄褐	やや砂質、粘性弱、しまりあり
4	10YR7/6明黄褐	しまりあり
5	10YR4/2純い黄褐	やや砂質、粘性弱、しまりあり
6	10YR7/6明黄褐	しまりあり
7	7.5YR4/2灰褐	弱く焼成(火床部?)
a	10YR4/3純い黄褐	砂質、粘性弱
b	10YR5/6黄褐	砂質、粘性弱、しまりあり
c	10YR4/6褐	しまりあり
d	7.5YR5/6明褐	しまりあり
e	2.5YR4/2灰褐	弱く焼成、炭化物微量





S=1/3

第21図　RA27・出土遺物(1)



第22図　ＲＡ27出土遺物(2)

2．土坑

ＲＤ60 土坑

遺構（第23図、写真図版12）

調査区北部の６Ｐ25ｇグリッドに位置する。他遺構との重複はない。平面プランは多角形ぎみの不整な楕円形である。長径1.3m×短径0.8mを測る。皿形の断面形で深さは約10cm。壁は外傾、底面はほぼ平坦である。覆土は暗褐色土の単層である。

遺物　出土していない。

時期　出土遺物を欠いており時期特定不能である。

ＲＤ61 陥し穴状遺構

遺構（第23図、写真図版14）

７Ｐ１ｈグリッドのⅢ層面で検出した。他遺構との重複関係はない。平面形は、細長い溝状を呈している。開口部の規模は、長径2.0m×短径0.35mである。長軸側の断面では、底面から壁が直立してほぼ箱状を呈する。短軸側では底面から壁が直立して立ち上がるが上部で壁がやや外傾しており、Ｙ字状を呈する。深さはおよそ48cmを測る。Ⅳ層（粘土質シルト層；地山）を掘りぬき、底面ではⅤ層（砂層）が露出している。覆土は黒色土の単層であり、人為堆積の可能性が強い。

遺物　出土していない。

時期　出土遺物が無く時期決定の資料を欠く。形状・規模等は縄文時代の陥し穴状遺構（Ｔピット）に類似する。調査区中央部西側で縄文土器が出土していること、本遺跡北側に縄文時代晩期の遺構・遺物が検出された本宮熊堂Ａ遺跡が所在すること等を考え合わせると、本土坑も縄文時代に属するものと思われる。

ＲＤ62 土坑

遺構（第23図、写真図版12）

６Ｐ24ｉグリッドのⅢ層下位面で検出された小規模な柱穴状土坑である。ＲＺ09に載られている。大略、平面では楕円形を呈しており、規模は長径52cm×短径46cmである。壁は外傾しており、底面は段差をなしている。覆土は暗褐色土の単層である。

遺物　出土していない。

時期　出土遺物を欠いており、時期特定不能である。

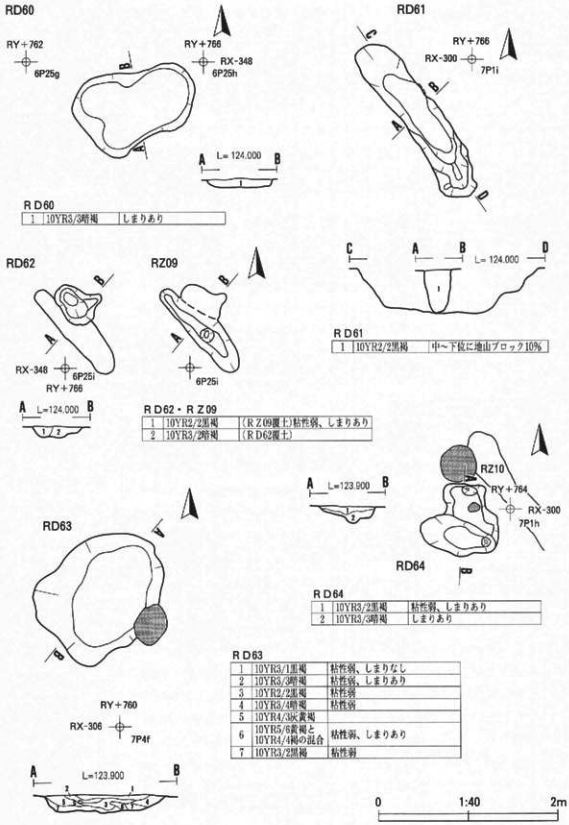
ＲＤ63 土坑

遺構（第23図、写真図版12）

７Ｐ３ｅグリッドのⅢ層下位面で検出した。他遺構との重複関係はない。平面プランは楕ね、長径1.6m×短径1.2mの楕円形状を呈する。北西壁が不整ではあるが、崩落したものとも思われる。北側の壁はやや外傾、南側壁は斜めに外傾して立ち上がりが明瞭ではない。底面には若干の凹凸がある。覆土は黒褐色土を主体とするが、細分可能であり、層が入組んでいる。人為的な堆積様相である。

遺物　土師器の小破片が微量(0.01kg)出土しているが、図化不能であり掲載していない。

時期　覆土から土師器小片が出土しているが、量的な保証がなく、時期推定の根拠とはなりえない。配置・



R D60

1	10YR3/3暗褐	しまりあり

R D61

1	10YR2/2黒褐	中～下位に地山ブロック10%

R D62・R Z09

1	10YR2/2黒褐	(R Z09覆土)粘性弱、しまりあり
2	10YR3/2暗褐	(R D62覆土)

R D64

1	10YR3/2黒褐	粘性弱、しまりあり
2	10YR3/3暗褐	しまりあり

R D63

1	10YR3/1黒褐	粘性弱、しまりなし
2	10YR3/3暗褐	粘性弱、しまりあり
3	10YR2/2黒褐	粘性弱
4	10YR3/4暗褐	粘性弱
5	10YR4/3にぶい黄褐	
6	10YR5/6黄褐と10YR4/4褐の混合	粘性弱、しまりあり
7	10YR3/2黒褐	粘性弱

第23図　R D60・61・62・63・64、R Z09

検出層位等から見て古代に属する可能性は否定できないが、時期推定の資料を欠いており、所属時期は不明である。

ＲＤ64 土坑

遺構（第 23 図、写真図版 13）

調査区北東部７Ｐ１ｇグリッドに位置する。Ⅲ層下位面でプラン確認した。平面形は不整で、長径90cm×短径45cmの長楕円形の掘り込みに浅い方形の段が付随する形である。壁は外傾、底面には凹凸が見られる。覆土は上下に２分されるが、然程の違いはない。

遺物　出土していない。

時期　出土遺物を欠いており、所属時期は不明である。

ＲＤ65 土坑

遺構（第 24 図、写真図版 13）

調査区北東部７Ｐ２ｈグリッド付近のⅢ層下位面で検出した。平面プランが不整な弧状を呈している。北西側は深さ 10cm程度と浅い溝状である。一方、南東側は掘り込み状となっているが不整であり、新期の攪乱によるものかもしれない。覆土は暗褐色の単層である。

遺物　出土していない。

時期　出土遺物を欠いており、時期不明である。

ＲＤ66 土坑

遺構（第 24 図、写真図版 13）

７Ｐ２ｇグリッドのⅣ層面で検出した。北東側がやや外側に広がるが覆土の様相から見て崩落したものと思われ、本来は径 90cm程の略円形プランを呈したものと推測される。壁は外傾して浅鉢形の断面形を呈する。底面はほぼ平坦である。覆土は地山ブロックが混入する暗褐色土単層である。

遺物　出土していない。

時期　出土遺物を欠いており、所属時期は不明である。

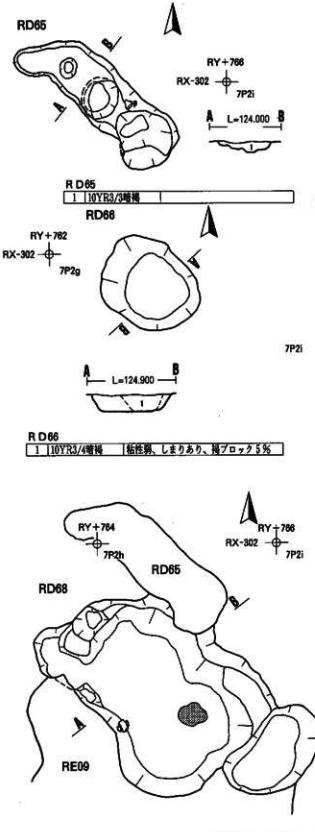
ＲＤ67 土坑

遺構（第 24 図、写真図版 13）

６Ｐ19ｙグリッドに位置する。検出層位はⅢ層下で、Ⅳ層上面でプラン確認した。平面形は長径 2.1m×短径 1.8mの楕円形である。壁は底面から外傾して立ち上がるが、北東側では一部段差をなしている。壁上部の崩落であるかもしれない。底面はやや凹凸がある。覆土は黒褐・暗褐・褐色土が混成するものであり、黒褐色土中には焼土粒や地山小ブロックが混入する一方、覆土全体に土師器片が多く包含されている。堆積様相を見ると、概ねレンズ状を呈するように見えるが、出土した土師器片は人為的に投棄されたものと推測されることから、数回にわたる人為的な遺物・土壌の投げ捨てにより埋没したもの（人為堆積）と思われる。

遺物（第 27・28 図 76～92、写真図版 23・24）

〔土師器〕覆土から約 5.19kg分の坏・甕が出土した。15 点を図化・掲載した。出土層位と器種。底面：甕(84)。覆土下位：甕(83)。覆土中位：坏(76・79)。甕(86)。覆土〔上位〕：坏(77・78・80～82)、甕(85・87



RD65

1	10YR3/3暗褐	

RD66

1	10YR3/4暗褐	粘性弱、しまりあり、褐ブロック5%

RD67

1	10YR2/2黒褐	粘性強、焼土ブロック1%
2	10YR3/3暗褐	粘性弱、黒褐20%
3	10YR2/1黒褐	粘性強、焼土ブロック10%
4	10YR4/6褐	粘性強、しまりあり
5	10YR2/1黒褐 10YR4/6褐の混合	
6	10YR2/1黒褐	粘性強、焼土ブロック1%
7	10YR3/4暗褐	粘性強、焼土ブロック20%
8	5YR3/1黒褐	粘性強、地山ブロック2%
9	10YR5/8黄褐	やや砂質、地山崩壊土

RD68

1	10YR3/1黒褐	明黄褐ブロック3%、炭化物少量
2	10YR3/1黒褐	焼土・炭化物・地山ブロック多量
3	10YR4/3鈍い黄褐	砂質、粘性弱、しまりあり 地山ブロック20%
4	10YR4/4鈍い黄褐	(3と同質)
5	10YR4/4褐	粘性弱、しまりあり、炭化物少量
6	10YR6/8明黄褐と 10YR4/4褐の混合	
7	10YR4/4褐	粘性弱、しまりあり
8	10YR6/8明黄褐と 10YR3/3暗褐混合	
9	10YR6/8明黄褐と 10YR3/3黒褐混合	しまりなし
10	10YR6/8明黄褐	黒褐30%
11	10YR4/1褐灰	
12	10YR5/6黄褐	粘土質、しまりあり

第24図　RD65・66・67・68

～88・90)、甕？(89)。坏について。底部は基本的に平底であるが、78・80はやや丸底風である。77・80を除いて、外面に段を有する。76・79の段は、幅広く深いナデによりやや「沈線」風になる。器面調整はミガキ主体で、76・77・81では下半～底部にハケメが見られる。いずれも内面黒色処理されており、80では外面にも施されている。甕について。全体の形態を把握できる資料はない。83・85は頸部有段の長胴甕で、器面調整は外面ハケメ、内面篦ナデである。底部の残存する84・86は底部縁辺が張出し、底面には木葉痕が見られる。89はここでは甕の口縁破片としたが、両面黒色処理されており、坏口縁かもしれない。

〔土製品〕 2点出土した。91は完形の土製勾玉で、小径の貫通孔1個を有する。断面で見ると、両側から穿孔しているようである。表面には部分的にミガキ痕跡が見えるが不明瞭である。92は土製紡錘車の欠損品である。中心に貫通孔をもつ円筒形(ボタン形)を呈していたと思われる。表面はミガキによる調整が加えられているが、輪積み痕を残している。

時期 出土遺物の年代観から、奈良時代(8世紀後半代)に属すると推測される。

ＲＤ68 土坑

遺構（第24図、写真図版14）

７Ｐ２ｇ～７Ｐ２ｈグリッドに位置する。ＲＥ09竪穴住居状遺構の床面(貼床面)の下位で検出した。長径2.3m×短径1.5mの楕円形ないしは隅丸方形気味のプランである。南東側に一部不整な張出しが見られるが、本土坑に本来伴うものであったか不明である。底面は凹凸・段差のある不整なもので、Ⅴ層の砂礫層が露出する。底面の一部にはごく弱い焼成部分があるが小規模・不明瞭である。壁は床面から外傾して立ち上がる。覆土は焼土・炭化物粒・地山ブロックが混入する黒褐色・褐色土、および地山混合土で構成される。人為的な堆積様相で、ＲＥ09の貼床構築に伴うものではないかと思われる。

遺物（第28図93、写真図版14）

〔土師器〕下位～底面付近で0.20kgが出土した。1点のみ(93)を図化した。93は頸部以上を欠失する長胴甕である。頸部に段を有しており、胴部外面はハケメ、内面上部は篦ナデ・下部はハケメ調整されている。底部は木葉底であるが、大部分が欠失しており詳細不明である。

時期 出土した土師器甕の特徴から見て、奈良時代(8世紀後半代)に属するものである。

３．住居跡状竪穴遺構

ＲＥ09 住居跡状竪穴遺構

遺構（第25図、写真図版11）

〔検出状況・重複関係〕７Ｐ２ｈグリッド付近のⅢ層下位面で、黒褐色土の広がりとして検出した。ＲＤ68を地山起源のシルトで被覆して床面としている。ＲＤ65に北側の一部を截られている。

〔平面形・規模〕南～南西側を現代の攪乱(畦畔設置痕？)により截られており、全体の形状は不明である。残存部分から推測すると、東西3.1×南北3.2m程の楕円形状ないしは隅丸方形状を呈したものと思われる。

〔覆土〕黒褐～暗褐色土を主体とする。

〔壁・床面〕床面南側は平坦である。北側は緩く傾斜し落ち込んで段差となり、中央付近では掘り込み状に落ち込む。この段差・落ち込みは、精査段階でＲＤ68を被覆していた貼床層(整地層)を掘りすぎた可能性がある。壁は北側のみ残存するが、立ち上がりが不明瞭である。

〔柱穴〕検出していない。
〔貼り床〕ほぼ全体に、Ⅳ層起源の褐色シルトを用いて床面を構築している。
遺物（第16図31、写真図版19）
〔土師器〕0.7kgが出土した。覆土から出土した甕口縁部1点がＲＡ25出土の土師器甕(31)と接合している。
時期　遺物が僅少であり量的な保証がなく〔流れ込みの可能性もある〕判断材料としては弱いが、ＲＡ25との出土遺物の接合関係から、同住居跡と同じく奈良時代（8世紀後半代）と推測される。

4．溝跡

ＲＧ78溝跡

遺構（第26図、写真図版15）
調査区北部を南西から北東へと横切る形で検出された。検出部中央付近を現代の攪乱(畦畔設置痕？)により截られている。ＲＡ26の壁・覆土上部を截っている。第1次調査において検出されているＲＧ02に接続するものであり、同一の溝跡と推定される。北東側はさらに調査区外へと延びる。検出部分の全長は約34.8mを測る。幅は開口部で0.7～1.4m、底面では0.4～0.8mである。底面はほぼ平坦で、壁は斜めに外傾しており、深さは20～30cmほどである。底面のレベルを参照すると、北東→南西で傾斜している。覆土は黒褐色土の自然堆積層で、分層しているが然程の違いはない。
遺物（第28図94～96、写真図版24）
〔土師器〕総量約40gと僅少である。94のみ図化した。甕の口縁～頸部である。頸部の段は不明瞭で、外面はナデ調整、内面ではナデ→ハケメ調整が見られる。
〔須恵器〕1点のみである。95は大甕の体部片で、外面には平行タタキが見られる。
〔石器類〕黒曜石の剥片1点(96)である。刃部調整・使用痕は見られず、石器としての使用は疑わしいが、今次調査では他の出土例はなく、意図的に搬入されたものと考えられる。
時期　ＲＧ83との截り合い関係にも鑑みて、平安時代かそれ以降と思われるが、具体の時期は不明である。

ＲＧ79溝跡

遺構（第26図、写真図版15）
調査区北部においてＲＧ78にほぼ並行する形で検出した。南西側・北東側でそれぞれ二又に分岐し、調査区外へと延びている。ＲＡ26・27の壁・覆土上部を截っている。異なる2条の重複の可能性も考えたが、断面において確認できず、同一の溝とした。南西で分岐した一方は第1次調査のＲＧ01に接続しており、同一遺構と推定される。検出部分の全長は約29.3m、幅は開口部で0.6～1.7m、底面では0.4～1.3m。底面は部分によって平坦な箇所と窪む箇所があり、一様ではない。壁は斜めに外傾しており、立ち上がりが不明瞭な部分もある。深さは10～20cmほどである。底面のレベルを参照すると北東側が高く、北東→南西方向へ傾斜している。覆土は自然堆積の黒褐色土主体である。
遺物（第28図97、写真図版24）
〔土師器〕770gが出土した。図示した97は坏口縁部である。外面はナデ・ミガキ、内面はミガキ調整で、外面には低いながらも段を有する。黒色処理はなされていない。
時期　ＲＧ83との截り合い関係にも鑑みて、平安時代またはそれ以降のものと思われるが、具体の時期は

不明である。

ＲＧ83 溝跡

遺構（第 26 図、写真図版 16）

調査区北端付近で東西方向に横走する帯状プランを検出した。検出層位はⅣ層上面。ＲＧ78・79 に載られており、それらよりも古期の溝である。北西・南東側の調査区外へとそれぞれ延びている。検出部分の全長は約 27.2m である。第 1 次調査区の北を掠めて、第 4 次(2)調査区のＲＧ014 へと連結する同一遺構と推測される。覆土は黒～黒褐色土(自然堆積)で、検出面の覆土最上位に灰白色パミス(十和田ａ降下火山灰と推測される)が微小ブロック状に混入していることが確認されている。検出部分の全長は約 5.4m である。残存部分はごく浅く深さ 7 ㎝で、底面が平坦な逆台形状の断面を呈する。開口部は断面セクションを参照すると、最大幅約 54㎝である。

遺物（第 28 図 98～100、写真図版 25）

〔土師器〕70ｇ分が出土した。図化した 98～100 はいずれもロクロ成形された坏である。いずれも外面はロクロナデのみである。98・99 の内面はミガキ調整＋黒色処理。99 は黒色処理されていない、いわゆる「あかやき」の坏である。98・99 は回転糸切り痕跡が明瞭であるが、100 は箆の再調整により糸切り痕が消されている。

時期　覆土上面の灰白色パミスの混入状況や出土遺物の様相から、第 4 次調査におけるＲＧ014 の年代解釈と同様、平安時代の溝跡と推定される。

ＲＧ84 溝跡

遺構（第 26 図、写真図版 16）

調査区中央部をやや斜位に横断している。南側の一部は現代の攪乱により壊されている。東側は調査区外へと延び、西側では二又に分岐、かつＲＧ78 に載られている(乃至は接続？)。検出部分の全長は約 27.4m、幅は開口部で 0.5～1.1m、底面では 0.4～0.5m。底面は窪んで、壁は外傾。断面形は「Ｕ」形(乃至は「Ｖ」形)を呈する。深さは 20～30㎝ほどである。断面図ではやや南東側が深く、北西→南東に傾斜するものと思われるが、それほどのレベル差はない。覆土は上位は黒褐色土、中～下位は暗褐色土である。自然堆積と思われる。

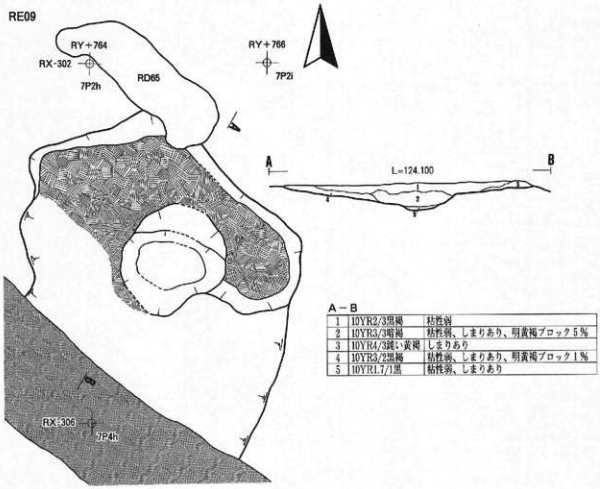
遺物　土師器片 100ｇ分が出土しているが、図化不能であり割愛した。

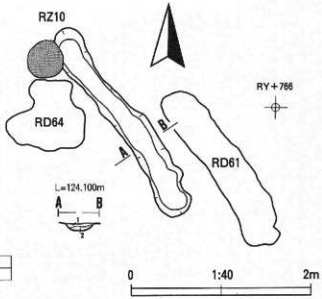
時期　出土遺物が微量で時期判断は適わないが、ＲＧ78 に載られており(または接続？)、平安時代(またはそれ以降)に属するものと思われる。ただし、具体の時期は不明である。

ＲＧ12 溝跡

遺構（第 4 図、写真図版 3・4）

調査区北東部の 6 Ｐグリッド北東隅付近において北西－南東方向へ延びるものと思われる。野外調査時点では、本溝跡の存在に全く気付かなかった。室内整理段階で前述のＲＡ04 床面の「砂礫層の露出」が気にかかり、改めて第 1 次調査の遺構配置を確認したところ、当該「砂礫層」がＲＡ04 に載られる本溝跡の覆土だった可能性に気付いた。よって、本溝跡については詳細な記録がなく、ＲＡ04 の全景写真に平面の一部が、調査区の深掘り(Ｔ１)土層断面の写真に断面の一部が、それぞれ確認できるに止まる。覆土は砂礫を主体と

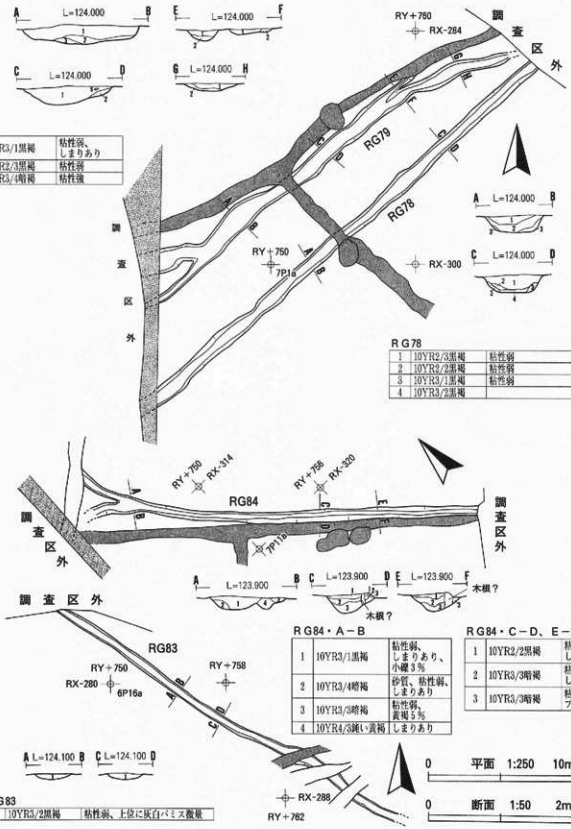




RZ10

1	10YR2/3黒褐	
2	10YR3/3暗褐	

第25図　ＲＥ09、ＲＺ10



RG79

1	10YR3/1黒褐	粘性弱、しまりあり
2	10YR2/3黒褐	粘性弱
3	10YR3/4暗褐	粘性強

RG78

1	10YR2/3黒褐	粘性弱
2	10YR2/2黒褐	粘性弱
3	10YR3/1黒褐	粘性弱
4	10YR3/2黒褐	

RG84・A－B

1	10YR3/1黒褐	粘性弱、しまりあり、小礫3％
2	10YR3/4暗褐	砂質、粘性弱、しまりあり
3	10YR3/3暗褐	粘性弱、黄褐5％
4	10YR4/3褐い黄褐	しまりあり

RG84・C－D、E－F

1	10YR2/2黒褐	粘性弱、しまりあり
2	10YR3/3暗褐	粘性弱、しまりあり
3	10YR3/3暗褐	粘性弱、黄褐ブロック5％

RG83

1	10YR5/2黒褐	粘性弱、上位に灰白パミス微量

第26図　RG78・79・83・84

し、南東側は第１次調査区へ、北西側は調査区外へと延びているものと思われるが、詳細は全く不明である。
遺物　本遺構に伴う遺物は確認されていない。
時期　今次調査分からは全く不明であるが、第１次調査報告では「奈良時代以前」とされている。

５．その他の遺構

ＲＺ09 溝状遺構

遺構（第 23 図、写真図版 12）

調査区北東部６Ｐ24ｉグリッド付近のⅣ層上面、ＲＡ04 の南西側に位置する。ＲＤ62 を截っている。全長約 72cm、開口部幅は最大約 18cm、深さ約６cmの浅く小規模な溝状土坑である。断面形は開いたＵ形で、単層の黒色土に被覆される。位置的にはＲＡ04 に付随していた可能性も考えられるが、明確な根拠はない。
遺物　出土していない。
時期　出土遺物を欠き時期判断が適わない。時期不明である。

ＲＺ10 溝状遺構

遺構（第 25 図、写真図版 14）

調査区北東部６Ｏ25ｈ～７Ｐ１ｈグリッドⅣ層上面で検出した。他遺構との重複関係はないが、一部、新期の攪乱を受けている。全長約 1.27m、開口部幅約 11cm、深さ約５cmの浅く小規模な溝状の土坑である。断面形は開いたＵ形、覆土は黒色土単層である。
遺物　出土していない。
時期　出土遺物を欠き時期判断が適わない。時期不明である。

６．遺構外出土遺物

遺構外で出土した遺物の総重量は、約 7.42kg 分であり、遺構内出土遺物(総量約 39.2kg)に比して著しく少量である。内訳は、縄文時代の遺物(縄文土器・石器)、古代の遺物(土師器・須恵器)である。

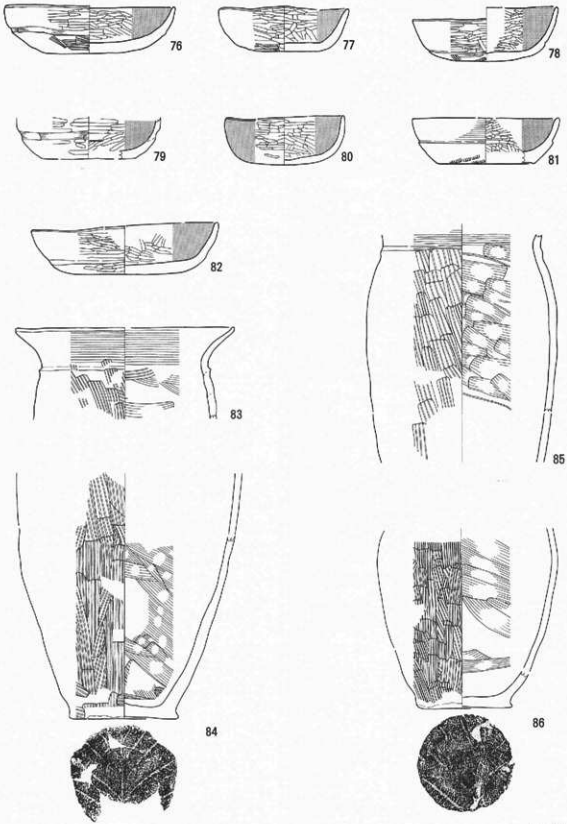
（１）縄文時代

縄文土器および石器類が出土したが、量は多くない。なお、石器２点は所属時期が明瞭ではないが、古代の遺物とは考えにくいため、ここでは縄文時代に括っている。

〔縄文土器〕調査区中央西側付近７Ｏ24ｖ～７Ｏ25ｗグリッド付近のⅡ層下位から微量出土した。ある程度接合した１点(102)を掲載した。文様を欠く粗製深鉢の胴部片で、具体の所属時期は不明である。本遺跡の北には晩期の遺構・遺物が検出された本宮熊堂Ａ遺跡(岩手埋文 1997)が所在しており、当資料も晩期に属するものかと思われる。

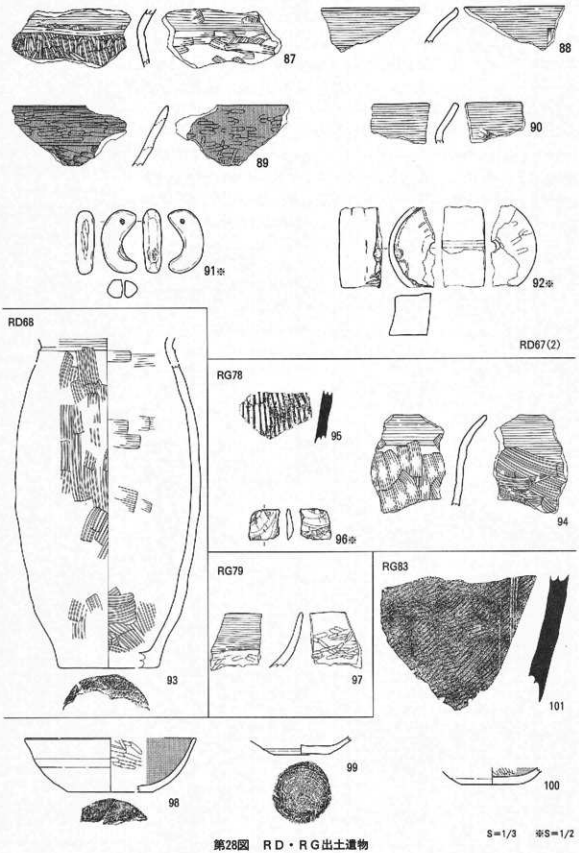
〔石器類〕２点出土している。103 は背面に自然面を残す剥片である。縁辺部に断続的でごく僅かな刃部調整？が見られるが、「刃部」とはいえないものであり、Ｕフレ(ないしはＲフレ)に分類されるものであろう。104 は敲磨器で、扁平な自然礫の一縁辺にごく弱い磨り痕を有するものである。長軸側の片側末端には敲打痕と思われる潰れ部分があるが、ごく弱いものである。

RD67(1)



S=1/3

第27図　ＲＤ出土遺物



S=1/3　※S=1/2

第28図　ＲＤ・ＲＧ出土遺物

(2)古代

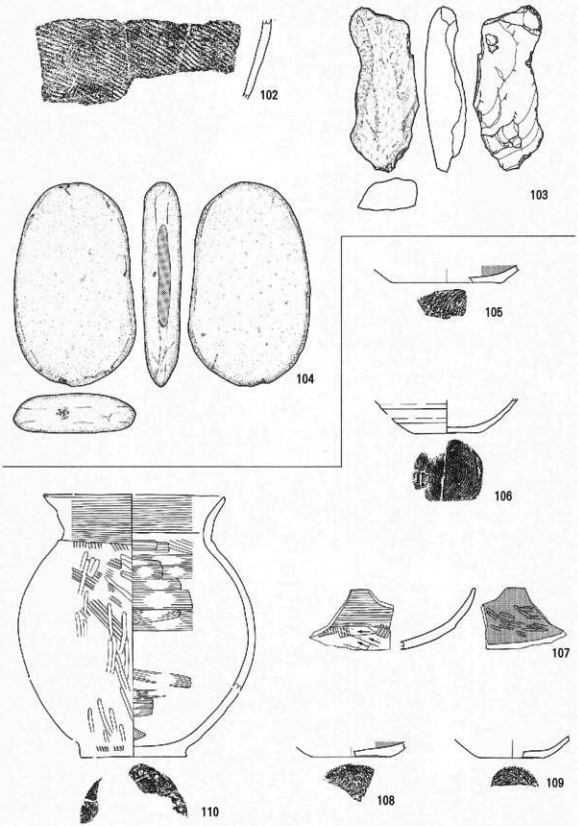
遺構内遺物と同様に、土師器・須恵器が出土している。ロクロ成形のものと非ロクロ成形のものが混在しており、奈良～平安時代の時期幅をもつ資料である。量的には非ロクロ成形の奈良時代の土師器が多い。

〔土師器〕総量で約7.4kgの土師器片が出土した。グリッド別の出土量は、6Oグリッド約0.01kg・6Pグリッド約2.5kg・7Oグリッド約0.3kg・7Pグリッド約1.8kg・9Pグリッド約0.01kgである[1]。層位的には、その大半がⅡ層からの出土であり、僅かにⅢ層からの出土を含む。11点を掲載している。105～109は坏であり、107を除いて、底部に回転糸切り痕跡を残すロクロ成形のものである。106・109は、内面黒色処理されない(または剥落した?)ものである。107は非ロクロと思われるが、小破片であるため詳細不明である。110～115は甕である。110は胴張りで球胴形を呈する甕である。111～115は甕底部の破片で、器形等の詳細は不明である。底部には、110・111・112・115の4点で木葉痕、114では回転糸切り痕が見られる。

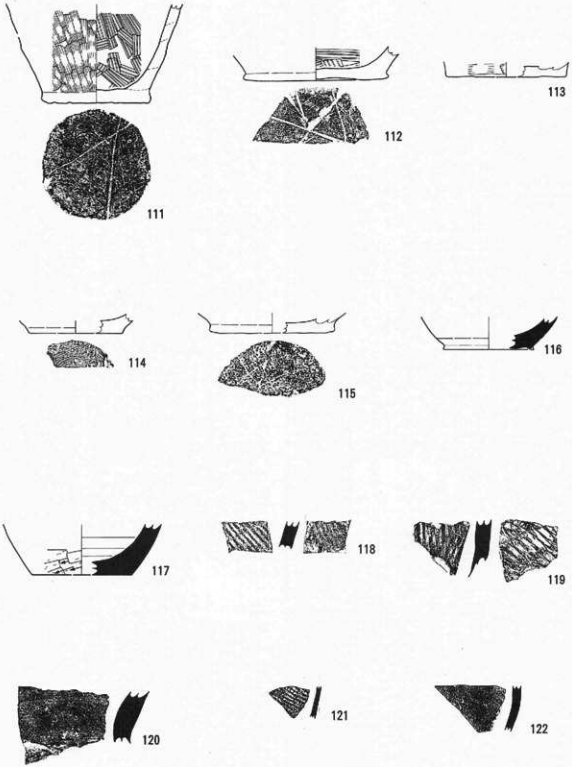
〔須恵器〕遺構外で7点(116～122)が出土しており、すべて掲載した。116・117は壺(瓶)底部、118～121は甕の頸および胴(体)部片である。122は壺の胴部片と思われる。

<註>

(1) 遺構外出土した土師器片約2.7kgが、単に「OKO－00－10 (日付) 黒褐色土」という注記のまま取り上げられていた。これは調査員間で意思の疎通を欠き、取り上げの方法(出土地点・層位を記録するという最も基本的な事項)が守られなかったことに由来するものである。偏に、指導・点検を徹底できなかった筆者の不手際である。この注記の「黒褐色土」という注記は全く意味をなさない(Ⅱ層もⅢ層も見方によっては「黒褐色土」である)が、曲げて解釈すればⅡ層を意味するものではないかと思われることから本報告中では(真に便宜的ではあるが)Ⅱ層として処理した。また、袋の日付等から考えると、これらの土師器片は概ね6P～7Oグリッド付近の出土土器ではないかと思われるが、筆者にはグリッドを特定する手がかりすらないため細分すること能わず、出土グリッドは不明とした。



第29図　遺構外出土遺物(1)



第30図　遺構外出土遺物(2)

S=1/3

第2表　遺物観察表

土師器・あかやき土器・須恵器

黒色処理凡例　◎：内外面　○：内面のみ　△：痕跡のみ　×：不処理(杯のみ)

掲載番号	登録番号	写真図版	出土地点・層位	器種	分類	外面調整		内面調整		黒色処理	計測値：cm			備考
						口縁部	体部	口縁部	体部		口径	底径	器高	
1	2	17	RA04・竈支脚	土師器・坏	IA1	ミガキ	ミガキ、ケズリ	ミガキ	ミガキ	○	12.7		3.8	
2	10	17	RA04・竈支脚、覆土	土師器・坏	IA2	ミガキ	ミガキ	ミガキ	ミガキ	○	14.6		5.0	
3	12	17	RA04・床面北隅、P6覆土	土師器・坏	IA1	ナデ→ミガキ	ナデ→ミガキ	ミガキ	ミガキ	○				
4	13	17	RA04・覆土上位(検出面)	土師器・坏	IB1	ミガキ	ミガキ、ナデ	ナデ→ミガキ	ミガキ	○	(17.0)		(4.7)	
5	122	17	RA04・覆土	土師器・坏	I	ミガキ	ナデ、ミガキ	ナデ、ミガキ	ナデ、ミガキ	○	(16.2)		(3.5)	
6	3	17	RA04・覆土上位	土師器・高台付坏	III	ミガキ	ミガキ、ケズリ	ミガキ	ミガキ	○	(17.0)		(4.4)	高台部欠損
7	123	17	RA04・竈煙道部	土師器・甕	I	ナデ		ナデ			(18.4)		(3.5)	
8	6	17	RA04・床直、竈左側壁	土師器・甕	IA1	ナデ	ハケメ	ナデ	ナデ		19.8	(4.5)	22.2	木葉底→ハケメ
9	120	17	RA04・竈右側壁	土師器・甕	IA3	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ					
10	8	17	RA04・竈煙道部	土師器・甕	IB	ナデ	ハケメ	ナデ	ナデ		(14.6)	(9.8)	(11.7)	
11	7	17	RA04・竈左側壁	土師器・甕	IA1	ナデ	ハケメ	ナデ	ハケメ		(19.4)		(19.4)	
12	9	17	RA04・竈左側壁	土師器・甕	IA1	ナデ	ハケメ	ナデ	ナデ		(17.2)		(16.0)	
13	74	17	RA04・P6覆土	土師器・甕	IA2	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ				(18.0)	
14	16	17	RA04・竈煙道	土師器・甕	I		ハケメ		ハケメ、ナデ					木葉底
15	15	17	RA04・竈右側壁	土師器・甕	I		ハケメ		ナデ			7.6	(3.6)	木葉底
16	14	18	RA04・P6覆土	土師器・甕	I		ハケメ		ハケメ、ナデ					
17	17	18	RA04・竈左側壁	土師器・甕	I		ハケメ						(4.2)	
18	4	18	RA04・竈側壁、覆土上位	土師器・甕	IA2	ナデ	ハケメ	ナデ	ナデ→ハケメ		19.4		(24.6)	
19	1	18	RA04・北西隅床面	土師器・甕	IA2	ナデ	ハケメ	ナデ	ナデ		17.9	8.0	16.6	木葉底→ナデ
20	121	18	RA04・床面	土師器・甕	IA1	ナデ	ハケメ	ナデ	ナデ		(14.1)			
21	11	18	RA04・竈左脇	土師器・甕	I	ナデ		ナデ	ナデ→ハケメ		(12.6)		3.5	
22	124	18	RA04・覆土	土師器・甕	I	ナデ		ナデ						
23	5	18	RA04・竈支脚？	土師器・甕	IC	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ		12.9		(10.4)	
24	21	18	RA25・覆土上位	土師器・坏	IB1	ミガキ	ミガキ、ハケメ	ミガキ	ミガキ	○	(12.0)	(5.9)	3.2	
25	24	18	RA25・竈南脇床面	土師器・坏	IA2	ミガキ	ミガキ	ミガキ	ミガキ	○	14.0		4.4	
26	20	18	RA25・竈左脇床面	土師器・坏	IB1	ナデ	ナデ?	ミガキ	ミガキ	○	(16.3)		4.7	
27	18	19	RA25・竈右側壁	土師器・甕	IB	ナデ	ハケメ	ナデ→ハケメ	ナデ		20.0	(11.3)	20.7	木葉底(重複)
28	26	19	RA25・覆土上～中位	土師器・甕	IA1	ナデ	ハケメ	ナデ	ハケメ→ナデ		(21.1)	9.2	29.4	木葉底
29	19	19	RA25・竈左側壁、覆土上～中位	土師器・甕	IA1	ナデ	ハケメ、ナデ	ナデ	ナデ		19.2	8.9	22.6	木葉底
30	127	19	RA25・覆土	土師器・甕	I	ナデ		ナデ			(20.7)		(2.9)	
31	23	19	RA25・覆土(南西)	土師器・甕	I	ナデ		ナデ			(19.0)		(4.4)	異遺構間で接合
	150	19	RE09・覆土下位											
32	77	20	RA25・北西覆土下位	土師器・甕	IA2	ナデ	ナデ	ナデ	ハケメ		(16.2)		(7.4)	

掲載番号	登録番号	写真図版	出土地点・層位	器種	分類	外面調整		内面調整		黒色処理	計測値：cm			備考
						口縁部	体部	口縁部	体部		口径	底径	器高	
33	25	20	R A 25・覆土	土師器・甕	I	−	ハケメ		ハケメ			(7.0)	(3.9)	木葉底
34	128	20	R A 25・覆土	土師器・甕	I	ナデ		ナデ						
35	126	20	R A 25・覆土	土師器・甕	I	ナデ		ナデ						
36	22	20	R A 25・床面(南東隅)	土師器・甕	I		ハケメ		ナデ			10.8	(14.3)	木葉底
37	30	20	R A 26・竈左側壁	土師器・坏	I B 1	ミガキ	ケズリ	ミガキ	ミガキ、ケズリ	○	11.5	4.8	5.2	底外面に線刻「×」
38	28	20	R A 26・P 14覆土	土師器・甕	I B 2	ミガキ	ミガキ	ミガキ	ミガキ	○	(24.0)	(11.3)	8.4	
39	29	20	R A 26・覆土下位(北東)	土師器・坏	I	ミガキ?	ミガキ?	ミガキ?	ミガキ?	△	16.8		4.2	
40	42	20	R A 26・覆土上～中位	土師器・坏	I		ケズリ?		ミガキ	○		(6.0)	(0.9)	内面中央凹む
41	137	20	R A 26・覆土上～中位	土師器・坏	I A 1	ミガキ	ミガキ		ミガキ	○	(15.0)		(5.5)	
42	78	20	R A 26・竈左側壁	土師器・甕	I A 1	ナデ	ハケメ	ナデ	ナデ		(13.4)		(5.5)	
43	131	20	R A 26・竈右脇床面	土師器・甕	I A 1	ナデ	ハケメ	ナデ	ハケメ		(20.8)		(9.3)	
44	33	20	R A 26・竈左側壁	土師器・甕	I C	ナデ	ナデ	ナデ	ハケメ、ナデ		14.9	7.4	10.9	木葉底
45	36	20	R A 26・竈左側壁	土師器・甕	I		ナデ		ハケメ			6.3	(7.0)	木葉底
46	32	21	R A 26・覆土下位、床直	土師器・甕	I A 2	ナデ、ハケメ	ハケメ	ナデ	ナデ→ハケメ?		(23.2)		(16.0)	
47	130	21	R A 26・竈右側壁	土師器・甕	I		ハケメ		ハケメ				(7.5)	
48	41	21	R A 26・竈周辺床直	土師器・甕	I		ナデ		ナデ			(6.8)	(1.5)	木葉底
49	132	21	R A 26・P 14覆土下位～底面	土師器・甕	I	ナデ・ハケメ	ナデ	ナデ・ハケメ						
50	37	21	R A 26・覆土下位～床面	土師器・甕	I B	ナデ	ナデ→ケズリ	ナデ	ナデ		(21.6)		(10.0)	
51	31	21	R A 26・覆土上～中位	土師器・甕	I A 1	ナデ、ハケメ	ハケメ	ナデ	ハケメ		(15.4)	(7.5)	(15.8)	
52	136	21	R A 26・覆土下位	土師器・甕	I A 1	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ		(16.0)		(7.0)	
53	34	21	R A 26・覆土上～中位	土師器・甕	I B	ナデ	ナデ・ハケメ	ナデ→ミガキ	ナデ→一部ハケメ		(23.6)		(22.0)	
54	27	21	R A 26・覆土上～中位	土師器・甕	I A 2	ナデ	ハケメ	ナデ	ハケメ		14.7	6.3	15.8	
55	133	22	R A 26・覆土上～中位	土師器・甕	I	ナデ		ナデ、ハケメ						
56	134	22	R A 26・覆土下位	土師器・甕	I	ナデ	ナデ	ナデ						
57	38	22	R A 26・覆土下位	土師器・甕	I		ハケメ		ハケメ					木葉底
58	40	22	R A 26・覆土上～中位	土師器・甕	I		ナデ		ナデ			(7.1)	(2.2)	木葉底
59	43	22	R A 26・覆土上～中位	土師器・甕	I		ハケメ		ナデ			(8.4)	(1.8)	木葉底
60	35	22	R A 26・覆土上～中位	土師器・甕	I		ナデ		ナデ				(4.5)	
61	135	22	R A 26・覆土上～中位	土師器・甕	I	ナデ	ハケメ	ナデ	ハケメ					
62	39	22	R A 26・覆土上～中位	土師器・坏	I		ハケメ		ハケメ	○	(9.0)	(7.2)	(2.2)	木葉底
64	144	22	R A 27・床直	土師器・坏	I A 2	ナデ	ハケメ→ミガキ	ミガキ	ミガキ	○	(23.8)		(7.6)	
65	142	22	R A 27・竈煙出部覆土	土師器・甕	I	ナデ		ナデ			(16.8)		(5.3)	口縁に段、受け口状。
66	45	22	R A 26・覆土上～中位	土師器・甕	I A 2	ナデ	ハケメ	ナデ	ハケメ			(8.4)	(1.8)	木葉底
67	44	22	R A 27・床直、覆土中位	土師器・甕	I A 2	ナデ	ハケメ	ナデ	ハケメ		17.5	7.8	30.8	
68	46	23	R A 27・竈周辺	土師器・甕	I		ハケメ		ハケメ				(9.9)	
69	47	23	R A 27・覆土	土師器・甕	I		ナデ		ナデ			(8.2)	(2.6)	木葉底

掲載番号	登録番号	写真図版	出土地点・層位	器種	分類	外面調整		内面調整		黒色処理	計測値：cm			備考
						口縁部	体部	口縁部	体部		口径	底径	器高	
70	48	23	RA27・覆土	土師器・甕	I		ハケメ		ケズリ			(8.6)	(1.6)	木葉底
71	139	23	RA27・覆土中位(東半)	土師器・甕	I	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ		(17.4)		(6.2)	
72	138	23	RA27・覆土中位(東半)	土師器・甕	I	ナデ		ナデ、ハケメ			(19.2)		(4.3)	
73	141	23	RA27・覆土	土師器・甕	I	ナデ		ナデ			(17.0)		(3.5)	
74	143	23	RA27・覆土中位(東半)	土師器・甕	I	ナデ		ナデ			(13.4)		(3.5)	
75	140	23	RA27・覆土中位(東半)	土師器・甕	I	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ		(16.2)			
76	49	23	RD67・覆土中位	土師器・坏	IB1	ミガキ	ナデ、ハケメ	ミガキ	ミガキ	○	14.2		3.9	
77	50	23	RD67・覆土中位	土師器・坏	IB2	ミガキ	ミガキ、ケズリ	ミガキ	ミガキ	○	10.9	(4.8)	3.7	
78	51	23	RD67・覆土上位	土師器・坏	IA1	ミガキ	ミガキ、ハケメ?	ミガキ	ミガキ	◎	12.1		4.4	
79	52	23	RD67・覆土中位	土師器・坏	IB1	ミガキ	ミガキ	ミガキ	ミガキ	○			(3.5)	
80	53	23	RD67・覆土上位	土師器・甕	IA2	ミガキ	ミガキ	ミガキ	ミガキ	◎	9.8		4.1	
81	55	23	RD67・覆土	土師器・坏	IB1	ナデ	ミガキ・ハケメ	ミガキ	ミガキ	○	(12.2)	(8.0)	(3.7)	上げ底風
82	54	23	RD67・覆土	土師器・坏	IB1	ミガキ	ミガキ	ミガキ	ミガキ	◎	15.5	6.7	4.3	
83	145	23	RD67・覆土下位	土師器・甕	IA1	ナデ	ハケメ	ナデ	ナデ→一部ハケメ		(18.2)		(7.6)	
84	75	23	RD67・覆土中位、7Pグリッド・II層	土師器・甕	I		ハケメ		ナデ→一部ハケメ		(18.7)	9.1	(20.4)	木葉底。連構内外で接合
85	56	24	RD67・覆土	土師器・甕	I	ナデ	ハケメ	ナデ	ナデ				(18.0)	
86	76	24	RD67・底面、覆土下位	土師器・甕	I		ハケメ		ナデ			7.8	(14.8)	木葉底
87	146	24	RD67・覆土上位	土師器・甕	I	ナデ	ハケメ	ナデ	ナデ					
88	147	24	RD67・覆土上位	土師器・甕	I	ナデ		ナデ						
89	149	24	RD67・覆土上位	土師器・坏	I	ミガキ	ナデ	ミガキ	ミガキ	◎	(28.0)			
90	148	24	RD67・覆土上位	土師器・甕	I	ナデ		ナデ						
93	57	24	RD68・底面	土師器・甕	I	ナデ	ハケメ・ミガキ	ナデ	ナデ、ハケメ			(8.6)	(27.5)	木葉底
94	154	24	RG7・覆土	土師器・甕	I	ナデ	ナデ	ナデ	ナデ、ハケメ					
95	101	24	RG83・南西部覆土	須恵器・甕			タタキメ		ケズリ					
97	151	24	RG84・覆土	土師器・坏	I	ナデ	ミガキ	ミガキ	ミガキ	×?				
98	58	25	RG85・底面	土師器・坏	IIA	ロクロ痕	ロクロ痕	ミガキ	ミガキ	○	(14.3)	(7.1)	4.5	回転糸切痕
99	59	25	RG85・底面	土師器・坏	IIA		ロクロ痕		ロクロ痕		(8.6)	4.4	(1.5)	回転糸切痕
100	60	25	RG85・底面	土師器・坏	IIA		ロクロ痕		ミガキ	○	(8.4)	5.0	(1.4)	回転糸切→底部再調整
101	102	25	RG?・覆土	須恵器・甕			タタキメ		ケズリ					
105	65	25	グリッド・層位不明	土師器・坏	IIA		不明(摩滅)		ミガキ?	○				回転糸切痕
106	61	25	6Pグリッド・II層	あかやき・坏	IIB		ロクロ痕		ロクロ痕	×		6.1	(2.8)	回転糸切痕
107	70	25	グリッド・層位不明	土師器・坏	I	ナデ	ケズリ→ハケメ		ミガキ	○	(11.0)		(2.6)	
108	64	25	グリッド・層位不明	土師器・坏	IIA		不明(摩滅)		ミガキ?	○				回転糸切痕
109	66	25	グリッド・層位不明	あかやき・坏	IIB		不明(摩滅)		不明(摩滅)	×				回転糸切痕、摩滅

掲載番号	登録番号	写真図版	出土地点・層位	器種	分類	外面調整		内面調整		黒色処理	計測値：cm			備考
						口縁部	体部	口縁部	体部		口径	底径	器高	
110	79	25	グリッド不明・Ⅱ層？	土師器・甕	ⅠB	ナデ	ハケメ→ミガキ	ナデ	ハケメ?→ナデ		(15.0)	(9.7)	21.8	木葉底
111	62	26	7Pグリッド・Ⅱ層	土師器・甕	Ⅰ		ナデ		ハケメ			8.7	(7.8)	木葉底
112	67	26	7Pグリッド・Ⅱ層	土師器・甕	Ⅰ		不明		ハケメ			(11.6)	(2.0)	木葉底
113	72	26	グリッド・層位不明	土師器・甕？	Ⅰ		ナデ?		ハケメ?			(9.5)	(1.2)	
114	73	26	グリッド・層位不明	土師器・甕？	Ⅱ		ロクロ痕?		ロクロ痕?			(7.4)	(1.0)	回転糸切痕。小形甕あるいは坏か？
115	69	26	グリッド不明・Ⅱ層	土師器・甕	Ⅰ		不明		不明(剥落)			(10.0)	(1.6)	木葉底
116	105	26	7Pグリッド・Ⅱ層	須恵器・壺			ロクロ痕		ロクロ痕			(7.2)	(3.0)	
117	106	26	7Oグリッド・Ⅱ層	須恵器・壺			ヘラケズリ		ロクロ痕			(7.9)	(4.0)	
118	103	26	7Pグリッド・Ⅱ層	須恵器・甕			タタキメ		当て具痕					平行当て具。
119	109	26	グリッド不明・Ⅱ層？	須恵器・甕			タタキメ		当て具痕					平行当て具。
120	111	26	グリッド・層位不明	須恵器・甕		ロクロ痕		ロクロ痕						
121	107	26	グリッド不明・Ⅱ層？	須恵器・甕？			タタキメ		当て具痕					平行当て具。
122	112	26	グリッド・層位不明	須恵器・壺？			ロクロ痕		ロクロ痕					

縄文土器

掲載番号	登録番号	写真図版	出土地点・層位	器種	文様・原体	備考
102	152	25	7Pグリッド・Ⅱ層	縄文土器・粗製深鉢(胴部)	斜縄文・LR	晩期?

土製品

掲載番号	登録番号	写真図版	出土地点・層位	器種	計測値：cm			重量：g	備考
					長さ	幅	厚さ		
91	201	24	RD67・覆土上位	勾玉	3.6	1.7	1.1	6.89	貫通孔1
92	202	24	RD67・覆土上位	紡錘車	4.4	(2.3)	2.3	26.09	約1／2欠損

石　器

掲載番号	登録番号	写真図版	出土地点・層位	器種	計測値：cm			重量：g	石材	備考
					長さ	幅	厚さ			
63	203	22	RA26・覆土上～中位	不定形石器	3.4	5.5	1.0	27.55	頁岩(北上山地)	
96	204	24	RG83・底面	剥片	1.7	1.8	0.4	1.31	黒曜石(産地不明)	
103	205	25	6Pグリッド・Ⅱ層	残核	13.6	5.0	3.4	257.73	頁岩(北上山地)	
104	206	25	7Pグリッド・Ⅱ層	磨石	16.8	10.1	3.3	889.25	砂岩(北上山地)	

V．まとめと考察

1．遺物

(1)土器

縄文土器と古代の土器がある。出土総量は、遺構内外を合わせて 39.2kg である。

a．縄文土器

調査区中央付近西側の７Ｏ24ｖ～７Ｏ25ｗグリッド付近で約 0.3kg分が出土した。粗製深鉢の胴部破片であり、時期の詳細は不明である。北側に隣接する本宮熊堂Ａ遺跡との関連性から、当資料も晩期に属するものではないかと推測されるが確証を欠く。

b．古代の土器

今次調査における出土土器は、土師器(坏・高台付坏・甕)、あかやき土器[1]（坏)、須恵器(甕・壺)である[2]。土師器の甕・坏が主体を占めており、他の器種は少量しか出土していない。図化した個体数は、土師器：坏 30 点・高台付坏 1 点・甕 74 点、あかやき土器：坏 2 点、須恵器：甕 5 点・壺 1 点である。須恵器は出土量僅少かつ小破片であり、ＲＧ78・83 覆土(95・101)、遺構外(118～122)での出土が認められたに過ぎず、住居跡からは出土していない。出土状況について。多くの資料が竪穴住居のカマド付近からの出土であり、当該遺構の居住者の使用した土器の様相をある程度反映した可能性が高いものと思われる。逆に、遺構外出土の資料は寡少である。

本項では、出土量の比較的多い土師器(あかやき土器を含む)の坏(高杯を含む)・甕(鉢を含む)について分類する[3]。図化した坏・甕のうち器形が類推できるものについて、ロクロ成形の有無により大別した。さらに器形の特徴および黒色処理の有無により細分して、第 31～33 図に示した(以下、ゴシック体の遺物番号は第 31～33 図における番号を示す)。

＜坏＞

Ⅰ類　ロクロ成形されていないもの

器形を指標として、次の 4 つに分類した。すべて内面黒色処理を施されている。

ＩＡ１類：底部形状が丸底(または平底風丸底)で体部内外面に段(または沈線)が巡るもの〔第 31 図 1 ～ 6〕

ＩＡ２類：底部形状が丸底(または平底風丸底)で体部外面に段をもたないもの〔第 31 図 7 ～10〕

ＩＢ１類：底部形状が平底で体部外面に段(または沈線)が巡るもの〔第 31 図 11～18〕

ＩＢ２類：底部形状が平底で体部外面に段をもたないもの〔第 31 図 19・20〕

Ⅱ類　ロクロ成形されたもの

内面黒色処理の有無により、次の 2 つに分類した。切り離し技法は、回転糸切り無調整である。

ⅡＡ類　：内面黒色処理を施されたもの〔第 31 図 22〕

ⅡＢ類　：内面黒色処理を施されないもの〔→あかやきの坏；第 31 図 23〕

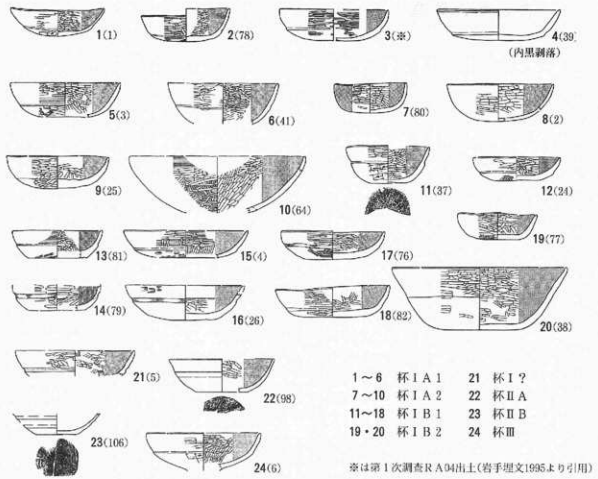
Ⅲ類　高台のついたもの(高台付坏)〔第 31 図 24〕

24 のみであるが、高台部分が欠失しており詳細不明である。

＜甕＞

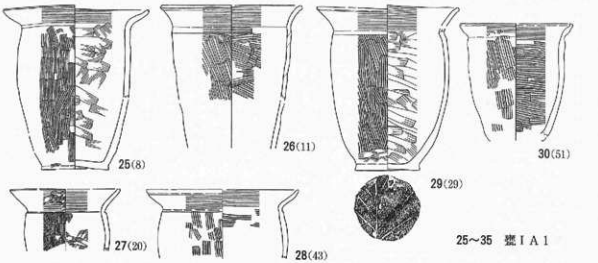
Ⅰ群　ロクロ成形されていないもの

器形により、次の 4 つに分類した。



1～6　杯ＩＡ１　　21　杯Ｉ？
7～10　杯ＩＡ２　　22　杯ⅡＡ
11～18　杯ＩＢ１　　23　杯ⅡＢ
19・20　杯ＩＢ２　　24　杯Ⅲ

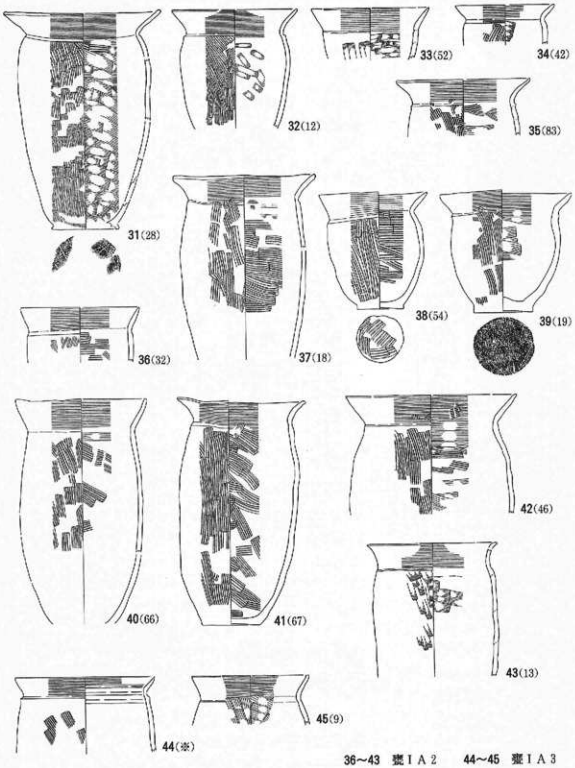
※は第１次調査ＲＡ04出土(岩手埋文1995より引用)



25～35　甕ＩＡ１

( ) 内は掲載番号

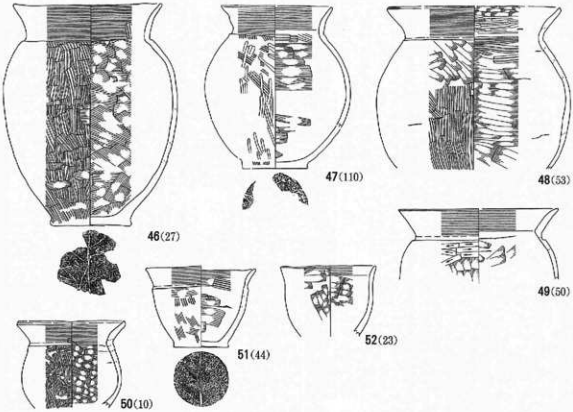
第31図　土器分類図(1)



36～43　甕ＩＡ２　　44～45　甕ＩＡ３

※は第１次調査ＲＡ04出土（岩手埋文1995より引用）

第32図　土器分類図(2)



46～50　甕ＩＢ　　51・52　甕ＩＣ

第33図　土器分類図(3)

ＩＡ１類：長胴形で、最大径が口縁部にあるもの(長胴甕１)〔第31図**25～35**〕

ＩＡ２類：長胴形で、口縁部径と体部径がほぼ同じもの(長胴甕２)〔第32図**36～43**〕

ＩＡ３類：長胴形で、最大径が体部中央付近にあるもの(長胴甕３)〔第32図**44・45**〕

ＩＢ類　：球胴形で、最大径が体部中央にあるもの(球胴甕)〔第33図**46～50**〕

ＩＣ類　：器高が低く小形のもの(鉢ないしは小形甕)〔第33図**51・52**〕

Ⅱ群　ロクロ成形されたもの

今次調査では出土していない。

土器のセット関係　本遺跡出土のＩ群土器の組成について触れておく。住居跡出土資料が散的に纏まっており傾向が把握できると思われるため、前項の分類資料のうち、ＲＡ04・25～27出土資料、および以前の調査においてＩ類土器を出土しているＲＡ03・013の資料を分類別に第34～36図に示した。作図した資料の多くは、カマドの構築材あるいはカマド周辺(火床部・周辺床面)から出土しているものが主であり、遺構の構築・使用時期に近いものである可能性が高いと考えられる。

本遺跡におけるＩ群土器の組成は、坏Ａ１類(丸底有段)・Ｂ１類(平底有段)と長胴甕Ａ１類・Ａ２類が主体となっており、少量の球胴形甕(甕Ｂ類)が伴うことがわかる[1]。すなわち、坏については「丸底→平底」

という変化を遂げつつも体部に段を有する資料が、甕においては口縁部〜体部上半に最大径を有する資料が、それぞれ主体を占めている。

第3表　住居跡別土師器出土数

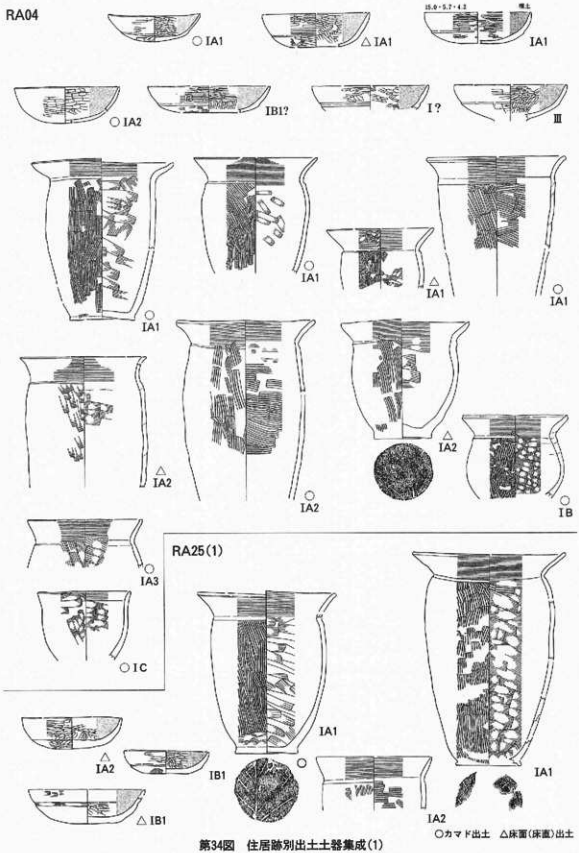
遺構名	坏							甕					備　考
	IA 1	IA 2	IB 1	IB 2	IIA	IIB	III	IA 1	IA 2	IA 3	IB	IC	
RA04竪穴住居跡	3	1	(1)				1	4	3	1	1	1	
RA25竪穴住居跡		1	2					2	1		1		
RA26竪穴住居跡	2		1	1				4	2		2	1	
RA27竪穴住居跡		1							2				
RA03竪穴住居跡										1			甑(無底式)を伴う
RA13竪穴住居跡											1	1	覆土でロクロ甕出土

土器の年代　前項では非ロクロ成形の土師器をⅠ群土器として一括した。これらの資料は、従来の編年観によれば、概ね奈良時代に属すると見られる土器群である。岩手県内の該期の土師器には固有の型式名が付されておらず、東北地方南部の編年に対比される場合が多く、本県の該期土師器は国分寺下層式併行とされている。県内の該期土師器については、相原康二氏(相原 1981・1996)、遠藤勝博・相原康二氏(遠藤・相原 1983)、高橋信雄氏(高橋 1982)、八木光則氏(八木 1993・1998)の業績がある。

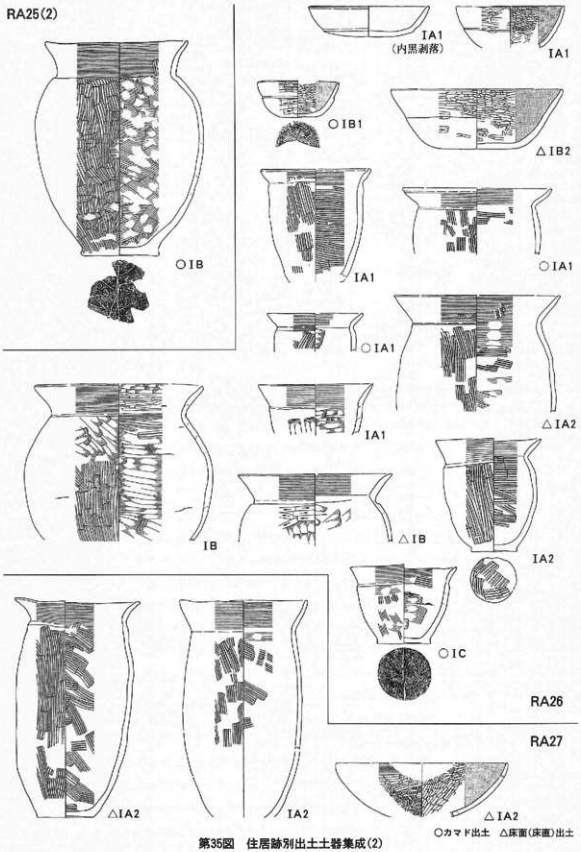
相原氏は、岩手県南部における該期土器をⅦ－a群(8世紀前半)とⅦ－b群(8世紀後半)に分類している。両者を分離する指標として、①坏の小型化(口径 10〜15㎝前後の坏が増加傾向)・平底化(平底風丸底の増加→完全に平底化)・無段化(外面の段が形式化→無段化)、②球胴甕への赤色線描(絶対量は少数)、③須恵器の共伴(主に大甕)で、後半期にはこれらの傾向が顕著になると指摘されている(相原 1996)。一方、高橋氏は古代の土器変遷を四期に大別し、該期土器は第Ⅱ期に位置付けられている。氏はさらにこれをⅡ－1群(7世紀後半〜8世紀初め)とⅡ－2群(8世紀中〜後半)とに細分し(高橋 1982)、Ⅱ-1群を栗囲式相当、Ⅱ-2群を国分寺下層式相当に位置付けている。また、八木氏の土師器編年によれば、古代斯波郡(盛岡周辺)の8世紀前半代をC類、8世紀後半代をD類としている(八木 1993)。C類とD類の差異については、次の点が指摘されている。坏：①体部外面における段・沈線の消滅傾向(有段〜沈線→沈線〜無段)、②底部形態(丸底主体→平底主体)。甕：①口唇部形態(平坦〜丸み→丸み)、②口縁部の外反の度合い(弱→強)、③底部外面張り出しの消滅、④器面調整における外面ハケメの増加。

ここで先学諸氏の編年観に拠りつつ、本遺跡Ⅰ群土器の様相を検討してみる。本遺跡の主体は前述した坏A1・B1類と長胴甕A1・A2類である。坏A1・B1類には底部形態に差異はあるが、坏A1類の資料には純然たる丸底といえるものはなくいずれも平底風丸底である。全体としてみれば、坏は平底への移行段階にあるものである。大形のものは少なく(第31図10・20)、小形のものが主体である。また、坏A1・B1類は体部有段であるが、「段」というよりは「沈線」的な資料も多く(第31図14・16〜18・21)、段は消滅傾向にあるといえる。一方、長胴甕A1・A2類の体部外面はハケメ調整が多用され、口唇部は丸みを帯びる傾向が見られる。底部を欠くものが多いため、外面の張り出しの有無については定かではない。八木氏は、古代斯波郡域におけるD期(8世紀後半代)の標識資料として、盛岡市百目木遺跡No.17・65住居跡、紫波町稲村遺跡E16・B23・H10住居址の出土土器を上げている(八木 1993)。第37図に掲げたそれらの資料と本遺跡Ⅰ群土器を比較しても差異は見られず、概ね同様の傾向を示している。

以上より本遺跡Ⅰ群土器の特徴は、相原編年第7－b群、八木編年D類に概ね当てはまるものであるといえよう。すなわち、本遺跡Ⅰ群土器は国分寺下層式の新しい部分に相当し、8世紀後半代の年代観が与えら

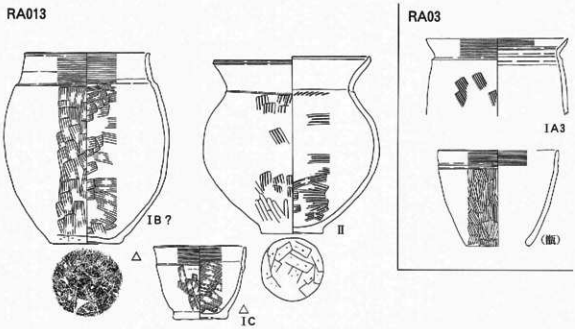


第34図　住居跡別出土土器集成(1)



○カマド出土　△床面(床直)出土

第35図　住居跡別出土土器集成(2)



○カマド出土　△床面（床直）出土

第36図　住居跡別出土土器集成(2)

れる土器群であると推測される。

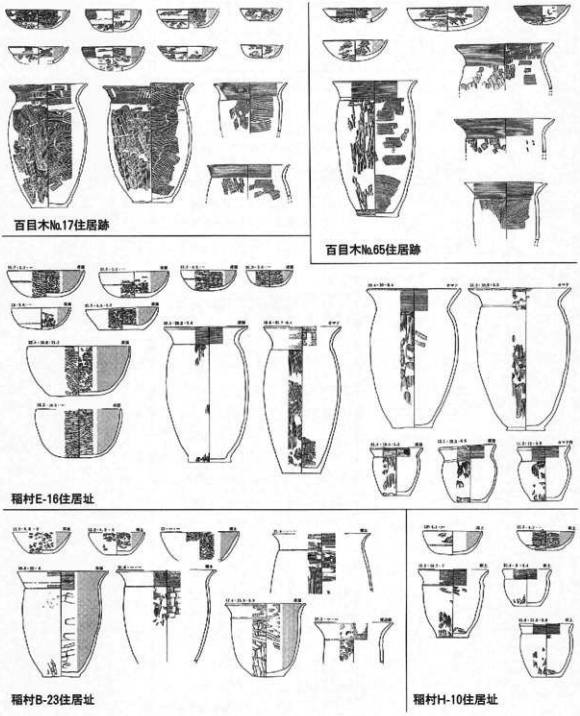
底部線刻の坏について　今次調査では、線刻を有する土師器坏１点が出土した(37)。37はＲＡ25覆土から出土した平底・体部有段（Ｉ群Ｂ１類）の坏で、底部外面に「×」形の線刻が施されている。使用されている工具は先端の細い鎧状工具ではないかと思われる。佐藤嘉広氏は、岩手県水沢市石田Ⅱ遺跡の調査報告において岩手県内の類例を集成している。それによれば、国分寺下層式併行の線刻坏の類例は水沢市石田Ⅰ・Ⅱ遺跡、盛岡市百目木遺跡において見られ、該期の県内出土土師器坏に見られる線刻は、①「×」のモチーフを基調とする、②器形は丸底・体部有段に限られる、と指摘している（岩手埋文 1988）。今次調査出土資料は、①について佐藤氏の指摘に適ったものでありが、②については今次調査資料が平底である点で異なる。佐藤氏の指摘以後、類例は増加していると思われるが、今回は時間的な制約から類例を探せなかった。いずれ、該期の線刻資料は未だ充分ではないと思われ、今後の資料増加が期待される。

（２）土製品

勾玉、紡錘車がＲＤ67の覆土から各１点出土した。勾玉(91)は完形で、表面には不明瞭ではあるがミガキ調整が施されている。土製勾玉は第１次調査においても遺構外で１点出土しており、形状・大きさも類似している。紡錘車(92)は約1／2欠損している。

（３）石器類

出土量は少なく、４点出土したのみである。遺構内では、RA26で不定形石器？１点（63）、ＲＧ78で黒曜石剥片１点（96）が、それぞれ覆土から出土している。出土遺構の年代から見れば古代ないしはそれ以降のものと考えられるが、確実ではない。また、遺構外の不定形石器（103）・敲磨器（104）の２点については、時期判断の材料がないが、その形態や調査区内で縄文土器が出土していることから見て、縄文時代に属するものとしたが、確証はない。



都南村教委1979・岩手埋文1981の挿図を引用

縮尺　約1/8

第37図　百目木・稲村遺跡出土土器

<註>

(1) いわゆる「あかやき土器」については、研究者により定義が一様ではなく、その定義内容を把握しかねたため、ここでは便宜的に岩手埋文(1988b)の分類―「内面黒色処理を伴わない酸化炎焼成の坏」と「成形にタタキを用いた酸化炎焼成の甕」のみを該器種とする―を準用した。今次調査では後者に該当する例はなく、坏のみである。

(2) 今次調査の出土土師器の主体は、相原(1981)の第Ⅶ－b群、遠藤・相原(1983)の第7－a群に該当し、国分寺下層式併行と思われる。相原(1981)では、該期の器種構成について、「甑・高坏の存在が少なくなる」としており、本遺跡の器種間のセット関係に合致する。甑は第1次調査においてRA03の覆土から出土している。今次調査では甑は出土していないが、長胴の甕としたものの中に、底部を欠損した甑が混在している可能性はある。また、今次調査で出土した須恵器は僅少であり、「須恵器が日常容器に組み込まれる段階」であるとの指摘(前掲書)は、本遺跡の様相とは必ずしも合致しない。

(3) 分類の基準については、岩手埋文(1988b・1992)等を参照した。

(4) 津野仁氏は栃木県小山市金山遺跡における出土土器の残留脂肪酸分析の結果から、土師器各器種の用途変遷を推測している(津野 1999)。すなわち、7世紀代では「主食」の煮炊き具：土師器長胴甕、「副食」の煮炊き具：土師器長胴甕・小形甕、貯蔵具：土師器長胴甕・球胴甕(漬物？)、8世紀代では「主食」の煮炊き具：土師器長胴甕、「副食」の煮炊き具：土師器長胴甕・甕・小形甕(少量)、貯蔵具：土師器甕・須恵器大甕、となるようである。本遺跡では須恵器が僅少である一方、土師器球胴甕が多く、貯蔵具に限っては7世紀代の傾向に近いものとなっている。

2．遺構

(1)竪穴住居跡

今回の調査区からは4棟が検出された。共伴する土師器の年代観から、すべて奈良時代に属するものと推定される。ここでは、今次調査で検出された住居跡の各属性を比較・検討する。なお、RA04については第1次調査報告分を併せた形で扱う。

検出状況・重複関係　4棟中、全形を調査したものは3棟(RA25～27)、一部分のみ調査したものは1棟(RA04)である。但し、RA04の今次調査区外の部分(東半部)は第1次調査で精査されており、今次調査の成果と照合することでその全容が把握されている。Ⅲ層下位～Ⅳ層上面で検出しているが、本来の構築面よりも下で検出しているものと思われる。但し、Ⅱ層面では確認できなかった。4棟の間には截り合い関係はないが、RA26とRA27は約1.5mの距離で隣接している。RA26については、主柱穴以外の柱穴状土坑が多数検出されており、床面で焼成を受けた部分が3箇所あることから、何時期かの建て替えの可能性もある。RA26・27は、遺構検出面直上が再堆積と思われる地山起源土により覆われており、調査終盤まで検出できなかった(いわゆる「黄色に黄色」的な状態)。この地山起源土は水成堆積したものともと思われるが、詳細は不明である。この再堆積土はRA04・25では見られず、比較的明瞭に(いわゆる「黄色に黒」の形で)検出されている。かかる状況から、RA04・25とRA26・27との間に時間差があるものと推測される。

平面形・規模　RA04・25・26は、隅丸方形を基調とする平面形を呈する。一方、RA27は北西壁に張出し部分があり、やや崩れた不整な隅丸方形である。これらの4棟の規模を比較すると、概ね3つに分類可能である。すなわち、小形のRA27、中形のRA04・25、大形のRA26である[(1)]。

主軸方向　いずれも概ね北西方向に主軸をとる。

覆土　RA26・27は、遺構検出面直上を再堆積と思われる地山起源の黄褐～灰黄褐色土層により被覆されており、調査終盤までプランを検出できなかった。当該層はRA04・25では見られない。また、RA26の覆土最上位には、灰白色火山灰ブロックが霧降り状に含まれていた。この灰白色パミスは、第1次調査においても竪穴住居跡の覆土上位で検出されており、鑑定の結果、東北北部における示標火山灰である十和田a

降下火山灰(Ｔｏ－ａ)に該当するものと判定されている。ＲＡ26の覆土上位のパミスも同様に十和田ａ降下火山灰であると推測できる。よって、ＲＡ26は当該パミスが降下した10世紀前半には既に埋没してごく浅い窪み状になっていたということが推測される。一方、他の竪穴住居跡の覆土では当該パミスは確認されていないことから、他の3棟は当該パミスの降下時点で既に完全に埋没しきっていたことになる。このことから、ＲＡ26は出土遺物から見て8世紀代の範疇には入るものの、他の3棟に比してより新期の住居跡と推測される。ただし、ＲＡ26が他の住居跡よりも大形であったため、埋没速度が他よりも遅かったという可能性も否定できないところである。

壁　残存する壁高は20～30cm程であり、壁はやや外傾している。ＲＡ04・26・27の壁は基本層序Ⅳ層に、ＲＡ25の壁は基本層序Ⅳ～Ⅴ層に概ね相当している。ＲＡ04・27では四方の壁が残存している。一方、ＲＡ25では東側の壁の一部が消失、ＲＡ26は複数条の溝跡に壁を截られており断続的である。本来の掘り込み(壁高)はさらに深かった可能性が高いが、Ⅱ層面では確認できなかった。

床面・掘り方　第1次調査ではＲＡ04の床面は貼床であると報告されているが、今次調査では貼床痕跡を明瞭には把握できなかった。他の3棟では、床面の掘り方は検出されていない。ＲＡ25の床面には、基本層序Ⅴ層の砂礫が露出していた。断面観察では貼床痕跡は認められなかったことから、床面に板や布の類を敷いていたものと思われる。ＲＡ26・27の床面は平坦で、基本層序Ⅳ～Ⅴ層に相当するものと思われる。

柱穴　柱穴が確認されたのは、ＲＡ04とＲＡ26の2棟である。ＲＡ04は、今次調査で柱穴2個が検出された。第1次調査で調査された東半部でも2個の柱穴が検出されている。この4個の柱穴は配置からみて妥当な位置にあり、主柱穴だったものと推定される。また、ＲＡ26では17個の柱穴が検出された。うち、北東壁のＰ1－Ｐ3－Ｐ4と南西壁際のＰ12－Ｐ14－Ｐ15が主柱穴を構成する6本柱の棟構造であったと思われる。ＲＡ26は大形に分類される住居跡であり、棟を支える主柱が6本であったとしても妥当である。一方、柱穴が検出されていない2棟のうち、ＲＡ25は中形、ＲＡ27は小形に分類される。第1次調査においても、奈良時代の小形の住居跡では柱穴が検出されない傾向にあり、ＲＡ27もその傾向に合致したものである。小形であれば、主柱を持たなくても棟を支えることが可能だったのであろう。ＲＡ25は、柱穴の検出されたＲＡ04とほぼ同規模であり、柱穴がないことは不自然に思われる。ＲＡ25の位置する付近はⅤ層(砂礫層)が比較的浅く、床面の精査の段階で既に床面に砂礫が露出している。かかる環境のため、柱穴を掘削することが困難であった可能性がある。無論、砂礫層の床面で柱穴を識別することが難しかったため、掘り落としている可能性もある。

カマド　4棟ともに1基ずつのカマドを有する。作り替え痕跡はない。各属性について比較する。

<本体>火床部および側壁部で焼成が認められる。焼成はそれほど強いものではないが、焼成範囲はやや広いようである。ＲＡ04・25・27は比較的良好に側壁が残存していた。ＲＡ04・25の側壁は地山シルトを貼り付けて成形したもので、土師器甕が芯材として倒立状態で埋めこまれている[17]。ＲＡ27には芯材は見出せなかった。一方、ＲＡ26は側壁が崩壊し、構築土が床面に崩れて堆積した状態で検出されている。残存状態が悪く、詳細は不明である。崩壊した構築土付近には土師器片が散乱していたことから、ＲＡ04・25同様に甕を芯材としていた可能性も考えられるが、確証はない。

<煙道部>半地下式がＲＡ04・25・27の3棟、地下式がＲＡ26の1棟のみである。煙道の方向は、いずれも住居本体の軸線とほぼ同方向である[18]。形態は4棟ともにほぼ共通しており、煙出部に向けて緩い勾配で徐々に下がり、煙出部は4棟ともに土坑状の掘り込みとなっている。

<設置位置>すべて北西壁のほぼ中央に設置されている。作り替え痕跡は確認されず、単時期のものである。

付属施設　ＲＡ04とＲＡ26で貯蔵穴と思われる床面のピットが検出された。

所属時期　前節で検討したとおり、竪穴住居跡から出土した土師器は国分寺下層式併行である。よって検出された竪穴住居跡はいずれも、国分寺下層式期(８世紀後半～末)に属するものであろう。但し、検出状況・覆土中の灰白色パミスの有無等から見て４棟が若干の時期差をもつ可能性については、先に触れたとおりである。

他遺跡検出住居跡との比較　本遺跡の比較的近くに所在する同時期の遺跡は、後続する平安時代のそれに比して、必ずしも多くはない。調査により該期住居跡が検出された遺跡としては、台太郎(岩手埋文 1999ｃ)、百目木(都南村教委 1979)、西鹿渡(都南村教委 1981)、志波城跡(盛岡市教委 1980・1989)などが挙げられる。

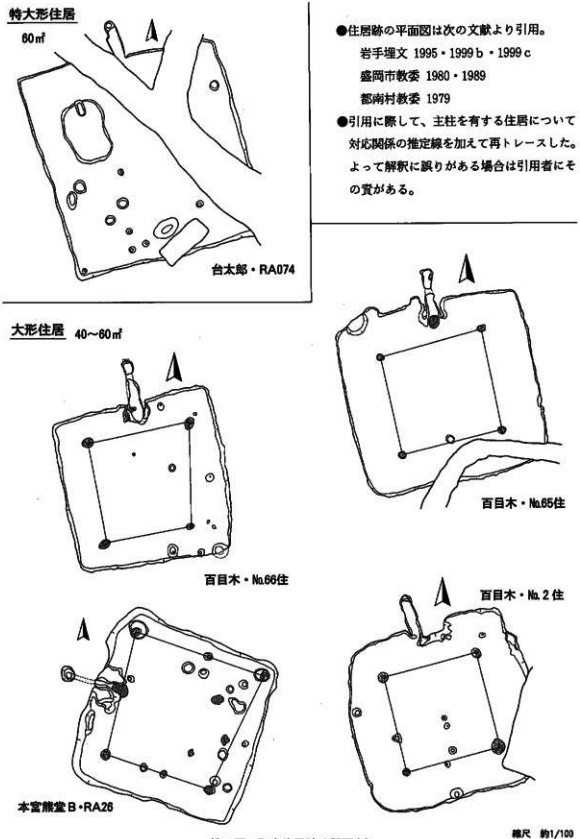
ここで、集落構成の主要素たる竪穴住居跡に限定して他遺跡例と比較 ── 具体には台太郎、百目木、志波城跡で検出された８世紀後半代の竪穴住居跡群に本遺跡検出例を含めて、その様相を比較・検証してみる。使用した資料は、台太郎第15次調査報告、志波城昭和54・63年度調査、および百目木の各調査報告から引用し、比較的残りの良いもの、様相の異なるものなど28棟を抽出して示した。

検出された住居跡を規模によって分類する[11]。分類は単純に２辺の辺長で計測することとし、任意の基準を設けた。すなわち、特大形住居(60㎡以上)、大形住居(40～60㎡)、中形住居(25～40㎡)、小形住居(10～25㎡)、特小形住居(10㎡以下)の５分類である。ただし、厳密に面積計測したものではないため、必ずしも的確な分類たりえていない可能性もある。特にも、分類境界値付近の住居跡は、相互に隣接する分類に変更されうる可能性をもっている点、含み置き頂きたい。

上記操作によって分類した住居跡群を第38～40図に示した(一部、推定を含む)。特大形住居１棟：台太郎のＲＡ074。柱穴配列は判然としない。溝・攪乱に載るれており、詳細不明である。大形住居４棟：百目木の NO.２・65・66住、本遺跡のＲＡ26。中形住居６棟：台太郎のＲＡ046・048・081、百目木の NO..20住、本遺跡のＲＡ04・25。小形住居11棟：志波城跡のＳＩ012、百目木の NO.７・17・48・49住、台太郎のＲＡ050・051・068、本遺跡のＲＡ03・013・27。特小形住居６棟：志波城跡のＳＩ011、百目木の NO.21・26・28住、台太郎のＲＡ072・078。

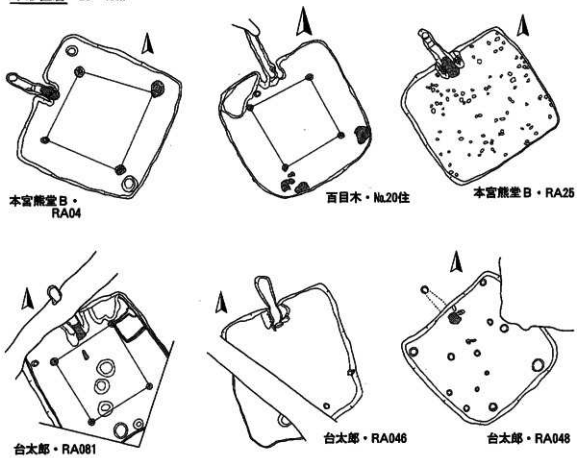
以下の点が指摘できる。①住居の主軸方向とカマド煙道の方向がほぼ一致している。カマドは北ないしは北西壁に附設されているものが大半である。住居主軸＝カマド煙道方向。特大形：北～北西１。大形：北～北西３、北西～西１。中形：北～北西３、北西２、北西～西１。小形：北～北西３、北西４、北西～西３、南東１。特小形：北２、北～北西２、北西～西１、西１。全体の傾向としては、北・西方向へのズレはあるものの、概ね北西を基軸としてカマドが構築されている様相が窺われる。なお、カマドの作り替え痕跡はいずれも認められていない。②柱穴配列は特大形では明瞭ではないが、大形～中形では明瞭な柱配列を有するものが多く見られる。台太郎・ＲＡ050を除いて、小形～特小形では柱配列が不明瞭であるか、柱穴自体が検出されていないようである。以上より、当該地域において、柱配列を有する該期住居の下限は約25㎡前後にあるものと推測される[12]。本遺跡・ＲＡ26を除いて、棟持ちの主柱は４本であったと推測される。一方、本遺跡・ＲＡ26は配列がやや歪ではあるが、主柱６本を有するものと思われる。また、柱配列は明瞭ではないものの、小形でも多数の柱穴自体は検出されている[13]。

これら規模の異なる住居跡の、遺跡＝集落内における占地の状況、組み合わせ関係(共時性)についても検証を試みた。しかし、台太郎においては、該期の竪穴住居群は散在しており、一定のまとまりが見出せなかった。一方、百目木においては、大形～特小形までの該期住居31棟が検出されている。無論、これらの住居はすべてが併存していた訳ではなく、建て替え・移動があり、各規模の住居の組合せがあるものと思われる。

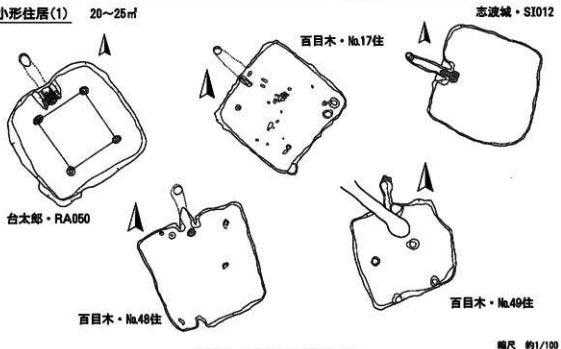


第38図 竪穴住居跡分類図(1)

中形住居　25～40㎡

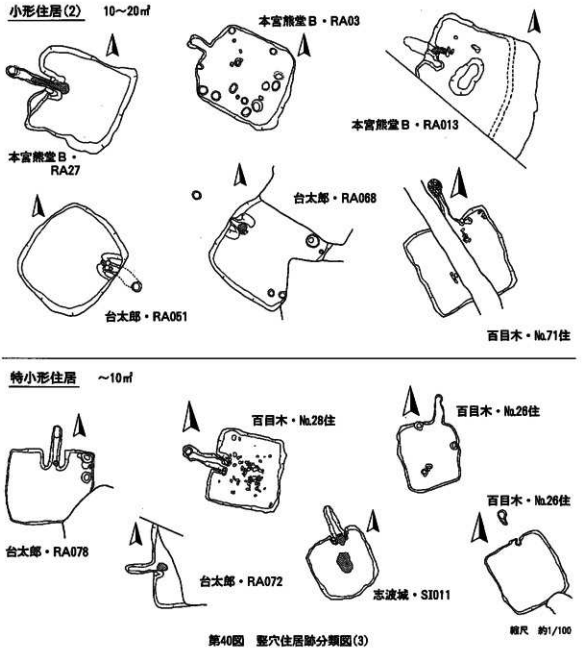


小形住居(1)　20～25㎡



縮尺　約1/100

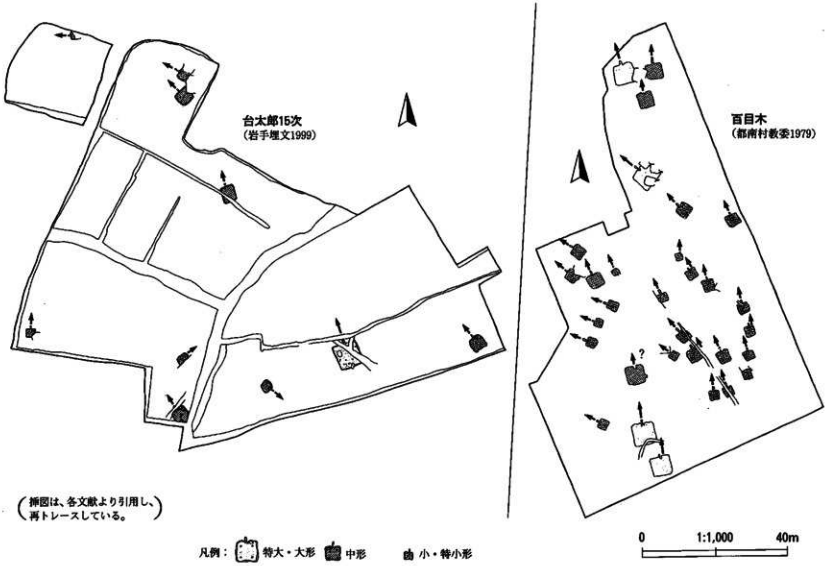
第39図　竪穴住居跡分類図(2)



第40図　竪穴住居跡分類図(3)

ここではその組合せの単位(住居小群)を把握するには至らず、詳細な検討を行い得ないが、大略、調査区中央付近に小・特小形住居が集中し、小形住居の周辺に中・大・特大形住居がそれを取り巻いているように感じられる[20]。ただし、百目木の該期集落は調査区外へも延びているものと思われ、その様相が不明な現時点では断言できないところではある。

翻って本遺跡の住居配置を見ると、大形住居跡であるＲＡ26を中心にして、中形のＲＡ04・25および小形のＲＡ03・013・27がその東側に弧状に取り巻くように配置されていることが指摘できよう(第42図)。西野修氏は「この時期〔＝７～８世紀代；筆者註〕、蝦夷の集落は三郡〔和我・稗縫・斯波郡〕とも大型・中型・小住居の組合せで構成され」、「大型住居を核として、その周囲を中型住居が１～２軒、さらに小型住



第41図　台太郎・百目木遺跡の住居配置

居が5～6軒もしくは7～8軒取り囲み、10軒前後で一つの小単位が構成される」(西野 1998)と指摘している。本遺跡の住居配置は調査部分に限ってはかかる様相に合致するが、未調査部分(とりわけ今次調査区の北・東側隣接地)の様相が不明である現時点では即断できないところではある。

(2)土坑

10基検出したが、うち2基(RD67・68)が奈良時代、その他は所属時期不明である。RD67は覆土中に比較的多量の土師器破片が包含されている。覆土の堆積状況は、詳細には分からないが数回に亙る人為的な遺物・土の廃棄行為の様相が窺われる。今次調査において出土した土製品2点 ― 勾玉・紡錘車はいずれも本土坑からのものである。特に勾玉については副葬の可能性も考慮したが、土師器片に混在する形で出土しており、特殊な出土状況は認められなかった。以上より、本土坑の本来の用途は不明であるが、最終的には遺物等の廃棄に用いられたものと推定されよう。一方、RD68は、共伴する遺物は少量であるが、その特徴から考えると、奈良時代に所属するものであろう。また、底面のごく一部が焼土化し、覆土に炭化物が混入する様相から、調査時点では何かを焼いた土坑ではないかと思われたが、明確な根拠を欠いている。

(3)住居跡状竪穴遺構

1棟を検出した。検出されたRE09はRD68と大部分が重複しており、RD68を地山シルトで被覆して構築されているものと解釈した。南側の一部が攪乱(現代の水田に伴う畦畔跡)により載られ、残存部の平面形は不整、壁の立ち上がりも不明瞭である。積極的に竪穴住居状遺構と認定することが躊躇われたが、「床面?」と思われる堅く締まった貼床面の存在と、比較的明瞭だった検出時の状況から、不明確ながらも竪穴住居跡状遺構としている。覆土からの出土遺物がRA25と接合したことから、同時期－奈良時代8世紀後半代に属するものと推定される。

(4)溝　跡

4条を検出。RG78・79は第1次調査検出のRG01・02にそれぞれ接続するものであり、同一の溝である。また、RG83は第4次(2)調査区で検出されたRG014に接続するものと思われる。第1次調査では明確ではないが、当該調査区西北端を掠める形で今次調査区へと続くものと思われる。この4条のうち、古代に属するものはRG83である。RG83は覆土上面(検出面)に微小な灰白色パミスが認められる。当該パミスは十和田a降下火山灰と推測される。また、覆土下位(底面付近)では回転糸切り痕を残すロクロ成形の坏が出土している。以上から、当溝跡は平安時代に属するものと判断できる。他の3条については平安時代以降と推測されるが時期の詳細は不明である。なお、RA04に載られているであろうRG12(奈良時代またはそれ以前の溝跡)については、調査員の不手際により掘り落とした可能性が高いものと思われる。

<註>

(1) 竪穴住居跡の規模については、八木光則氏、西野　修氏が分類・類型化を行っている。八木氏は、住居の占める面積(住居規模の縦軸長×横軸長)をもとに次のように分類している。すなわち、超大形(60㎡以上)、特大形(40～60㎡)、大形(25～40㎡)、中形(15～25㎡)、小形(15㎡以下)の5類型である。一方、西野氏は、辺長・床面積を基準として、大型住居(辺長6～7m以上・床面積40㎡以上)、中型住居(5～6m前後・25～40㎡程度)、小型(4m以下・20㎡以下)の3つに分類している。本項での分類に際しては、基準値設定等について両氏の分類を参照した。

(2) 遠藤勝博・相原康二氏の見解では「第7-a群〔8世紀中葉(筆者註)〕の竪穴住居跡に附設されるカマドの袖部に土器の埋設が行なわれ、かつカマド～煙道の軸方位が磁北から西へ大きく振れるものが一般的である。これは第7-b群期〔8世紀後半～末〕により顕著になる特徴である」と指摘されている(遠藤・相原 1983)。今次調査検出の竪穴住居跡のカマドの形態は、上の指摘に合致している。西野修氏は、7～8世紀代における竪穴住居のカマドが「多く

の場合北壁に在り、方向軸を綺麗に揃えてくる」という斉一性を「血族関係で結び付き、成立している眼夷集落の基本形」と理解している(西野 1998)。

(3) 小形住居である百目木・NO.49 住は南壁際に懸かる形で 4 個のピットが確認されているがあまりにも壁に寄り過ぎており、疑念があるためここでは保留としている。仮に、件のピットを主柱穴と解釈すれば、柱配列を有する住居の「下限」はさらに下り、規模約 20㎡前後となるものと思われる。

(4) 小形の住居跡である本遺跡ＲＡ03 では、床面でランダムな配置の柱穴複数が検出されている。柱穴自体の有無は概ね 20㎡規模を境として、それ以上の規模の住居跡に伴うようである。

(5) 筆者はこのような配置を、一種の「囲い込み」(？)ではないかと推測した。百目木遺跡における住居小群の移動の様相は明らかではないが、隣接する同規模の住居間士にその可能性を見出せるものと推測される。とすれば、小形住居は移動しながらも結果的には中～大形住居が形作る円内に止まっていると捉えられる。小笠原好彦氏は、古代集落を構成する住居小群の移動形態を検討することで、「有力世帯」と「弱小で隷属性の強い世帯」を見出すことが可能であると指摘している(小笠原 1996)。確証を欠くためあくまで仮説ではあるが、百目木の小形住居は小笠原氏のいう「隷属の世帯」にあたり、「有力世帯」(＝大形住居)に囲い込まれている(すなわち、支配－被支配の関係を具現化している)と解釈できないであろうか。

3．遺跡

最後に、第１次および第４次(2)調査区の成果を併せて、熊堂Ｂ遺跡の時期別の様相について概観する。

本遺跡は雫石川右岸の低位段丘上の微高地に立地しており、本遺跡については過去に複数次の調査が実施されている。また、今回の調査に先立って実施された盛岡市教育委員会による試掘調査を踏まえて、遺構の密度についてはある程度把握されていたが、結果的に調査当初の予想より遺構密度は疎であった。

縄文時代では、調査区北東部で陥し穴状遺構１基が検出された。明瞭な時期区分が遺わなかったが、７Ｏグリッド北西部付近で縄文時代晩期と思われる土器片が出土しており、本遺構も該期に属する可能性がある。今次調査に先立つ第１・４次調査では、同様の遺構は検出されていない。陥し穴が１基のみ単独で存在するということは考えにくく、いささか疑念はあるものの、本遺跡が縄文時代の狩場として利用されていた可能性はある。

古代については、調査区北部でのみ遺構が検出されている。調査区南半部８Ｏ～８Ｐグリッド以南では遺構は確認されておらず、今次調査区南端西側に隣接する第９次調査区(８Ｏグリッド南側中央部)でも遺構は確認されなかった。両者ともに、地山が南に向かって傾斜して落ち込む様相が確認された。第１次調査においても、８Ｎ～８Ｑグリッド以南において遺構は確認されていない。第１次調査と第９次・今次調査の結果とを照合すると矛盾は生じていない。第１・９次および今次調査の結果から、現水路付近は、元来が小河川となっていた場所であり、８Ｏ～８Ｐグリッド以南は沢に向かって落ち込む微高地の縁であるため、遺構が構築されなかったか、浸食作用により消失したものと考えられる。

第１・４・９次調査および今次調査で確認された遺構の配置からは、熊堂Ｂ遺跡の古代集落の南限が７Ｎ－７Ｏ－７Ｐ－８Ｑ北半(－８Ｒ？)を結ぶライン付近であることが予察される。

第１・４・９次調査および今次調査で検出された遺構は、概ね奈良時代と平安時代に大別される。未調査部分があるため明確には語れないが、奈良時代と平安時代では、集落の占地に若干のズレが見受けられる。

奈良時代には、竪穴住居跡６棟・住居跡状竪穴遺構１棟・土坑４基・溝１条が、６Ｐグリッド南西部～７Ｐグリッド北半部に疎らな分布を示している。ＲＤ67 付近が遺構分布の南限となっており、今次調査区北東部付近が分布の中心となっている。一方、平安時代については、今次調査区では溝跡が確認されたに過ぎず、竪穴住居跡等は検出されなかったのに対して、第１次・第４次(2)調査区では 13 棟の住居跡が密に分布

している。これらの住居跡の時期は、共伴する土師器の年代観から見て、10世紀代とされている（西野 1998）。かかる状況から、今次調査区の北・東側には、10世紀代の集落が存在しているものと推測される。

なお、今次調査区は本遺跡の括りの南東付近にあたっており、遺跡の範囲はさらに北側および北西側へと延びている。遺跡西端部の飛び地状となっている第4次(1)および第5次調査区では平安時代の集落跡が確認されている。さらに未調査となっている今次調査区北西側隣接地では盛岡市教委の試掘に際して、竪穴住居跡と思われるプランが複数検出されており、平安期の遺構の密な分布状況が確認されている。盛岡南新都市開発整備事業にともなって、本遺跡ならびに周辺遺跡の発掘調査は今後も継続されていく見込みであり、その調査成果により本遺跡の様相・位置付けについて明確になっていくものと思われる。

引用・参考文献

＜発掘調査報告書＞

岩手県教育委員会（1970）『上太田蝦夷森古墳 二報』

（1979 a）『東北縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告書Ⅰ』岩手県文化財調査報告第31集

（1979 b）『東北縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告書Ⅱ』岩手県文化財調査報告第32集

（1979 c）『東北新幹線関係埋蔵文化財調査報告書Ⅲ』岩手県文化財調査報告第35集

（1982）『東北縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告書ⅩⅢ 太田方八丁遺跡(志波城跡)』岩手県文化財調査報告書第68集

岩手県埋蔵文化財センター（1981）『稲村遺跡』『国道4号線矢巾地区改修工事関連遺跡調査報告書』岩手県埋文センター文化財調査報告第19集

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター

（1988 a）『平沢Ⅰ遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第125集

（1988 b）『石田Ⅱ・寺領・西光田Ⅰ遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第130集

（1992）『鼻館跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第171集

（1994）『矢盛遺跡第1次発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第205集

（1995）『本宮熊堂B遺跡第1次発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第226集

（1996）『小幡遺跡第2次発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第244集

（1997）『小幡遺跡第4次発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第265集

（1998 a）『小幡遺跡第5次・第7次発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第267集

（1998 b）『岩手県埋蔵文化財発掘調査略報(平成9年度)』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第282集

（1998 c）『大宮北遺跡・本宮熊堂A遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第291集

（1999 a）『熊堂B遺跡第5次・台太郎遺跡第16次発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第293集

（1999 b）『本宮熊堂B遺跡第4次・鬼柳A遺跡第4次発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第308集

（1999 c）『台太郎遺跡第15次発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第309集

（1999 d）『岩手県埋蔵文化財発掘調査略報(平成10年度)』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第311集

（2000 a）『向中野館遺跡第4次・小幡遺跡第11次・台太郎遺跡第19次発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第321集

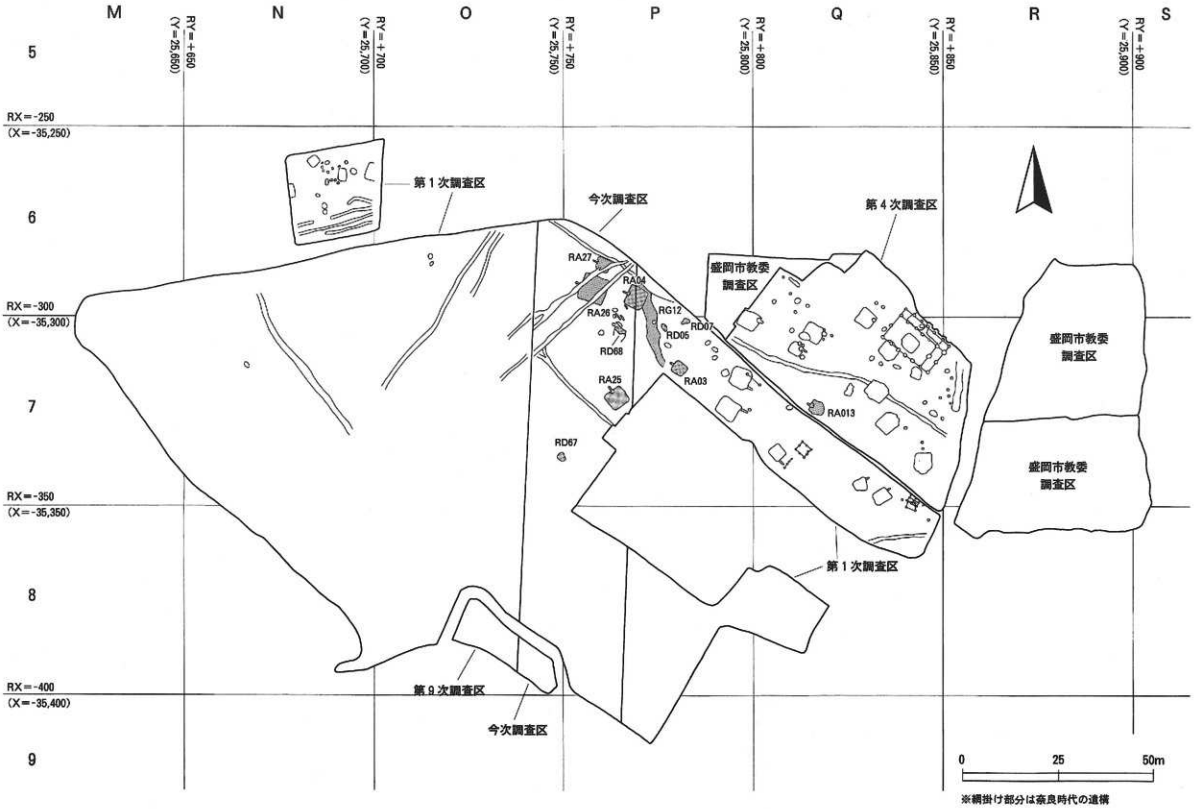
（2000 b）『向中野館遺跡第3次・小幡遺跡第10次発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第338集

（2000 c）『岩手県埋蔵文化財発掘調査略報(平成11年度)』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第340集

（2001）『岩手県埋蔵文化財発掘調査略報(平成12年度)』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第370集

都南村教育委員会（1979）『岩手県紫波郡都南村百目木遺跡―発掘調査報告書―』（岩手）

（1981）『西鹿渡遺跡発掘調査報告書』（岩手）
盛岡市教育委員会（1969）『盛岡市上太田蝦夷森古墳』（岩手）
（1980）『太田方八丁遺跡　昭和54年度発掘調査概報』（岩手）
（1981）『志波城跡Ⅰ　太田方八丁遺跡範囲確認調査報告』（岩手）
（1989）『志波城跡　昭和63年度発掘調査概報』（岩手）
（1992）『館・松ノ木遺跡　一古代の遺構編一』（岩手）
（1995）『志波城跡　平成元年度発掘調査概報』（岩手）
（1995）『上平遺跡群（猪去館・上平Ⅱ遺跡）　平成4・5年度発掘調査概報』（岩手）
矢巾町教育委員会（1986）『徳田遺跡群詳細分布調査報告書』矢巾町文化財調査報告書第8集（岩手）
（1999）『藤沢狄森古墳群』矢巾町文化財調査報告書第23集（岩手）
＜論文・資料集成等＞
相原康二（1981）「岩手県南部における古代の土器群編年試案」『東北縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告書ＸＩ』巻末資料１、岩手県教育委員会
遠藤勝博・相原康二（1983）「岩手県南部（北上川中流域）における所謂第Ｉ型式の土師器・前期土師器の内容について」『考古学論叢』芹沢長介先生還暦記念論文集刊行会（宮城）
小笠原好彦（1996）「古代の家族」『考古学による日本歴史15 家族と住まい』雄山閣出版（東京）
高橋信雄（1982）「３.古代」『岩手の土器－県内出土資料の集成－』岩手県立博物館
津野　仁（1999）「食生活史復元の一齢　一脂肪酸分析などから一」『食の復元－遺跡・遺物から何を読み取るか』研究集会報告集２、帝京大学山梨文化財研究所（山梨）
西野　修（1998）「城柵と地域社会の変容－北上盆地北部の様相」『第24回古代城柵官衙遺跡検討会資料集』（岩手）
八木光則（1992）「古代斯波郡と賀離体の土器様相」『第18回古代城柵官衙遺跡検討会発表資料』（青森）
（1998）「陸奥における土師器の地域性」『岩手考古学』第10号、岩手考古学会（岩手）
（1998）「城柵と地域社会の変容－馬淵川流域の様相」『第24回古代城柵官衙遺跡検討会資料集』（岩手）



第42図　熊堂Ｂ遺跡遺構配置全体図

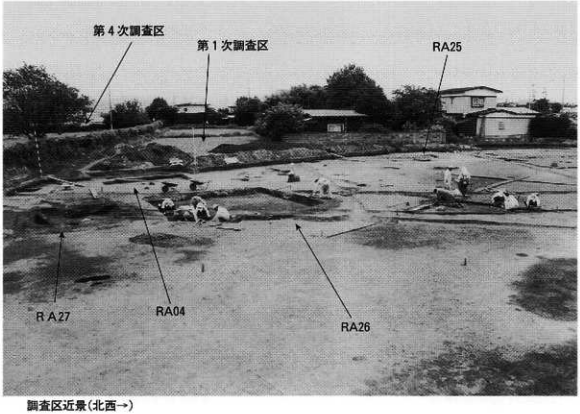
写 真 図 版

調査区近景(北西→)

遺跡現況(写真上方が北)　　※枠内が今次調査区

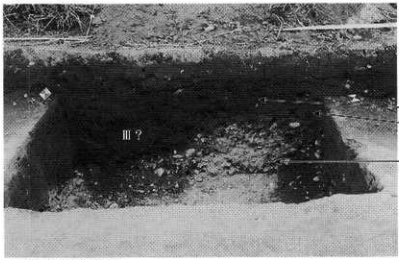
写真図版1　航空写真

調査区近景(北西→)

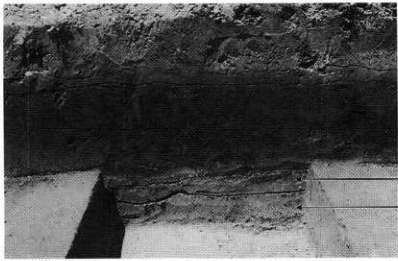


調査区近景(北西→)

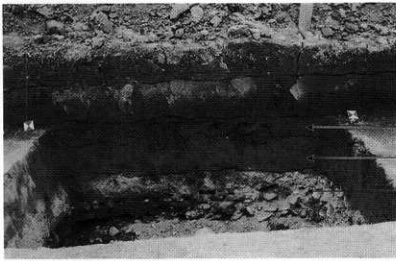
写真図版２　調査区近景



T－1（北端付近）



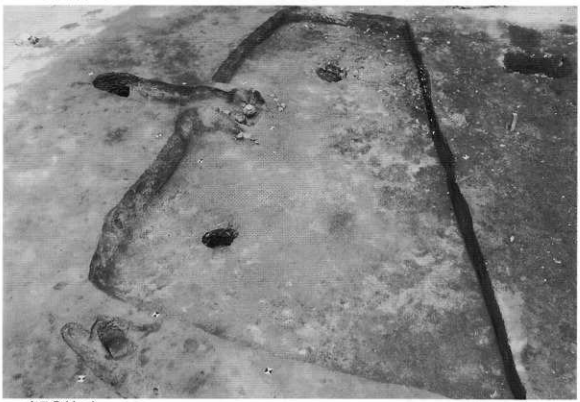
T－4（西部）



T－2（北東部）

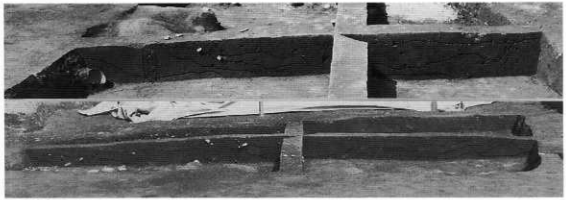
写真図版3　調査区の層序

全景①(南東→)



全景②(南→)

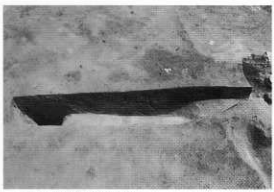
写真図版4　RA04(1)



覆土断面

カマド全景

カマド断面①(本体)



カマド断面②(煙道部)

カマド構築材断面

住居内ピット(P 6)全景

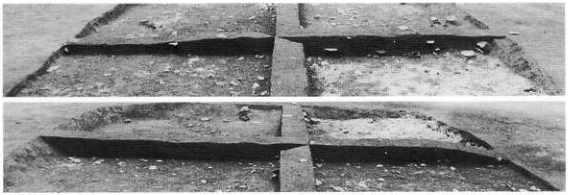
調査風景

写真図版5　R A04(2)

全景①(南東→)

全景②(南→)

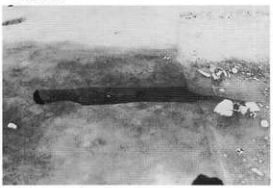
写真図版6　RA25(1)



覆土断面

検出状況

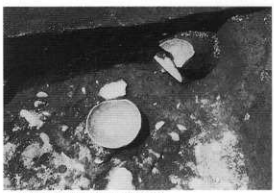
カマド全景



カマド断面①(煙道部)

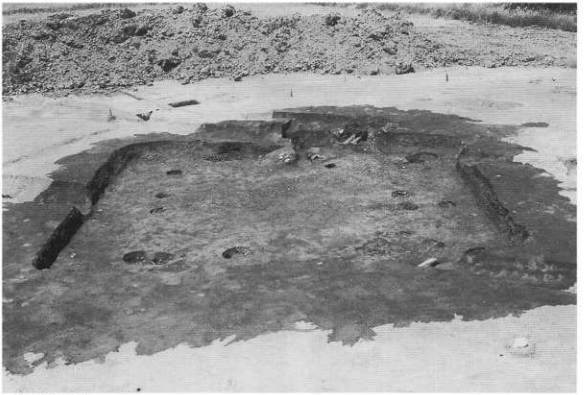
カマド断面②(本体)

カマド構築材断面



遺物出土状況(カマド付近)

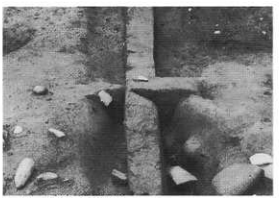
写真図版7　RA25(2)



全景(南東→)

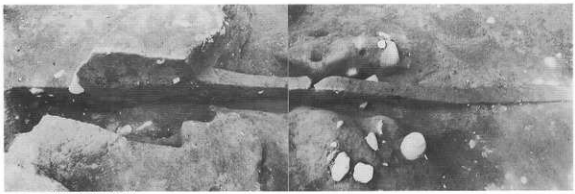
覆土断面

カマド全景



カマド断面①(本体)

写真図版8　R A26(1)



カマド断面②(煙道部)

カマド構築材断面

カマド煙出部 検出状況

カマド脇ピット全景

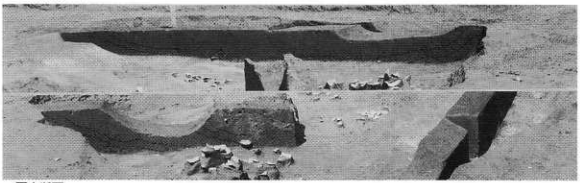
P14遺物出土状況

床面焼成部

床面炭化材 検出状況

写真図版9　RA26(2)

全景(南東→)

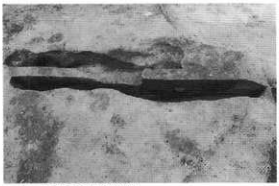


覆土断面

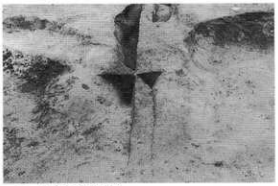
カマド全景

遺物出土状況(カマド周辺)

写真図版10　R A27(1)



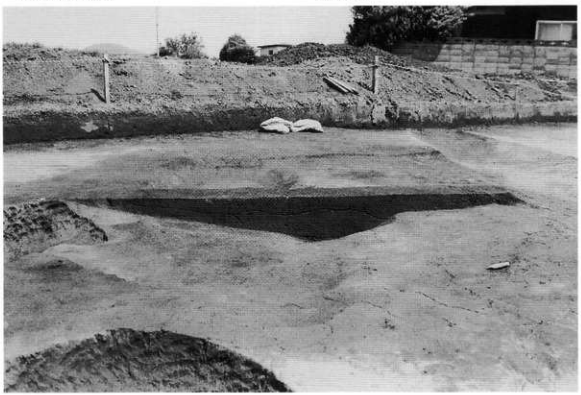
カマド断面①(煙道部)



カマド断面②(本体)

カマド構築材断面

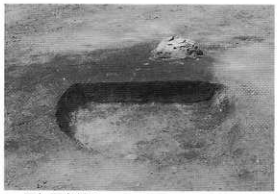
調査風景



ＲＥ09住居状遺構(北西→)

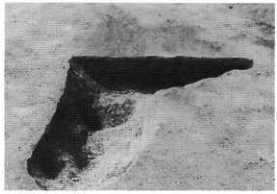
写真図版11　ＲＡ27(2)、ＲＥ09

ＲＤ60土坑 全景(西→)



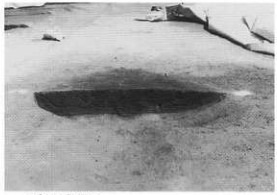
同左 覆土断面

ＲＤ62土坑、ＲＺ09溝状遺構全景(南東→)



同左 覆土断面

ＲＤ63土坑 全景(南西→)



同左 覆土断面

写真図版12　ＲＤ60・62・63、ＲＺ09

R D64土坑 全景(北西→)

同左 覆土断面

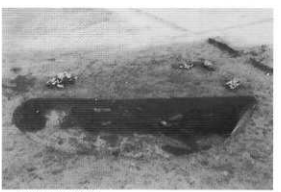
R D65土坑 全景(西→)

同左 覆土断面

R D66土坑 全景(北西→)

同左 覆土断面

R D67土坑 全景(北西→)



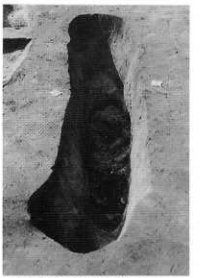
同左 覆土断面

写真図版13 R D64・65・66・67

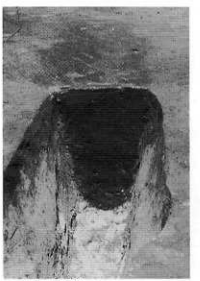
ＲＤ68土坑 全景(南東→)

同上 覆土断面

同上 遺物出土状況

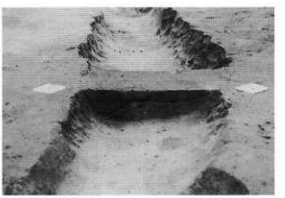


ＲＤ61土坑 全景(南東→)



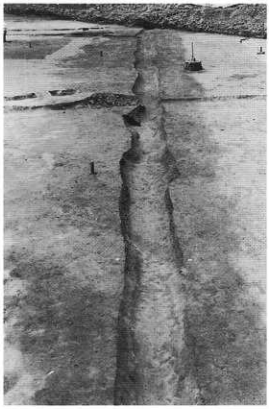
同上 覆土断面

ＲＺ10溝状遺構 全景(北東→)



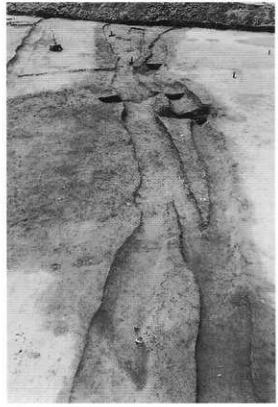
同左 覆土断面

写真図版14　ＲＤ61・68、ＲＺ10



RG78溝跡全景(北東→)、覆土断面

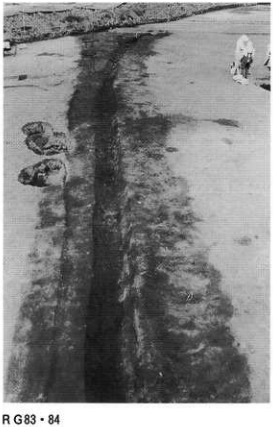
RG79溝跡全景(北東→)、覆土断面



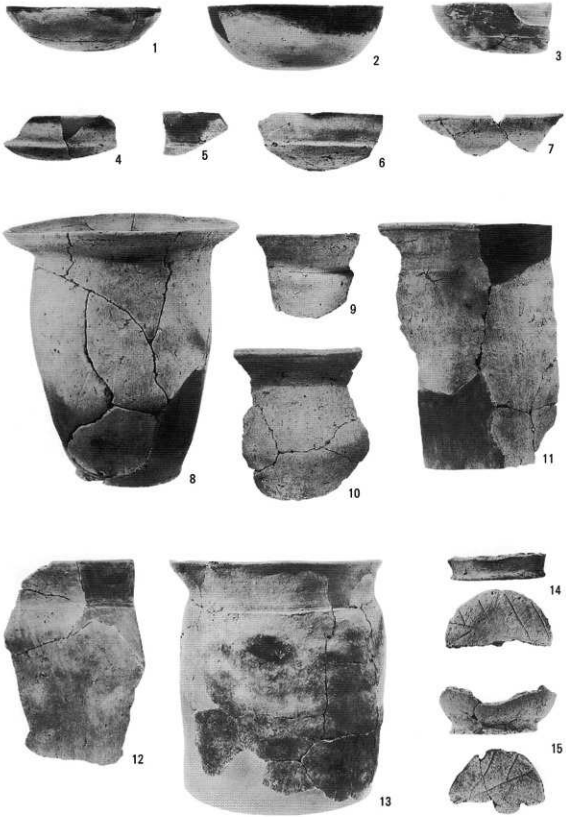
写真図版15　RG78・79

ＲＧ83溝跡全景(東→)、覆土断面

ＲＧ84溝跡全景(南東→)、覆土断面



写真図版16　ＲＧ83・84



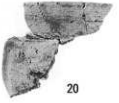
写真図版17　出土遺物(1)遺構内

16

17

18

19


20

21

22

23

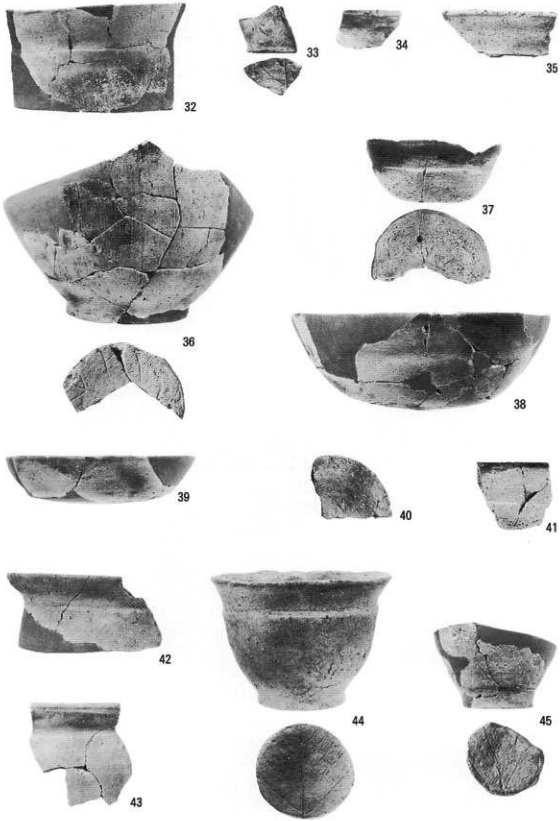
24

25

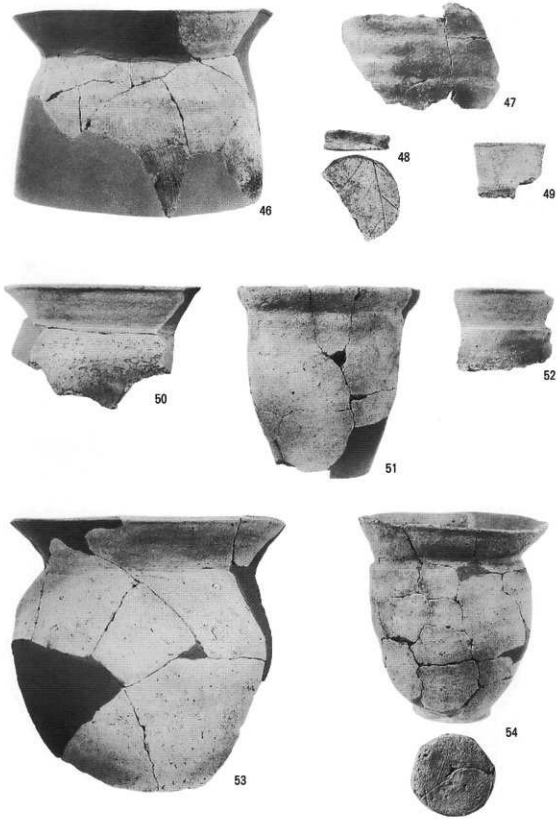
26

写真図版18　出土遺物(2)遺構内

写真図版19　出土遺物(3)遺構内

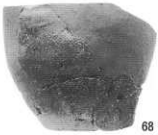


写真図版20　出土遺物(4)遺構内



写真図版21　出土遺物(5)遺構内

写真図版22　出土遺物(6)遺構内


68

69

70

71

72

73

74

75

76

77

78

79

80

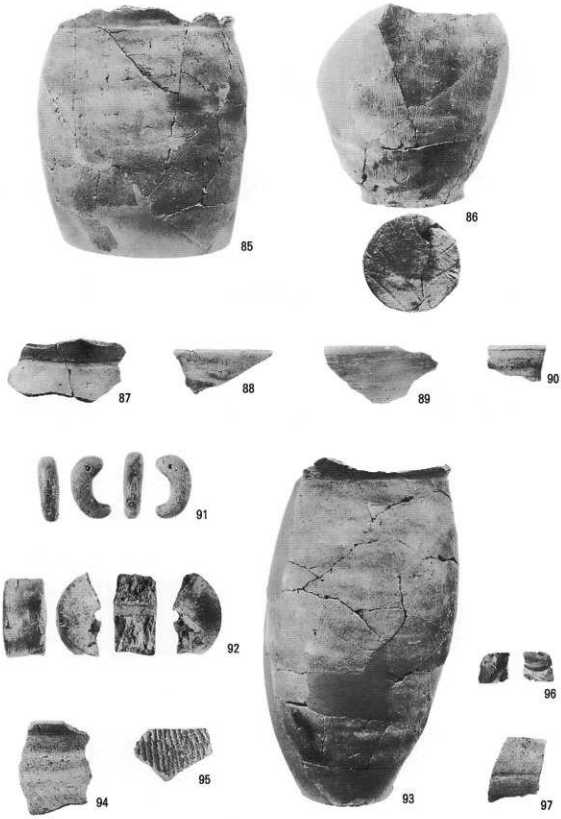
81

84

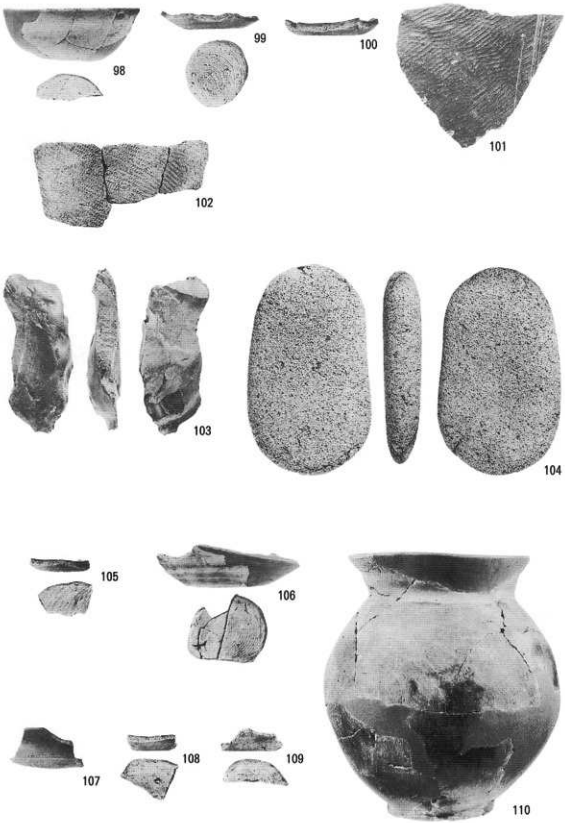
82

83

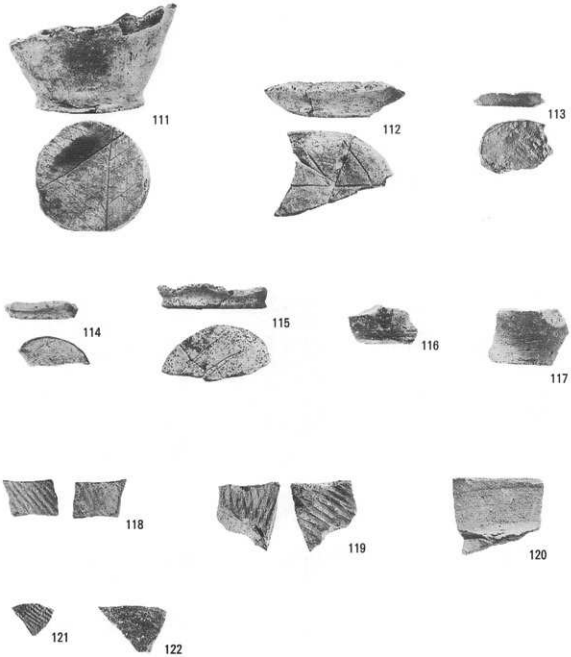
写真図版23　出土遺物(7)遺構内



写真図版24　出土遺物(8)遺構内



写真図版25　出土遺物(9)遺構内・外



写真図版26　出土遺物(10)遺構外

報告書抄録

ふりがな	くまどうびいいせきだいじゅうじはっくつちょうさほうこくしょ
書名	熊堂B遺跡第10次発掘調査報告書
副書名	盛岡南新都市開発整備事業関連遺跡発掘調査
巻次	
シリーズ名	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第377集
編著者名	千葉正彦
編集機関	財団法人 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
所在地	〒020－0853　岩手県盛岡市下飯岡11－185　　TEL019－638－9001・9002
発行年月日	平成14年2月28日

ふりがな 所収遺跡	ふりがな 住　所	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
熊堂B遺跡 くまどうびいいせき	岩手県盛岡市 本宮字稲荷1他 いわてけんもりおかし もとみやあざいなりほか	03201	LE16 －2118	39° 21′ 30″	140° 45′ 40″	20000414 ～20000616	3,235㎡	盛岡南新都市開発整備事業(区画整理)に伴う緊急発掘調査

所収遺構名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
熊堂B遺跡 第10次調査	散布地	縄文時代	陥し穴状遺構1基	縄文土器	国分寺下層式併行期の集落跡。
	集落跡	奈良時代	竪穴住居跡4棟 土坑2基	土師器 土製品	
		平安時代	溝跡1条	土師器 須恵器　あかやき土器	
		時期不明	土坑6基 溝跡3条 溝状遺構2基		

平成13年度（財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター職員名簿

所長	伊藤民也	副所長	高橋正儀
〔管理課〕			
管理課長	韮沢正吾	嘱託	高橋照雄
管理課長補佐	山崎善光		佐々木光重
〃	山岸直美	〃	加藤美代子
主査	立花多加志	〃	湯沢邦子
〔調査第一課〕		〔調査第二課〕	
調査第一課長	佐々木勝	調査第二課長	高橋與右衛門
調査第一課長補佐	佐々木清文	調査第二課長補佐	中川重紀
〃	高橋義介		
文化財専門員	小山内透	文化財専門員	金子佐知子
文化財調査員	中田迪	文化財調査員	阿部眞澄
〃	飯森秀文	〃	飯坂一重
〃	赤石登	〃	阿部徹
〃	吉田充	〃	濱田宏
〃	亀二大郎	〃	安藤由紀夫
〃	小原貸一	〃	高木晃
〃	佐々木信一	〃	佐藤淳一
〃	小笠原健一郎	〃	星雅之
〃	金野進	〃	菅原靖男
〃	小松則也	〃	半澤武彦
〃	岩渕計	〃	杉沢昭太郎
〃	鳥居達人	〃	溜治二郎
〃	金子昭彦	〃	中村直美
〃	羽柴直人	〃	西澤正晴
〃	千葉正彦	〃	八木勝枝
〃	長村克稔	〃	（阿部勝則）
〃	星幸文		
〃	佐藤あき子		
〃	菊池貴広		
〃	村上多拓		
〃	本村多一郎		
〃	村木敬		
〃	北村忠昭		
〃	高瀬克範		
〃	丸山浩治		
〃	鳥原弘征		
〃	中村絵美		
期限付調査員	小林弘卓	期限付調査員	吉川徹
〃	江藤教賢	〃	北田勲
〃	菊池信	〃	吉田里和
〃	井上信介	〃	原美津子
〃	川又晋	〃	齋藤麻紀子
〃	吉田由美	〃	駒木野智寛
〃	坂部恵造		
〃	木村ひかり		

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第377集

熊堂B遺跡第10次発掘調査報告書

盛岡南新都市開発整備事業関連遺跡発掘調査

印刷　平成14年2月22日
発行　平成14年2月28日

発行　(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
〒020-0853　盛岡市下飯岡 11-185
TEL　(019)638-9001・9002
FAX　(019)638-8563
印刷　(株)五六堂印刷
〒020-0021　盛岡市中央通 3-16-15
TEL　(019)654-5610
FAX　(019)651-2167

©（財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 2002